

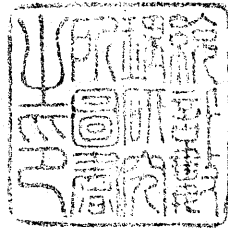
T 02
N 69
50

# 日本における統計学の発展

## 第 50 卷

担 野 水 手 話

喜 重 平 西 手 き 聞



1981年11月18日

1982年 2月23日

1982年 3月 9日

1982年 9月17日

総 理 府 統 計 局 に て

## ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀦信邦\*、森博美\*、山元周行(\* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

西平 水野さんは愛知県の安城のお生まれですね。

水野 安城は本籍地。生まれたのは東大病院の中だよ。

本郷区本富士町何とかといってね。(笑) 大正6年9月5日です。だけど、おやじの出身が愛知県の安城なんで、本籍を動かさないで、そのままでいるわけだ。

西平 それで八高に入学し、サッカーをやり過ぎたわけですね。

水野 いや、サッカーは中学校から。

西平 4修でしたね。

水野 刈谷中学から八高へ行ったんだけど、ぼくが初めに1年で入ったのは横浜の神奈川県立二中なんだ。おやじがぐあいが悪くなって安城へ引っ越して、刈谷中学へ行ったんだよ。

その両方ともサッカーやっていて、野球はヤンキーがやるものだからやるなというような学校なんだ。だから、よりをけっていた。サッカー部に入ったのは刈中のときから。八高のときは、何もサッカーをやり過ぎたんじゃなしに、これはやっぱり学校サボって……。

西平 4修の人は、特権で1年ゆっくり遊んで……。 (笑)

あのころの八高の数学の入学試験問題というのは独特で、むずかしいので有名でしたね、変わった出題で。

水野 ただ公式で数値を変えて解いてみせるだけじゃできないやつなんだ。考えなくちゃね。

西平 先生はどういう方々でしたか。

水野 外で一番有名だったのは椎尾ひとし先生で、この先生は3つか4つ商売があるんだ。まず住職で、あの有名な椎尾弁匠の甥だ。だから、住職であり八高の教授、それにローマ字会の会長か何かで、ローマ字の宣伝を盛

んにやっていた。だから、彼の書いたテキストはローマ字だし、試験問題もローマ字で、坊主だから、「あなうれし、きょうここに試験をすることを得るは」なんて書いてある。(笑)そしてその問題が「1、茶わんを定義せよ」とか、(笑)「恋愛を定義せよ」とか、そんなような問題が出るんだ。

われわれが習うのは、半年かけて、ヒルベルトの21だかある公理をもとに、定理全部をほかのことは何も使わないで証明する。そればかりやってたわけなんだ。文科の連中も大分しごかれていたけれども、いい先生だったと思うな。それが一番有名なんだよ。

彼のもう1つのペルソナは、偉大なる発明家ということで、特許だとかなんだとか幾つか持っている人だ。そういう人だったが、受験生には非常に有名だったな。

その先輩で、近藤鉦太郎という先生がいて、頭がこんなに大きいんで、マッコウクジラの「マッコウ」というんだ。その先生が変わっている根源みたいなところかもしれないな。だけど、先生は何も奇矯なことするわけじゃない。まだその先生は元気で、100まで教授を続けるといっって、いまもどこかの先生をやっているんじゃないかな。もう九十何歳だよ。

それからあと、よく教えてくれる先生では、中西先生といっって、これはほかの先生と違って常識的なんだけれども、結構しっかり教え込んだね。そんな先生が何人かいた。

われわれの前にも、八高からは数学をやったのが何人かいるわけだ。何しろ、あのころ東大で十何人のところを、八高から4人ぐらい入っていたりした。



西平 昭和13年に八高を卒業して、東大の理学部数学科に入学なさったわけですが、そのときの先生、特に統計関係ではどうでしょう。

水野 われわれのときの教室の主任は、掛谷先生なんじゃないなかったかな。まだ、われわれ「タケタン」とっていた竹内端三先生とか、それからもちろん辻正次先生がいたし、もう高木貞治先生はやめられた後なんだよ。教授というと、末綱恕一先生でしょう。そんなところじゃないかな。弥永さんが助教授で、矢野健太郎氏が助手でいたんだったかな。助教授は定員1人だったし、後で河田敬義君が助手でいたような気がするから、矢野健はまだ助教授になっていなかった。先生はそんなところですよ。

3年(後期)\*で、オレは積分方程式やろうかなということをついたら、それこそ河田君なんかが、あんなつまらないものやめろ、これからは確率の方がどうのこうのというようなことで、確率もおもしろいだろうと思って、確率をやることになった。確率の講義の担当は末綱先生だった。そのようなわけで、ゼミで末綱門に入ったわけ。

西平 末綱先生の講義というのは、やはり岩波全書みたいな……。

水野 大体岩波全書の中身の講義だったね。

西平 そのときに、リチャード・フォン・ミーゼスについての講義もあったんですか。あれは後からつけ足したんですか。

水野 末綱さんの話しは、ティーレがどうのこうのはやったけれども、ミーゼスのはあまり印象にないね。

\* 1年を前期、2年を中期、3年を後期と呼んでいた。

西平 まあ付録ですから、後からおつけになったのかも  
しれないですね。

水野 いや、どうも聞いたような……、印象は残ってな  
いけれども。よく聞いていて印象に残らなかったという  
のではないんで、あまりいい学生じゃなかったからね。

西平 確率論が講義としてあったんですか。

水野 そう、確率統計として、選択かなんかであったん  
じゃないかと思う。

西平 統計の講義は実際はなかったんですか。

水野 統計というそれだけでも、パラメーターとか  
なんかが統計になるんだろう。要するに、あれ以外の統  
計というのは何にもなかった。それは、われわれが統計  
といっているのと大分違う。何しろそのころは何にもな  
かったから。

ゼミのときに、クラーメルのディストリビューション  
オブ・ランダム・バリアブルズ（「分布論」）をやった  
んだ。ところが、どんな先生だってそんなもんだろうが、  
末綱さんについているのは3人ぐらいで、1人2人休む  
とディスカッションが直ぐ回ってくるんで、苦勞しちゃ  
った。(笑)

西平 そのとき確率をやったのは水野さんだけですか。

水野 確率はね。確率というのは、そのころまだあんま  
りやってないんだな。

西平 それは後期の時のことですね。

水野 そうそう。

そして16年の3月に卒業したけれども、われわれは、  
要するに戦争で授業の短縮とかなんかにひっかからずに  
大学までまともに出た最後なんだよ。

西平	そ	う	で	し	ょ	う	。	ほ	く	は	16	年	に	中	学	卒	業	で	。	浪	人	し	た	ん	で	す	か	ら	。	そ	う	し	た	ら	戦	争	が	始	ま	っ	た	の	で	び	っ	く	り	し	た	ん	で	す	。																																																																																																															
水野	ま	だ	の	ん	び	り	し	て	い	て	。	口	が	あ	っ	た	ら	勤	め	る	と	い	う	こ	と	だ	っ	た	。	九	大	で	助	手	か	な	ん	か	を	採	る	と	い	う	ん	で	。	ま	か	り	間	違	え	る	と	北	川	敏	男	の	弟	子	に	な	る	と	こ	ろ	だ	っ	た	ん	だ	よ	。	(笑)	だ	け	ど	。	勤	め	な	い	て	。	結	局	大	学	院	に	残	っ	て	の	ん	び	り	と	し	て	い	た	ら	。	12	月	に	戦	争	が	始	ま	っ	ち	ゃ	っ	た	。																																												
	た	だ	し	。	大	学	院	へ	行	っ	た	と	き	に	は	。	何	か	ア	ル	バ	イ	ト	と	い	う	の	で	世	話	し	て	く	れ	て	。	工	大	に	行	っ	た	。	工	大	で	は	渡	辺	孫	一	郎	さ	ん	だ	け	が	教	授	で	。	早	川	康	武	氏	が	助	教	授	だ	か	で	い	た	ん	だ	。	そ	れ	で	演	習	の	手	伝	い	を	せ	よ	と	い	う	の	で	。	1	週	間	に	1	回	黒	板	の	前	に	立	っ	こ	と	が	あ	る	わ	け	だ	。	も	う	1	日	は	準	備	か	な	ん	か	で	。	2	日	ぐ	ら	い	来	い	と	い	う	わ	け	だ	。	行	っ	て	。	1	日	は	渡	辺	先	生	と	碁	を	打	っ	た	。	(笑)
	あ	の	こ	ろ	は	。	食	堂	で	も	「	高	等	官	食	堂	」	と	書	い	て	あ	る	ん	だ	。	覚	え	て	い	る	け	れ	ど	も	。	手	当	が	1	カ	月	40	円	で	。	1	週	間	2	回	行	っ	て	40	円	と	い	う	の	は	悪	く	な	か	っ	た	。	ウ	ナ	井	が	あ	そ	こ	で	40	銭	ぐ	ら	い	だ	っ	た	か	ら	。	な	か	な	か	楽	し	か	っ	た	。																																																																			
西平	渡	辺	先	生	の	演	習	と	い	う	の	は	何	の	演	習	で	す	か	。																																																																																																																																																
水野	渡	辺	先	生	が	微	分	方	程	式	や	る	ん	だ	。																																																																																																																																																					
西平	大	変	で	す	ね	。																																																																																																																																																														
水野	微	分	方	程	式	な	ん	て	。	そ	れ	こ	そ	大	学	で	は	解	か	な	か	っ	た	の	を	や	る	ん	だ	か	ら	。																																																																																																																																				
	そ	の	と	き	軍	の	委	託	学	生	で	。	大	尉	な	ん	か	も	い	た	り	。	オ	レ	よ	り	大	き	い	お	じ	さ	ん	み	た	い	な	の	も	い	る	ん	だ	。	そ	こ	ら	辺	で	触	れ	合	っ	た	人	た	ち	が	ど	こ	か	に	い	る	ん	だ	ら	う	け	れ	ど	も	。	こ	っ	ち	は	全	然	覚	え	て	な	い	な	。																																																																														

何しろ12月に戦争が始まって、その間に召集延期をしたから徴兵検査があるわけだ。オレは目が悪いから二人なの丙だと思っていたら、基準を変えちゃったんで、第1乙種合格ということで、17年の1月4日に入営しろというんだ。戦争が始まって1月しないで、浜松の高射砲第1連隊に入った。そのころ、大体数学なんかやっている男で現役でとられたのはいないんだよ。徴兵検査を受けた場所が悪かったらしいんだな。

西平 渡辺さんの「確率論」が裳華房かどこかから出ましたね。あれはあのころもう出てたんですか。

水野 もう出ていた。あれはテキストとしてではなく、どこかでぼくははぐったような記憶があるんだけれども、高等学校でそんなにたっぷりやったわけじゃない。大学じゃ末綱さんのあれで、あの本はやらなかつたような気がする。確率というとなあの本ぐらいじゃないかな。あのころ、数理統計の方は少しあったけれども、確率というとなああまり見なかつたから、あれぐらいしか思いつかないね。それは、薄い、公算論とかなんとか、少しはないことはなかつた。

西平 兵隊へ行くころは、まだ統計をやるとかなんとかいうことはなかつたわけですか。

水野 大学院で確率やっているだけで、どこなんていうことは全然。

現役で兵隊に入ったんだけれども、幹部候補生になって、千葉の幹部候補生学校へ来たら、ここで演習中に大けがして、結局足かけ3年陸軍病院に入ることになったんだ。入ったときはまだ勝っている方で、だんだんに負けてきて、陸軍病院なんというの、わりあいにもそうい

う意味の影響がゆっくり来たりしているところだから、  
 わりあいになんべりと過ごしていた。

そのときに、オレはコルモゴロフの60ページぐらいの  
 「Wahrscheinlichkeitsrechnung」と、フレシエだかの  
 フランス語のバリアーベル・アレアトワールを訳したこ  
 ともあるわけなんだ。コルモゴロフのはどこかにノート  
 があったよ。どうやらフレシエの厚い本も、陸軍病院で  
 訳していたらしいんだな。考えてみると、オレはコルモ  
 ゴロフのことしか意識なかったけれども、フレシエのも  
 どんなふうにして訳したか覚えてないけれども、とにかく  
 完全に訳したと記憶する。

西平 水野さん、私物の字引きが……。

水野 あれは一番大事な辞書なんだ。中学校へ入ったと  
 きに、おじさんが買ってくれた。三省堂で昭和5年ぐら  
 いに出ていたコンサイスなんだけど、厚くて大きいんだ  
 ね。みんなは珍重しないんだけど、中学生にも目が悪く  
 ならぬようないい辞書で、いまでもオレはあれしか使わ  
 ない。ただ、いまじゃ、中を引いても訳は全然ダメだ。

西平 けがをされたときの話はそんなものですか。

水野 まあそうね。何しろオレも命なくなるようなけが  
 だったから。そこでけがして、結局全然治らないで、病  
 院をたらい回しになっていた。

われわれのところだと、船団防空だとか、それから、ア  
 ツツだとかなんとかいろんな島に高射砲を据えて、玉砕  
 やなんかが多いんだよ。けがして病院にいたんで、どう  
 やら命が助かっているわけで、「戦没学生の手記」という  
 のに72人ぐらい手記が出ている中で、軍隊の関係なんか  
 で4人はオレが知っている人間なんだ。もしそれを統計

的なサンプルとしての推論に使うと、戦死したやつは5%はオレの知り合いだというぐらい、われわれの近所のやつがワツと行って、訓練されて、散っちゃったんだ。

17年の7月にけがをして、結局家に帰ってきたのは19年の9月の末か10月。それぐらいまで陸軍病院にいたんで、命の方は取りとめた。

西平 そのときは、家というのは岡崎ですか。

水野 岡崎です。そのときにはまだびっこをひいていたし、傷がふさがらなかった。だから、帰ってきて2〜3年間は、傷痍軍人記章つけて、つえをついていたんだけれども、傷痍軍人記章を落っことしちゃって、足の方はそのうちに、びっこをひいたりなんかしなくて済むようになっただけけれども、あの傷痍軍人記章というのはなかなかきれいだったんで、惜しいことをしたと思うんだ。

西平 20年3月というと、まだ戦争中に統計数理研究所の所員になったわけですね。

水野 ええ。帰ってきて先生などに相談したら、ちょうど統計数理研究所が19年の6月から始まっている。何しろおまえ確率やったんだから、ここなんかいいからどうだというので、それはもうありがたい、ぜひお願いしますというようなことで、ちょうど20年の3月6日、地久節の日に、小川潤次郎君と2人発令になったんだ。統計数理ができて、6月に、河田龍夫、坂元平八、松下嘉米男、その3人が初めからで、その次にわれわれで、それから後で、林知己夫君とか青山博次郎君が発令になった。

ただし3月というのは、統計数理研究所は上野の学士院にいたわけだけれども、もうあそこにもいられないからといって、さっきも守岡隆に聞いてみたら、飯田の方

へ疎開しかけていたさなかぐらいのときだよ。掛谷先生が所長をやっておったわけだが、掛谷さんは東京を離れられない。ただ、ほかの統計数理研究所の連中は、みんな飯田へ行っちゃったんだよ。掛谷先生から、「おまえたちは東京でがんばれ」という言葉を聞いたようにオレは記憶している。助手も飯田の方へ行っちゃっていて、初めからの任官じゃなしに、途中からの任官なのかな、浜田君と池田君と橋爪、それからあと、いまも研究所の部長をしている藤本熙なんかもそのころから研究所に出入りしていたと思うんだけど、ほんの少数の者が東京に残っていて、学士院にもいられなくなって、高田老松町の細川邸の中のギャラリーというのか倉庫というのか、コンクリートのいい2階建てかなんかだったけれども、そこへ疎開した。研究所は結局、後で飯田から戻ってきたときにも、みんなどこへも行くところがなかったときには、全部あそこに集まった。

西平 研究所へ入って、初めはどういうことをしたんですか。

水野 それがだが……。何しろ小川先輩がいる。彼もノモンハンで苦勞してきた伍長かなんかの経験があるわけで、統計数理研究所で何をなすべきかというので、よくいろいろ議論をした。というのは、統計でも、どういうことをやったらいいかというのは何もないわけだろう。一体どんなことをやったらいいかというのは、暗中模索というんじゃないんだけど、要するに、すべて自分で考えて自分たちで決めていかなくちゃいけなかった。

西平 つくるときは、やはり一応軍の後押しがあったりしたという話を河田さんなんかもおっしゃっていますけ

れども、軍の仕事ということは全然ないですか。

水野 いや、あったんだよ。というのは、まだ戦争中だから、そう頻繁じゃないけれども、軍人なんかがやってくるんだよ。大本営から直接オレのところへ来たわけじゃないくて、掛谷所長のところへ来るのか、それとも専任の研究員である、たとえば河田龍夫がこっちへ来たときとか、または兼任ではあるけれども、北川とか増山元三郎とか、そこら辺なんかに話そうとして来るのか知らないが、大本営から来て、そのうちに本土上陸は必至であるから、どういうぐあいに機雷を敷設したらいいか考えてほしい。そうしておいて、確率が1じゃなしに、1よりも大きくなるよう考えてくれなんていうから、こっちはカッカして、いまごろそんなことをいつてくるのは何だなんていつていた。それから疎開していた連中なんかは、もちろん軍に頼まれたりして、弾道計算とかそういうことをしてたわけでしょう。だから、戦争中は自分たちの研究だけやっていればいいというわけじゃなくて、委託研究とか、共同研究とかいうか、何かしていなくちゃいけないということは当然あるわけなんだ。

それでもそんな問題ばかりしているんじゃないくて、一体何を勉強したらいいか、どういうことをしたらいいかということを考えていた。そのうちに終戦になったら、今度はそんなものは何も無いわけで、全部考えていけなくちゃいけなかった。

西平 水野さんは、直接そういうリポートを出したということはなかったわけですか。

水野 ぼくは、軍から頼まれてどうのこうのという直接の関係になったことはない。老松町へ大尉ぐらいが来た



りなんかして2〜3人で話をする、そこら辺には所員として参加して、へへエなんていって聞いていたり、そのくらいのかかわり。

西平 ORというようなものの……？

水野 そういうわけだね。

西平 もう少し戦争が続いていたら、あるいは研究所がもう少し早くできていたら、そういうこともどんどんやられたでしょうね。

水野 そりゃそうだね。弾道だけじゃなしに、あたりまえのことなんだけれども、たとえば、高射砲で1発撃つなら飛行機をねらって撃ちゃいいんだけれども、2発、3発撃つんだと、ある程度離して撃った方が弾幕が広がっていい、それをどうするかなんということもそのころ聞いたんで、ちょっと記憶に残っている問題だが、他にもいろんなのが幾つかあったと思う。だけど、小川君やオレの場合には3月からだから、そうあまり……。

西平 ある意味じゃ、火を消して歩いている方が大変だったわけでしょう、逃げまどっているというか。

水野 そうなんです。ぼくはそのころ大田区の鶉の木、下丸子、久ヶ原、あのあたりのおじきのところにいたんだけれども、何しろ、細川邸へ来るようになってから、目蒲線で来て、省線の飯田橋から老松町へ上がったんだけれども、あちこちで電車がとまっちゃって、歩いて帰ったりしたことがあるわけだ。オレは、本当に老松町から鶉の木まで歩いて帰ったこともあるよ。

電車がとまっちゃって歩くようになったら大変だとい  
うので、中古の自転車をどこかで手に入れたんだな。そ  
いつに乗って通ったこともある。というのは、そのころ

の給料は、これはよく覚えているんだけど、高等官  
7等9号俸というので137円50銭。あのころだと、大学  
文科出が55円で、理科が65円、それがちょっと上がった  
くらいのところだったから。

西平 じゃ、よかったんですね。

水野 それはいい。ところが、本屋へ行っても買いたい  
ものがないんだよ。そのころ本は出やしないだろう。古  
本屋なんかには何か残っているわけだ。本屋へ行って、  
何か買っておいでもよさそうだが、じゃこれこれといって  
こんなに買うんだよ。自転車の後ろにくくりつけて乗っ  
ていたり、「多いから、おやじ預けておくよ」といって  
あくる日行くと、もう焼けちゃっていて、ないというよ  
うなことがある。本当に買ったのは古本だけだったな。

使いようがなかったんです。

そのうちに終戦になるんだ。終戦の詔勅を、掛谷先生  
も采られて、細川邸の研究所の広間で、われわれみんな  
で聞いた。がーがーいったりしてわからないところがあ  
ったけれども、何だか全然わからないというもんじゃな  
くて、それはもちろん意味はわかって、みんな涙流して  
聞いた。若いお嬢さんなんかも補助員でいたけれども、  
みんな、何いってるのかわからないというのじゃなかっ  
たな。

西平 ぼくは札幌で聞いたけど、ちゃんとよく聞こえま  
した。

水野 ただ、いまと違って、あのころのラジオなんとい  
うと、安いというか粗悪なラジオがあったから、そんな  
に音がよくないだろう。だから、悪いラジオでそれを聞  
いたりしていると、本当にわからなかったこともあるか

もしれない。むずかしい言葉も入っていたしね。

それから後の研究所というのも大変だった。やっぱり軍に協力して何かやっていたんだから、戦犯でどうかなるぞということもあるし、それから、軍部が解体するので、たとえば航空機研へ行って本をもらってくるとか、これで研究所のもののストックができたんだが、実際の輸送司令官、ぶん取り司令官はオレがやったんだよ。

それは二段構えなんだ。軍の方で航空機用のガソリンなんかがあるだろう。これもそのままにしておいたらどうのこうのというので、官公庁なんかで必要なところにくれるということが、わりに早耳で入ってきた。そいつをもらって、細川郎に自動車があったのか、どこかよそのところからガソリンを出して動かしたのか、または軍に頼んで動かしてもらったのかどうか覚えてないけれども、無理してトラック何台か動かして、そのトラックに本をゴソツと積んで、図書館なんかからもらってきたんだ。何でも置いておくの問題になるからというのでもらってきた中に、軍が中国かなんかで押さえてきたやつがあったんだ。そいつが後で、日本が文化財を持ってきてどうのこうのというので、そんなのを整理して返すようなことが、落ちついたずっと後であったと思う。貰ってきたのは、そう大したものはないのかもしれないけれども。

西平 いや、アカデミーフランセーズの字引きなんか、すごく価値があるもんだと思いますよ。あんなもの、どうしてあそこを持っていたのか不思議ですけれども。

水野 そこら辺で、われわれ欲張りだから、何でもかんでも積み上げて運んできた。

西平 あれ立川から持ってきたんですか。

水野 そう。何しろ、それまで研究所の蔵書というのはゼロだもの。19年にできて、飯田に行った連中が少し持っていたかもしれないけれども、東京には蔵書はゼロだ。ありゃしない。それから、学士院から引っ越したりするときに大分もらってきたりしたけれども、あんなドタバタでゴソッと本が入った。

西平 それは9月ごろですか。

水野 それは9月だよ。だから、まだ疎開していた連中なんか戻ってきてないときだ。

西平 それで、今度はいつごろから落ちつきを……。

水野 いつごろからというかわからないけれども、厚木進駐がもう8月の末。9月ちょっと先ぐらいからだ、いろんな意味の米軍との接触があったと思うよ。ただ研究所への直接の接触というのは、そのころはまだなかったかもしれない。あれはいつごろだかわからないんだけど、原爆の調査なんというのをやっているのは、もう1年ぐらいたっているのかな。

西平 水野さん、あれはご存じですか。

水野 原爆の調査は1年ぐらいたってからだけれども、これは増山さんやなんかがやったろう。ところが、あの集計はオレがしてやったんだ。研究所のお嬢さんたち2〜3人で、しかもあれは3万くらいのサンプル採取だったような気がする。連中に、ある程度コードつけたり、分類してもらったりしたんだけど、いつまでも連中を置いておくわけにいかない。オレは大森にいたんだけど、途中で空襲での被害がひどくなってから、何も住むところが焼けたわけでもないけれど、研究所の方へ泊

まり込んだじゃったんだ。ひとり者で、若い助手なんかもそんなのがいたと思うよ。その方が往復で苦勞しなくていいし、そんなのだったから。泊まり込んだのはいつごろだったかな、大分たった後かもしれない。何か夜もやって、二日から三日ぐらいで一応要求されたやつの特許レシヨン済ませた。使ったやつやなんか、集計をどこでだれがやったかもしれないだろうけれども。それはちょっと時期的には飛ぶかもしれない。

これはもう落ちついてからかな、研究所の研究でどういうことをしているという毎月の報告を、司令部の方へ出したりするようになったのは。だけど、そういう表向きのと違って、わりに早く、デミングやライスなんかが入ったミッションが来たろう。それが一体いつだったんだろうな。ミッションの前にだれか来たかな。

西平 その辺のところは、特にいろんなことやっている人は興味を持つものですから、記憶があやしいところはあやしくてもいいですから、ちょっと話しておいていただきたい。

水野 そこら辺のをやるのに、オレちゃんと日記みたいな記録書いていたわけなんで、それ、家のどこかにあるんだよ。たまたま今度区画整理で家を動かして建て直しなんかやると、少し物置きができるから、来年の4月以降だと、そういうデータを見ると、もうちょっと何か的確なことがわかる。いつかあそこら辺は詳しく触れられるようになることを、オレ自身も希望するんだ。だから、时期的なことやなんか全然判然しないんで、いまあまりいわない方がかえっていいかと思うんだ。

どういう筋道からいつてきたのか知らないけれども、

CIEへ出入りする前にも、オレはデミングなんかに会ったような気がするんだ。

西平 佐藤良一郎先生も河田龍夫さんも、やっぱりデミングとは会っている。初めはみんな呼び出してびっくりして行ったら、大変いい人で……。デミングはいろんな人を呼んだらしいですね。

水野 そこら辺が一体いつごろなのか。それからは何度もデミングに会ったり、世話になったりしているの、いつがどれだったのかわからないんだけど、デミングとの接触は、そんなんじゃなくて、軍部かなんかが研究所へ来たことがあったのかな。そこら辺ちょっと、初めの方は小川君にも聞いてみるといい。

西平 小川さんのほうもう済んでいるんです。

水野 そこら辺がどうもシステムチックに話してできないんだ。

終戦になって、そのうちに何か月かたって、飯田にいたのも戻ってくると、いままでやっていたのと違ったところではみんなやらなきゃいけない。そのころ研究所は、1部、2部、3部に分けて、1部が基礎理論、2部が自然科学方面への応用、3部は社会科学方面への応用というようなことで、いつから分かれたのかわからないけれども、3部的なのでは、坂元平八が主任だか主になって、守岡なんかもその助手でくっついていたりした。戻ってきたような連中と大蔵省関係の北川なんかも行って、数理経済学の講義かなんかのお手伝いを願いたいということがあったと思う。というのは、連中は大蔵省研究指導員とかいう辞令をもらった。オレなんかがもらったのは指導補助員で、あのころまだいまの公務員法が出る前だ

から、研究所の給料よりも多い手当をよこした。そんなことで、大蔵省の仕事にはどういう意味があったのか。

西平 あのところはまだ国税局とはいわなかったかもしれないけれども、税金の何かじゃないですか。

水野 だから、幾ら税金が取れるかの推計なんかもやったし、オレも、新円の推計法なんかをやったのがある。これは何も根拠なしに、ただ統計いじくって出てくるような話なんだけれどもね。

あそこでやっていたのは、いろいろ統計の問題があるようだから、それを勉強しようというのが大蔵省の大きなねらいだったかもしれないな。それから直接的には、ある本を勉強しようとか、あの連中が経済やっているなら、ほかの何かないかといっているところで、一体どこでパッシンやなんかと一番初めに会ったのか、近づきになったのかわからないんだよ。

西平 林さんが話されたんじゃ、ちょうど麹町分室へ行くころ、とにかく哲学的な論争をしきりにやった。それで、坂元平八さんと、水野さん、林さんがわりあいに近いグループで、小川さんとか菅原さんが別の派で、そんなこともあって、水野さんは、世論調査、世論調査と相当早くからいっていた。林さんは、世論調査なんてできるものではないと思っていた。だから、そういう点では、初めは非常に差があったということをしきりにいっていますね。

水野 平八と林君とは組みたいになっていたけれども、林君の方は少し後で入ったから……。林君が入ったのはいつになっている？

西平 戦後ですからね、とにかく20年の秋ぐらいですよ。

水野 だから半年ちよつと後だ。何しろ、林君の手続や  
 なんかオレたちがしたんだから。オレたちも統計組で出  
 てきたわけなんだけれども、経済のそういうようなので  
 大蔵省の研究指導員にはなっているが、何かほかのこと  
 でやることはないかといっていた。

そのときはいろんな問題があつて、いまの大蔵省に根  
 拠を置いていたけれども、役所の方でいえば、戦後すべ  
 て統計を入れろというので、いわゆる統計の教授連が、  
 あちこちの統計サービスのディレクターになつてどうこ  
 うしたらいいという構想が、大内兵衛やなんかにあった  
 んじゃない？ だから、農林には近藤康男、それから、  
 森田優三が統計局へ来るとか、そんなときだった。農林  
 省では米が一番問題だったんで、収穫高推定とか、そこ  
 のサンプリングやなんかは非常に問題だった。だから、  
 前からいた所買なんかは、直接農林省の連中に協力しろ  
 というようなことをいわれて、出入りしていたかもしれ  
 ないし、そうじゃなくても、われわれも東拓ビルで、農  
 林省のどの調査をどうするこうするなんというのを、問  
 題を見て一緒に論じたりなんかした場面が幾つかあった  
 と思うんだ。だから、農林関係の何とかというのが大き  
 かったかもしれないな。だけど、農林省の米麦なんか、  
 だれがやっていたのか。

西平 農林省を通じて牧田稔さんなんかとは……。それ  
 がパツシンやなんかにつながるんじゃないですか。

水野 いや、直接はそうじゃない。輿論科学は農林省の  
 あれでできたけれども、収穫高の推定がどうのこうのと  
 いうことは、むしろ関係ないんだよ。そこら辺を心理の  
 兼子宙さんなんかは、やっぱり戦争中に何か……。



西平 それもみんな聞きました。兼子さんや牧田さんにも。

水野 佐藤良一郎さんと末綱さんの2人ぐらいは、ご協力願えますかぐらいで声をかけたんじゃないか。そこら辺から通り抜けて、じゃおまえたちというかっこうで話があって出かけたのか。オレが行ったときは林君も一緒に行った。だから、輿論科学のは、初めから首突っ込んだけれども、パッシンにつながるのは世論からじゃないね。

西平 そうですか。牧田さんの話を聞くと、世論調査をやっているからというので、いろんなことをパッシンが聞きに来たとか、呼び出されて行って話したとか、そのとき一緒に行ったようなことが、たしか出ていました。

水野 世論のためにはあっちこっちに行ってやった。新聞社に売り込みに行ったり、また君だってやったと思うけれども、世論の集計やってやったりしたこともあるし。

パッシンが Civil Information and Education の Public Opinion and Sociological Research Section をやる前に、やっぱりペルゼルが責任者になったんじゃないかな。

西平 この間初めてわかったんですけど、パッシンは博多にいて、世論調査をやるというので東京に呼び戻されて、そのときペルゼルがあそこの親分だったらしいですね。だけれど、彼は数ヵ月でやめて帰ったっていうんです。そのときに、ジョン・ペルゼルは文化人類学者だけれども、世論調査をやったことはなかった。パッシンは少しやっていたから、それで実際は自分がやったん

だ」という話ですね。

例のP O S Rも彼が いい 出して、P O S Rという単位をつくったっていうから、ペルゼルがあそこのチーフだったときは、何か別の肩書なんじゃないですかね。

水野 そんなのでいいのかもしれない。というのは、ペルゼルが、林君なんかとリテラシーをやったんだよ。

西平 ペルゼルは一度向こうへ帰って、それからもう一度日本に来るときに、ただ来られないから「読み書き」をやろうというプロジェクトを持って来たんだそうです。だからパツシンは、あれはペルゼルの仕事だからといって、自分は全然タッチしなかった。

水野 あれは何年だった？

西平 調査をしたのは昭和22年です。

水野 パツシンがP O S Rの親分で始めたのは一体いつだ。

西平 P O S Rの親分はすぐパツシンになりましたかね。

水野 いや、初めはパツシンだったと思う。

西平 初めはベネットじゃないですか。

水野 いや、ベネットはまだいなかったと思う。パツシンはちょっとやって、すぐベネットになっちゃって、もう後は、パツシンは外れちゃったんじゃないかと思う。

西平 1つは、彼が現役から外れたとか、いろいろあるらしいですね。だけど、ぼくそれはちょっと……。ただ、ペルゼルの後はすぐパツシンには行かなかったです。別の人ですよ。

水野 そうか。いま君のいったように、何か前のと違って、P O S Rになって初代がパツシンで、ここでもうつくっていったと思うんだよ。そのときに、オレ一番初め

にパッシンのオフィスに行ったときに会ったのが、杉と結婚した原田素代だよ。「あら、水野さん」なんて。だから、その話をそんなふうにする前には、ペルゼルがいたと思う。ペルゼルと林君なんかがりてラシーでやっていて、出入りしていたんで、ペルゼルと会ったことがあるくらいで、そんなことから、ペルゼルからパッシンに話が行って、それでパッシンがあれしたのかと思うけれども、それじゃ時期が合わないかな。リテラシーはいつごろだったのかな。

西平 22年ですよ。調査したのは夏ですよ。

水野 オレたちが東拓へ行ったのは22年かな。21年くらいかな。

西平 ちょっと覚えてないけれども、22年の秋は東拓でしたよ。ぼくが9月に卒業の直後に石田正次を訪ねていったときは、細川郎なんです。その後行ったときは東拓でした。

水野 だから、まだわれわれが行くか行かないかぐらいのときに、林君は、リテラシーの関係でペルゼルなんかと会い、ペルゼルとオレは、林君のそんな関連で会ったりしたのかもしれない。そんなので、ペルゼルが、林とか水野とかの話をパッシンにしたりして、そのときにもう平八は追ん出たか、追い出した後で、オレが部長をやっていたから、パッシンもオレのところに連絡してきた。

西平 リテラシーは、林さんは白石さんに。白石さんが下請のあれだったから。そうしたら、いつの間にか白石さんが来なくなっちゃった。

水野 そうか、わかったよ。

西平 白石さんには文部省の方から来たわけですね。

水野 だけど、パッシンがわれわれと接触する前に、ペ  
ルセルとわれわれについての話が何かちょっとあったと  
思うよ。もちろんそのほかに、世論調査のどこかのとこ  
ろにも少しくらい聞いたかもしれないけれども、毎日と  
かNHKとか朝日とか、こういう新聞社の連中の世論調  
査との接触というのは、思うに、やっぱりCIEの後な  
んだ。

西平 だから、パッシンが世論調査を自分でやろうとし  
たけれどもできなくて、予算やなんかも認められなくて、  
新聞社とかそういうところにやってもらうよりしようが  
ない、そういうことを刺激する方向に転じたというんで  
すよ。

そのとき、水野さんも技術的なことで接触が始まった。  
だから、パッシンが新聞社に働きかけるころと同じころ  
なんじゃないですか。

水野 そのときに、パッシンはサンプリングとは何かわ  
からないので、それでオレを相棒にしたことは間違いな  
いんだ。初めのうちは、パッシンの幕僚みたいなかっ  
て何やってるのは他にいなかったと思うんだ。後  
で沖縄なんかへ行った関敬吾さんとか、桜田勝徳さん  
とか、ああいう連中はいたといっても、あれはケーススタ  
ディーの専門家みたいなので、そういう世論調査とか企画  
とかというのはやってない。だから、統計数理研究所ぐ  
らいの名前を聞いて、じゃ、ひとつ部長といっているお  
まえ来てくれというようなことで、行って話したら、じ  
ゃいいから、ひとつ協力してくれというようなかっこう  
で始まったんじゃないのかな。

西平 これもわからないので想像ですけども、1つは

日東紅茶にライブラリーがあって、あそこでいろんな人とぶつかりましたね。たとえばP O Qなんかを一緒にカ一ボンでとって、お互いに交換しようとかね。

水野 それは、いわゆるP O S Rつくって、パツシンが気合を入れて何かやり出してからだ、P O Qやなんかにみんなの意識が行くようになったのは。パツシンは、総理府の方に世論調査所をつくれみたいなことをいうし、それからもちろん、調査を大いにやれ、調査をやる時にはサンプリングはこっちで検閲する、調査票も乗り込んでいってというようなかっこうで。

そういうときに勉強して、それで向こうからハイマンやなんか招んだ。そうすると、こんなものに何が載っているというので、じゃそれを勉強しなくちゃいかぬというので、日東紅茶へ行ってみんな写したということだよ。

一般的に統計数理ぐらゐの名前を、パツシンやペルセルなんか聞いて、じゃというようなところだったのかもしれない。だれのとかが初めてだったか、正確な記憶がないんだけど、行ったときには、パツシンのほかには、杉夫人とそれから斉藤譲治くらいで、彼は英語はしゃべるけれども、そういうことやっていたわけじゃなさそうだし、そんな状況だったと思うんだ。だんだんに若い学生やなんかの、アルバイトみたいなのがふえてはいったけれどもね。

だから、こっちが何も世論調査をどうのこうのというんじゃないに、ちょうど世論調査とソシオロジカル・リサーチで、実際のサンプリングのどうのこうので、しかもサンプリングは、さっきいったように、戦後いろいろ農林省の調査だけじゃなくて、大蔵省のだって、何でも非

常に使えるし、これを勉強せにやらぬとオレはいつていたから、「じゃ、サンプリングやろう」ぐらいのことは林君なんかとやってたんだっただけかな。

掛谷先生のをよくだれかが引き合いに出すが、やっぱりリガットマンなんかの数量化、ああいうのがおもしろいんで、みんなが考えてたんだろうけれども。その数量化でも、心理とか社会とかというんだから、われわれがやろうという分野のてという関係があったんだな。ちょっと待ってくれ、いまの22年？

西平 リテラシーを調査したのが夏。

水野 そのころに、もしかすれば原文のネイマンの論文ぐらい初めて見ているのかもしれない。

西平 きっとそうでしょうね。

水野 そうだよ。特にこっちがあれしたんじゃないなくてもサンプリングというのはおもしろそうだし、やさしそうだし、いろいろ使えそうだし、これはまさに2部より、3部で取扱うのがいいと、数量化も含めてそう思ったのと、その分野が世論調査やなんかで開けてきた。

そのころはまだ君が入る前だから、木村等もいたわけだ。

西平 彼は23年に入った。

水野 だから、木村、橋爪浅治というようなところがオレのところにいたわけだ。そうしてCIEでパッシンと接触した関係で、結局テクニカル・アドバイザーという名前をもらった。給料はくれたわけじゃないんだが、そこにいた時間を、超過勤務みたいななかったかは知らないけれども、その分の金を後でよこしたと思う。それをよこすというんじゃないしに、必要な人間はだれでも採

るとあって、それで西平もあそこに勤めさせたわけだ。  
 西平 ぼくは初め「読み書き」です。終わっちゃってペ  
 ルセルが帰るんで、それでどうするかって……。  
 水野 研究所でもどうかっていったけれども、CIEの  
 方なら採るというので、それでCIEへ居すわったんだ  
 ろう。  
 何しろ、世論調査をやるのに、あそこでデザインをみ  
 んなチェックするといったけれども、パッシンはチェッ  
 クするわけじゃない。みんなオレがチェックするわけだ。  
 日本の世論調査機関は60だか70あったんだけれども、何  
 かやると、そのデザインを見たりするから、その仕事は  
 非常に忙しいというか、仕事の分量があったわけだ。い  
 ろいろおもしろい変わったものも見れた。  
 西平 小山栄三先生なんか、クエスチョネアなんか  
 を見たって言っていましたね。  
 水野 テクニカル・アドバイザーというのはサンプリン  
 グなんだけれども、ときにはちょっと英語をだれかの手  
 伝ってやるというのがあったかもしれない。パッシンは  
 日本語があれだけできるといっても、クエスチョネア  
 の日本語になると、パッシンだけじゃ自信持てないとこ  
 ろがある。そんなのでこっちも引っ張られて、結局クエ  
 スチョネアも、オレがほとんど検閲のコピーを見たり  
 するような感じだった。  
 だから、朝日で何か調査やるとすると、一緒に乗り込  
 んでいて、徹夜でああだこうだなんというのをやっ  
 ていた記憶なんかもある。毎日は、そんな徹夜したこと  
 はないんだけれども、これはまた宮森喜久二君がときど  
 き、話してくれとか、手伝ってくれとか、教えてくれと

かいて出入りしていた。実質的に仕事があったのはNHKだね。井上泰三さん。場所は目黒にあったんだ。  
 西平 いや、その前からですよ。霞が関のNHKのビルの裏側の2階建てのバラックにあったんじゃないですか。  
 水野 そうか、あっちの方が先か。  
 西平 ラジオだけだから聴取率のデザインというので、  
 水野 さんにくっついて、木村とぼくが行ってやった。  
 水野 日本で全般の組織つくったのは、NHKでのが一番先だろう。  
 西平 組織はそうだと思います。サンプリングの場合は林さんの「読み書き能力」の方が早い。  
 水野 サンプリングはそっちの方が早い。こっちは、ただ1回やっただけじゃダメだというので、「輯報」の第1号に出ているのがそうだな。昭和25年か。  
 西平 結局林さんも、いろんなサンプリングのいろんな例はあれ（「輯報」）を見れば出ているなんて。（笑）  
 水野 全国調査の標本、そのときには東京の近所とか中央放送局とかなんとかというので、ちょっと技術的にもおもしろい問題があったと思う。  
 これはある意味でいくと、沖縄のことをひとつたっぷりとしやべらなくちゃいかぬと思うからなんだけれども、沖縄で統計の組織つくったわけだ。この後で、それほど大きくしっかりしていなかったけれども、約900人ぐらいの調査員網を含んだ毎日新聞の全国的な調査組織。  
 西平 それと、パッシンがよい出した産児調節についてのとうとうやらなかった調査。  
 水野 人口は毎日のそれを使ってやろうとって、毎日の中で人口調査を加えた。



西平 そうじゃなくて、カトリックの偉いばあさんがや  
っちゃいけないとって、せっかくサンプリングしたの  
に中止になった。われわれはわれわれで水野さんに怒る。  
水野さんは水野さんでパッシンに怒って、パッシンは自  
分の家にみんなを招いて飲ましたというけれども、ぼく  
は飲まなくて、チョコレートかなんかを出させた。(笑)  
どっちも同じなんです。結局、木村とぼくが実際の現  
場にはいたわけです。NHKが先で、人口が後ですね。  
水野 何しろラジオの聴取率がね。  
西平 後で橋爪とぼくがけんかして、水野さんが仲裁で、  
ビヤホールが開いたからビール飲ませるとって、2人  
でビールごちそうになったから、こっちの方がもっと古  
い。(笑)  
水野 何しろこれは大したもの、いまNHKはどんな  
かっこうでやっているのか知らないけれども、全国のを  
ちゃんと必要なときにできるような態勢にして、ここら  
辺をやった。高宮義雄は初めからいたのか。井上さんと  
行って採ったんじゃないのかな。井上さんにいって  
高宮が入ったか、そのときに高宮がいたんだったかな。  
何しろ、NHKのでそんなふうにできるようになった。  
それから後でも、NHKじゃいろんなおもしろいのが  
あったから、後で例の放送用語の理解度調査なんという  
のが出てくるわけだね。まだやっていれば、いろいろお  
もしろいのがあったわけなんだけれども、統計局へ来て  
から、いままでの研究所と違って役人なんだから、研究  
とかをよそでするなということをいわれちゃって。  
西平 結局CIEは忙しかったけれども、水野さんはい  
なかったですよ。三軒茶屋に移ってからでも、みんなに

仕事をつくるのがぼくの役目で、仕事を与えなきゃならぬので大変だった。木村はニヤニヤしているだけでしょ。(笑)

水野 CIE関係で動いたのか。

西平 何しろ三軒茶屋に越したって、市外電話で都心まで電話かけるのに半日かかっていたんですから。それで水野さんが一度出かけたら帰ってこられないですよ。

水野 パッシンとの出会いで、CIEがああいうことやったんで、日本の世論調査全般とのつき合いができちゃって、大きく公的に、研究所としてくっついたかっこうでやったりしたのは、NHKも大きいし、毎日も相当やっていたし、そのほかに、前からやっていた輿論科学協会があるわけだね。

西平 それでアメリカに行ったのはいつですか。

水野 あのころ、ナショナル・リーダーズ・プロジェクトというのを、カリオアの金を使ってやったわけだ。初めのころは、それこそ国会議員とか知事とかに少しアメリカを見せようというところから始まったんで、一緒に行ったグループに知事かなんかのグループが入っていたりして、われわれもごく初期なんだ。世論調査というのを日本でやるようになったから、これはひとつアメリカを見させろというので、世論調査の方から、実際にやっているというんで、この間亡くなった朝日の磯野(清)、それからCIEの方にいた松宮(一世)、これはどういいうので入ったのかちょっと分からないけれども、こっちはサンプリングというんで、その3人で、1950年の9月か10月だよ。まだ羽田なんて、格納庫みたいな、何も無いところに突っ立って見送りをするようなころだったん

だ。

その目的は、要するに世論調査やなんかをどうやって  
 いるか見てこいというんで、往きは、軍関係の飛行機で  
 サンフランシスコに着いて、サンフランシスコからは、  
 シカゴを通過して、大陸横断の寝台車で3日ぐらいかけて、  
 ニューヨークへ真っすぐ行った。オレたちは佐官待遇な  
 んだから、相当格がいいんだ。そうして大学へ行ったり、  
 それから世論調査機関を訪ねた。どういう順番で訪ねた  
 か、3人で行ったところもある。ところが、松宮はちょ  
 いちょいサボっちゃって、磯野にいわせれば、水野さん  
 と松宮さんとけんかするから、仲裁するのにどうのこう  
 のというんだけれども。(笑) ニューヨークで大分いろん  
 なところを見た。ギャラップなんかもニューヨークにあ  
 ったんじゃないかな。

西平 いや、ギャラップはプリンストン。

水野 そうそう。ニューヨークにも何かあったと思うよ。  
 そしてプリンストンに行ったときには、ポピュレーショ  
 ン・インスティテュートなんかも行ったし、ギャラップ  
 なんかも行ったし、それからワシントンに行って、セン  
 サス・ビューローなんかにも行った。

どこら辺から連中と別れたか、ぼくはワシントンへ行  
 って、センサス局というか、デミングのオフィスに机を  
 もらって1月ぐらいいたんで、どこら辺から、連中とプ  
 ログラムが少し変わっちゃったかもしれない。

というのは、2人は2カ月だか3カ月だかで帰ったん  
 だ。こっちは、それならもうちょと回れというので、  
 1人だけ4カ月ぐらいいて帰ってきた。統計学会に出た  
 り、アイオワなんかに行ったり、センサス局に長くいた

りしたということがあったんで、延びちゃったんだと思う。大学にも相当顔を出して、あっちこっち行った。

西平 あの時きもらってきた別刷りだけだって大変でしたよ。

水野 いや、本当だね。

ネイマンのところへ行って、これがネイマン大先生かと思ったけれども、はっぱをかけられたな。「おまえたち若い者は、おまえたち若い者は」といって、これを読めば先のことは全部わかるみたいなご託宣で、彼のペーパーをもらった。それから後、丁寧に読んでないんだけれども。

世論調査機関と社会学やなんかの大学をみんなで回ったということ。それからこっちは、サンプリングの関係で、統計調査機関とか大学とかを回ったりして、それで見たから、帰ってきてあっちこちで話したし、出かける前に、いまの世論調査協会じゃないけれども、財団法人ではないが世論調査協会をつくって、さっきもちよっといったが、アメリカから世論調査関係の連中なんかを招んで、皆にレクチャーさせるとか、そんなことをやっていた。アメリカから招ぶだけでなく、オレなんかも何度か駆り出されて、あそこでそんな話をしているわけ。だからさっきの浅野さんやなんかでも、理科系の連中というのは、サンプリングなんかやったやついなかったの、サンプリングはみんな水野先生の講話を聞いているわけなんだ。

もっともそこら辺のに行くのに、時期的なのがあってただ世論調査だけやっていたわけじゃない。さっきサンプリングや数量化がおもしろいといっていたけれども、

そのころ An Outline of the Theory of Sampling System をやった。これは、原理的にはちょろいんだけど、こういうちょろいことをそれまでだれもいってやるやつがいなくて、これが1948年ぐらいじゃないかと思う。これをやったので、デミングは何度か出入りして知ってたのかな。デミングは直接の関係はCIEじゃなしにESSで、日本の統計局からは、統計数理のオレたちのところへは何にも表向き接触ないんだけど、デミングが来ると、裏の方からどうしたらいいとかいうと、じゃ、こんなサンプルつくって、こんな集計したらいいという話をしたのを覚えているし、それからデミングが話をするのに、何度かオレも翻訳したこともあると思うんだ。そんなので論文なんかもくれるだろう。そうして、研究所では、ただ写すだけじゃなしに、コピーかがり版して配ったんじゃないかな。

西平 しましたよ。

水野 だから、デミングはそういう普及指導に非常に役だったわけだよ。

西平 それこそ、村岡充子とか小島(三好)嘉江とか。

水野 そこら辺に日東紅茶へ行って写してもらった。

西平 タイプを打たせてもらったり。

水野 そうそう、オレ自身の下手くそこに写してきたものもあるよ。

西平 それをタイプして写すのに、読めなくて。(笑) 木村はもっぱらそれを読む係で、彼女たちがタイプで打って、ぼくなんか6枚目でいいからくださいというのと、6枚目は読めるか読めないかわからないぎりぎりでした。

水野 そうなんだよ。コピーをとるなんてないんだから

ね。

西平 ガリ版で少し刷ったりなんかした。

水野 いままで触れなかったけれども、そのときにもサンプリングとか、技術関係の論文とかのガリ版もあったし、あちこちの話やなんかで、できる範囲では相当広げるようなことはやっていたわけだね。

まだ初めのころは、たしか日本統計学会へ入ってなかった。統計学会へ入れてもらったのは22～23年じゃないのかな。23年くらいかな。

西平 ぼくが入ったのが24年ですから、もっと前でしよ  
うね。

水野 違ったとしても1年くらいだな。というのは、統計学会でも報告しなかったわけじゃないけれども、数学会へはきちんと行って報告していたんだ。この間統計学会でつくった、50年でどんな報告があったというのと同じものを、数学会でつくってくれないのかと思っているんだけれども、数学会では何しゃべったのか全然わからないんだよ。

西平 その題目は「数学」という雑誌に出ている。

水野 出ている？今度一つ調べておこうと思うんだけれども。

何しろこのサンプリングのでも、48年ぐらいにどこかでやったのは書いてあるんだけれども、どうもそこら辺のは印刷したのが見当たらない。

サンプリング・システムとか、バリアブル・プロバビリティーとかということ、オレがアメリカに行く前にデミングが、日本で水野がこんなことしたぞということ、ある程度クチコミで伝えていたんじゃないかな。

デミングはそのころ、要するに統計基準局にいたわけだから、わりにそのことがわかっていて、センサス局へ行ったときも、2カ所ぐらいでこれについて話をさせられた。それからアイオワに3週間かそこらいたときに、2度だったか、研究所の談話会みたいなのをやって、大学院の種に困っている連中に、これでやったらどうだというようなことをいってやった。そこら辺のでやったのが、ホビッツとトンブソンなんというのがそうなんだよ。

ところが、ネタは水野からと一言でもちゃんと書いておけばいいのに書いてなくて、また後でそれを読んだ連中が孫引きをしたりして、アイオワでホビッツとトンブソンがいい出したことのような感じで、このごろの日本の脇本和昌やなんかが書いた本でも、ホビッツとトンブソンと書いてあって、水野ということを書いてない。その辺ちょっとあいまいもことしちゃったようなところがあるけれども、アイオワじゃもちろんそのような話が契機になって、バリアブル・プロバビリティーの研究がそこで盛んになった。

スカットメでも俺の後ぐらいに行って、このトピックスが、それから後ずっとどれほど盛んか知らないけれども、やられているそのもとになっているんだよ。

オレがちょっと気分よくしたのは、アイオワから、シカゴのアメリカの統計大会を傍聴に行って、サンプリングのところで座って聞いていたら、ハンセンだったかデミングだったか、Mr.水野ここに出てきて説明しろといわれて、全然予定外なのにそこで話をするような機会があったりしたことだ。

これは、そのこと自体そうむずかしいことじゃないけ

れども、日本でも統計の貢献があるぞという、その方での一つの種になっている。こんなことで統計数理研究所とか、これが載った「アナルス・オブ・スタティスティカル・マセマティクス」とか、松下の論文とか、ここら辺がもとになって、相当研究所の評判をよくした。それもみんな、世論調査とかサンプリングとか、いろいろなことがくっついたかっこの一つの発展だった。

水野 世論調査でアメリカへ行ったから、また次に沖縄へ行っただということになるんだろうな。沖縄のことは切離して後でたっぷりやるけれども、そのころは、まだ奄美大島と沖縄と全部一緒に占領しているわけだ。奄美やなんかでも、若い連中の動きやなんかで、向こうも手をやいていた。しかも、沖縄本島と違って、それほど軍事的に魅力がないとかで、どうするか問題だった。そのためには、日本では民主主義で世論調査をやっているんだから、向こうでもやれということで、沖縄の方にも世論調査機関をつくりたいという話が出てきて、それをつくれというので、第1回に、CIEにいた2世の石野(巖)中尉が親分になって、そのときに、オレとか、さっきの関、それから桜田さん、小山(隆)さんぐらいで行ったんだと思う。

ところが、結局これは、世論調査機関をつくるというところには行かなかった。けれども、一つモニュメンタルな仕事をしていて、奄美大島の将来をどうするか、住民の世論調査をしてくれ、これによって軍は、これを保有するか、独立させるか、返しちまうか決めるということになった。アメリカの学術会議がSIRI (Scientific Investigation of Ryukyu Islands) の一環で



やっている / つのプロジェクトで行ったわけなんだけれど、それが51年の8月だよ。

始まったときには、飛行機ではなく貨物船の1等で行ったんだけれども、横浜から乗り込んだら、沖縄へ着くのに1週間以上かかった。この間に、命をなくしかけた話なんかもあるんだ。何しろ、サンプルサイズ2000弱ぐらいの調査をやった。奄美の本島と、加計呂摩という島をやった。そこら辺のは、その前に琉球政府でやった国勢調査の調査票なんかとか、資料を使ったけれども、サンプリングから、調査票から、インタビューから、集計から、レポートから、みんなこっちが大部分のことをやったわけ。

何しろそのころの奄美大島なんていったら、方言しゃべられたら全然わからないんだ。また、標準語をしゃべったんじゃ、じいさん、ばあさんがわからない。といっても、1軒1軒歩き回るわけにいかないんで、いま考えてもめったに使わない方法だけれども、連合軍のご意向で、みんなに学校とか村役場みたいなところに来てもらって、サンプルに当たった人間のために通訳をつけた。

通訳って何かというと、小学校の生徒なんだ。標準語と方言と両方わかる。しかも、これが大事なんだけれども、世論調査の結果が、これはちょっと日本人がやったとか、結果を何とかひねってやってどうのこうのというようなことを思わせたんじゃないけなくて、まことに客観的に、何もツイストしてないような結果だということのために、じいさん、ばあさんがいったら、子供たちは思ったとおりにやりゃいいわけた。それを通訳につけて、黒板でカードをめくって質問を標準語で聞くと、その生

徒がじいさん、ばあさんに、いまこう聞かれているよと  
いう。そうすると、じいさん、ばあさんがああた、こう  
だというから、それを小学生が標準語で答案に書く。

そういうかっこうで、結局奄美をどうするかというの  
をやったが、結果がどう出るか大変気にした。というの  
は、インタビューをこっちでやったとき、ばあさんの中  
で、もうとっとと独立しろなんという勇ましいのがいた  
りしたんだ。あんなのは本当に0.2%か0.3%で、99.<sup>(テン)</sup>  
何%が、もう日本に復帰したいということで、客観的に  
も復帰させるのが妥当だったので、そのレポートを持っ  
て、そのときの司令官のところへ行って、報告書を出し  
て、英語で力説をした。

奄美の分離をやったのは、それからすぐだよ。われわ  
れのやった調査が効いたわけだ。そのときに、沖縄の連  
中も、今度沖縄のをやるときにまたいつか…なんていう  
ことをいったんだけれども、沖縄は違うかっこうで戻っ  
てきたわけだ。

この調査票、おれが持っていて、どうも研究所に預け  
ておいたと思うんだけど、引っ越しする間にどうか  
なっちゃったんだよ。

西平 いや、あれは預かりましたよ。一番大事なもんだ  
といわれて、越谷和子が抱え込まされていたんです。だ  
けど、ここへ置いといていちゃいけないって、水野さんがど  
こかへ持っていきましてよ。だから研究所にはないです  
よ。

水野 そうか、どこへ持っていったんだろうな。

そのときのクエスチヨネアとか、サンプルのリスト  
みたいなものはちょっとあるんだ。ところが、調査票が

ミカン箱に1つ、2つぐらいあった。あれ、非常に貴重  
 な、それこそ公文書館に納めてもいいようなものだと思  
 っている。

何しろ歩けるところじゃなくて、ボートを使って島の  
 港から港へ渡ったり、いろいろな苦勞をして回ったりし  
 てやったろう。そんなこともあれだし、何しろ、その結  
 果に奄美大島のことがかかっていたわけだ。

それが契機になって、結局それから後、沖縄の統計と  
 おつき合いするものになったわけだ。そのときに、日  
 本の世論調査の恩人というか、忘れることのできない名  
 前にパッシンがあるように、沖縄の統計で忘れちゃいけ  
 ないのに、死んじゃったけれども、ラルフ・ウォーレス  
 という男がいた。そのときのUSCAR(United States  
 Civil Administration of Ryukyu Islands = 米軍民  
 政府)の統計部長をしていたわけだ。これが奄美へ行っ  
 たときの関連で出入りしたりしていた。それにCIEの  
 関係なんかもあったから、それじゃ沖縄の仕事を手伝え  
 ということ、それに行ったときも、みんなはわりに早  
 く帰ったんだけれども、オレは統計局の手伝いで延ばし  
 て、8月から、クリスマスを過ぎても正月の1日、2日  
 前まで向こうにいたと思うよ。また翌年招かれて行った。  
 というようなので、臨時群島政府といったか、群島政府  
 なんていったのから、それから変わっていった。その間  
 に統計局というのをつくったり、それが変わって企画統  
 計局になったり、統計庁に変わったりしたんだけれども、  
 何回か行って、結局そこで沖縄の統計法もつくり、それ  
 から統計の組織というか、構想をつくるのに参加した。  
 / これは何も初めから常駐していたわけじゃないんだが、

いろんなかっこうで向こうも招んでくれたりしたので。  
 最終的には、琉球政府の統計機関というのは、最大のと  
 きで、職員が五百数十人ぐらしかしら。これは少なくとも  
 も統計屋が考えて、満足できる理想的な配置と構想と、  
 調査の体系とか、こんなふうにしたらというので、向こ  
 うの連中も聞いてくれたりしてやって、それがずっと続  
 いていたんだよ。

ただ復帰のときになったら、全部本土並みにするとい  
 うような要求が強くて、そいつをぶっこわしちゃって、  
 いまの本土の組織にしちゃったんだが、小っちゃな声だ  
 けれども、沖縄であれをぶっこわして惜しいことをした  
 というような話を、ときどき聞くんだ。

いま100万ぐらいの開発途上国というのはたくさんあ  
 るけれども、人口100万の沖縄でやったことは、そこら  
 辺の国で統計の組織をつくる考え方なんか非常にいい  
 見本というか、前例となる。何もそのとおりをまねろと  
 いうんじゃないけれども、そういうものがつくり上げら  
 れた。

そこら辺を築いていくのに一生懸命やった連中がたく  
 さんいるわけで、もう初めのころやった連中は、そろそ  
 ろ退役しているよ。最後には沖縄県の統計課になって、  
 それが、沖縄県の統計課と、沖縄開発庁の中の農林水産  
 部の中の統計課と、2つに分かれたんだ。国の分と県の  
 分に分かれた。その両方を率いていたのが統計庁の幹部  
 たちなんだけれども、1人2人名前を挙げると、県庁の  
 方は宮里茂君で、開発庁の方は座喜味彪好君が率いてい  
 た。座喜味君は、その前も日米琉委員会やなんかに関係  
 していたんだけれども、いまは副知事をやっている。官

里君は去年退役しちゃっている。まだそこら辺の連中が相当残っているわけだ。

そうして、沖縄の統計の歴史をここでつくっておかないといけないので、沖縄というところでも先生を抜きにしてできないから、ご協力願いますというような話が来ているんだ。それは大いに結構だけれども、拙速じゃ、何しろ30年の歴史だから大変だからということをもってあるんだけれども、やっぱりひとつ沖縄のだけをまとめておく必要があると思う。

そんなのも遠因はやはりCIEとの接触で、アメリカの統計屋との関係で、向こうの軍の中でUSCRとつながったりして、それで向こうとの付き合いが出てきた。

沖縄から帰ってきたのは26年で、オレが研究所をやめちゃったのは27年ぐらいだな。28年に統計局に来たと思うから。

西平 27年10月です。

水野 結局、研究所をやめるときの直接というか、表向きの理由としていたのは、国連でリビアの統計のアドバイザーみたいなのを求めている。じゃ、ひとつオレが行ってやってやろうというので、アプリケーションを出したんだよ。アプリケーションを出せばすぐ来るものと思っていただけたけれども、そんなの半年やそこらじゃダメで、1年ぐらいかかる。

なかなか来なくて、公務員住宅に入っていたんだが、公務員住宅は、役所をやめると6カ月でおん出なきゃいけないんだ。研究所にいるんで、公務員住宅のはしりのやつに入れてもらったんだけれども、辞表を出しちゃったし、国連の方がいってこなくてダメになっちゃって、

困った困ったなんていつてるときに、森田さんなんかがちょうどここの研究課長がいなくて、前から統計局へ来ないかといってくれていて、初めにそんな話を聞いたときには、いま行くと研究所の方が心配だから行けないなんてことをいっていたんだが、研究所もやめた、まだ先のことも決まってないといったら、そんなこといわないで、統計局へ来たらどうだ、そうすりゃ家のこと心配なくていいよというわけで、やっぱり半分はその家に引かされて、「じゃ、お願いします」といって統計局へ来たわけだ。

統計局へ来たのは28年で、発令を5月1日かなんかにしてくれないと家出なきゃいけないのを、おん出ないでいいような日に発令してもらって、それで統計局へ来た。

そのときには、もう研究課は松村雅央君がいたから、人口第2課といっていた労働力の課長で、そこで労働力の調査をした。それから後で研究課を回って、2〜3年して役所の組織がえのときに、課をつぶして統計調査官というポストをつくったんだ。統計調査官になったのは32年ぐらいか。

それからずっとやめるまで統計調査でいたわけだけれども、その間に2回バンコクのE C A F Eへ行ったのとローマのF A Oへ行った。国際機関の統計は、各国政府の統計機関からの職員が行ってやらないとダメなんで、人身御供みたいなので駆り出されて行ったりしたんだけれど。行けばまた元に戻る。そんなようなことで日本だけじゃなしに外を少しは意識したり、様子を見てきたんだが、バンコクでもローマでも、そういうような開発途上国の統計をどうするかという問題に取り組むよ

うなことをしていた。そういうようなことで、これは何も深いわけじゃないけれども、いろんな接触とかかかわりが、あっちこっちで出てきたりして、いろいろそんな会議とかプロジェクトなんかに参加することになった。そんなのがあって、統計局でも、やめる終わりの方では「国際担当」というようなことだった。いまでも非常勤で、「国際協力アドバイザー」というような名前つけてもらっているので、国際的な場での話も少しすることができると思うので又次の機会に話したい。

第 2 回

昭和 57 年 2 月 23 日 (火)

総 理 府 統 計 局 に て



水野 この間ちようどテレビで、「奄美の30年」とかいうのをやっていて、向こうでつき合っていた人たちのいろいろな話が出たりしたんだけれども、これじゃ奄美の話もちゃんとしておかなくちゃなと思って、アルバムから昔の写真を出して、きょう持ってきて、そこら辺の話もと思ったのを忘れちゃったんだ。

この前も触れたんだけれども、沖縄との一番初めの接触は、1951年(昭和26年)に、「アメリカのナショナル・リサーチ・カウンスルの、SIRI (Scientific Investigation of Ryukyu Islands)に参加して、日本の社会学者などを含めて」沖縄に出かけたときだった。

そのとき、奄美も沖縄も一緒に占領されていた。初め聞いていたのは、その地域に世論調査機関をつくるということだったけれども、行ったら、世論調査の機関をつくる話はだんだんに消えていった。というのは、向こうで世論調査に直接統計が関係していたのかどうか知らないが、USCAR (United States Civil Administration of Ryukyu Islands = 琉球民政府)に、Program and Statistics Section (企画統計) というのがあった。だから機関をつくるとかいうかっこうだったら、連絡があったろうし、また世論調査とかいうようなのであったら、そこら辺が初めから関係していたんじゃないかと思うんだが、ただ世論調査というよりも、統計一般としてのシステムの方が向こうじゃ大事だとかいうかっこうで話が行き、そのようなものができれば、その一環で世論調査だってできるじゃないかという話は向こうでもしたような記憶があるので、そんなのでそっちの話は消えていったのかもしれない。

1951年には、8月ぐらいから12月までの5カ月ぐらい  
 行っていたんだけど、8月の末ぐらいから、奄美を  
 どうするかについての住民の世論調査をしてくれという  
 ことで、それが結局その5カ月の中の大きな仕事になっ  
 た。そのことは前にも触れたが、関敬吾さん、桜田勝徳  
 さん、小山隆さんの3人の社会学者とぼく、それから石  
 野君と、沖縄のUSCARの方の関係なんかで行ってや  
 ったと思う。

この間テレビに出ていたんじゃない、あそこの人たちがみ  
 んな復帰の運動をしていた。そっちの運動は確かにやっ  
 ていたし、そのことはよく出ていたんだ。然しそれはこ  
 っち側からの報告だった。沖縄のUSCARの方とする  
 と、沖縄より奄美の方が、連中にとっては騒ぎが大き  
 く、しかも軍事的に利用するのは、沖縄の方は相当ある  
 し、広いし、意味があるけれど、奄美の方はそう大した  
 ことはないとか、なくても何とかなるという事があった  
 のかもしれない。それで現地がどんなふうになっている  
 かを客観的に調査せよということだった。だからこの前  
 触れたような調査をした。

そのときに、国勢調査の資料を使ったりというので、  
 琉球の群島政府といていたころだったと思うが、そこ  
 ら辺の統計局なんかの行き来ができたり、そこの人たち  
 とも会ったり、統計の話なんかもしたりするようなこと  
 になった。社会学者と調査したといっても、その中に世  
 論調査をやった連中は1人もいないんだ。

西平 戦前は、世論調査はほとんどないようですねけれど  
 も。

水野 CIEでも、社会学者の連中は世論調査やってい

なかった。だから、調査票をつくるのから、サンプリングから、後の集計、レポート書き、みんなこっちがやって、連中は、こっちの決めた地点で集合インタビューをやるくらいのところで、現地でちょっと手伝ったくらいなんだ。

日本語じゃ民政官とっていたけれども、要するに軍司令官であった沖縄の何とか中将、そのところへ行くのに、プログラム・アンド・スタティステクス・セクションの親分だった Ralph L. P. Wallace というのと、石野と、オレと、3人ぐらいで行って、向こうの連中も勿論報告をしたけれども、「おまえから、その結果から何から説明しろ」というので、いろいろ説明した。

そこで、返せのどうのこうのということをオレがいったかどうか覚えてないけれども。オルターネーティブとして、平和条約の3条には、日本はアメリカを沖縄に対する唯一の信託統治者とする案を国連に出したときには文句をいわないというかっこうで、奄美、沖縄の放棄というのが出ているわけだ。だから、信託統治に対してどう思っているかということ、それから、アメリカに併合するときには、アメリカに入ってしまったから日本に帰るというか、独立ということとはできないから、そこら辺のオルターネーティブの中で、皆はどうなのか聞いてくれということだった。何か99.8%ぐらいの数字を覚えているんだけれども、文句なしに日本に帰りたいといっている。帰らなくちゃいけない理由というものも、向こうの新聞や何かにもいろんなのがあったが、それが客観的に事実だということを書いて、だから返すより仕方ないとか話したと記憶する。大体そんな可能性を決めるための詰め

の世論調査みたいなのをやったから、何かオレもあそこ  
 に行って仕事をしたような気がするんだ。だから後で、  
 残りの沖縄のときにまた調査なんかと、調査などしてい  
 る連中の気の拠りどころにもなっていたと思うんだ。  
 そういう意味で、この間の事情は日本の政府のレベル  
 じゃ知らないことだったが。何しろアメリカの軍が最終  
 的にウンといわなきゃ奄美は返せないわけだ。軍の最終  
 結論を出すための最後の材料として、向こうでそれまで  
 みんながいろいろ文句いったりして、とっておいてもし  
 ようがないということもあったが。しかし、いよいよ住  
 民の心もこうだというので、それを見て、司令官が、も  
 ううるさいから、それなら信託とかアメリカとかはやめ  
 てという、けりをつけさせたのがその調査だった。その  
 意味で、これは非常に大事なもので、これこそ本当にきち  
 んと記録に残して、皆が承知しておかなくちゃいけない。  
 あれが26年で、もう30年たっているわけでそのときに  
 青年というか大人だった人たちというと、もう少なくと  
 も50にはなっているはずだな。そのころ50、60のがもう  
 80、90だから、だんだんに亡くなっているのかもしれ  
 ないけれども、約千数百の数のサンプルを取ったと思う  
 んだ。いまでも1000人以上、そのような世論調査を受け  
 てサンプルになった人がいるはずだと思うけれども、そ  
 のことを知れば「ああ、私たちが行ったよ」というような  
 事もあるだろうな。陸に道路も何もないので、動くのに  
 は警察のモーターボートで、島の周りを回って、奄美の  
 本島と、その下にある加計呂麻という2つの島——これ  
 で奄美の大部分だが——で行った。たくさんある小さな  
 島は調査の対象に含めることができなかった。

それが済んで後まだ1ヵ月ぐらいいいて、12月の末、  
 クリスマスのころになって帰ってきたんだと思うけれど  
 も、その後は統計のことでいろいろ手伝ってくれという  
 話になった。それがもとになって、翌年の1952年（昭和  
 27年）に、まだぼくは統計数理研究所にいたころだけれ  
 ども、5月から8月の約3ヵ月、同じナショナル・リサ  
 ーチ・カウンセルから、今度はぼく1人、SIRIプロ  
 ジェクトの統計の技術援助というようなことで、そのと  
 きのはっきりした名目は覚えてないけれども、来てくれ  
 というので行ったわけだ。

このときには、アメリカのシビリアンの将校のような  
 格で、そのような扱いで向こうにいたわけだ。もうこの  
 ときになると、一応群馬政府から臨時中央政府にかわっ  
 たところだ。それは要するに、沖縄側がそうになっている  
 ので、アメリカ側のUSCARの方は相変わらず同じま  
 まだよ。

そのプログラム・アンド・スタティスティックス・セ  
 クションにウォーレスというのがいた。このウォーレス  
 は、沖縄の行政に来る前は公認会計士をしていた男なん  
 だ。東京でやっていたのか、後で東京でやることになっ  
 たのか……。それから後で、やめて、東京の丸の内に仲  
 間と2、3人でまた事務所を開いてた。そういうのを統  
 計の親分に据えていたわけで、あとは若いスタッフとい  
 うか、初めは係員くらいで、ハワイの2世たちが何人か  
 いた。その中のたとえばクラレンス・タテカワというの  
 は、いま座間の予算会計の方の責任者になっているが、  
 彼はある時期このプログラム・アンド・スタティステ  
 イックス・セクションのずっと後の部長になったりした。

もう一人ミツオ・オノというのは、後でハーバードでPh.D.を取って、それからずっと、統計の方になって、センサス局なんかにも行っていたし、それから後アメリカの厚生省の統計の親分になって、そこをやめてUSエイドのアドバイザーであっちこっち行ったりしているが、いまはフィリピンのミハレスのところのアドバイザーでやっている。この間も手紙が来て、ひとつ一緒に統計のファームを開かないかなんてまた書いてきた。

まだ何人かそういう連中がいたけれども、このウォーレスというのがなかなかの人物で、やめた後で東京で、小田急線のどこかに住んでいたんだけれども、こっちにいて3~4年で死んじゃったんだよ。奥さんはその後再婚したんだけれども、その行方がいまちよつとわからないんだ。だが捜せば何とかなるだろう。これは強引な男だけれども、何しろオレにいわせればりっぱにやってきたんで、沖縄の統計はあんなかっこうできちっとしたものということだった。ちょうどその少し前に、日本では、終戦後統計をきちっとするのでは農林省が一番大きく変貌して、調査なんか也非常にふくらんだところだね。

もちろんウォーレスはそのことを知っていて、沖縄の何かそんなかっこうで大いに変えなくちゃいかぬのじゃないかと考えていたわけだろう。

何しろ人口100万の小さなところで、日本と同じように総理府の統計局だとか農林省の調査部だとか、そんなことやっていたんじゃ、人口10人の国でも、もし元首とかお巡りさんとかをつくっていけば、やっぱり最低1人ずつは要るわけで、もう全部公務員にしたって、大きな国で必要な役所なんかできるわけじゃない。普通の比例

的なまねはできないわけだ。だからむだは徹底的に省いて、安上がりになるようにする。いままで日本の県としてこうだったとか、日本じゃこうしているとか、アメリカじゃこうしているなんて、そんなものまねして何かやったってとてもだめだ。人口のあるのが70くらいの島だけれども、そこで1つの独立した地域として、そいつを行政のために、人口関係の統計のことはいまは抜きにしても、農業でも面積がどれだけだ、どれだけとれる等々。ことに食糧問題は喫緊なものだった。まだそのころは、沖縄じゃ、農家ではもちろん米なんて食えるような状況じゃなかったわけで、サツマイモなんか食うのだって、それが足りるものやら足りないものやら。戦後はやはり、アメリカから食糧の輸入をしていたわけだ。農業の統計の制度をちゃんとするというのが、そのときの大きな仕事だった。そうなると、統計調査にあっちこっちの役所がタッチするのもあれだから、農林の調査局と統計局とは両方ともつぶすというか、1つに統合してしまえということだった。

そこで一番先に欲しいといっていたのは、面積がどれだけだとか、収穫高がどれだけか、やはり日本で収穫高と農地調査なんていって、一番初めに大きな問題になっていたことが視点だったろうね。そこら辺の調査というのは、結局土地の標本を取って調査する以外にない。日本の方で筆という土地の単位がある。これは、日本では土地証券というわけじゃないが、土地所有とかなんかの単位になっている。これは大きさが決まっているわけでも何でもなくて、田んぼとか畑が1枚とか、また1筆の宅地とかいうのになっているわけだが、これが所有権と

か借地権なんかのすべてのものになっている。これが土地の単位として認識できるもので、それ以外のは簡単に認識できるものがないんだ。大きい土地、何々村の範囲なんというのは、とても調べられない。この筆だって、大きいやつは大変なんだ。それじゃそれよりも、見たところの畑とかの方が明確でいいというようなこともちよっと見には考えるんだけど、これは、耕すたんびにその境がはっきりしなくなったり、ことに面積だとか収穫量——収穫量というのは坪当たりの収量に面積を掛けて出すのが普通のやり方で、そのために、面積を出す面積調査というのがまず問題になってくる。この面積で簡単に縁なんか1割、2割違っちゃまうわけだ。しかも同じところを調べないことには、種まいたところと収穫したところなんか……。だからそういう意味で、建物なんかと違って畑というのは、目に見たこの畑なんというのがなかなか単位にとれないわけだ。

沖縄は戦火のために、それこそ島じりといったら、筆にせよ境がわからないくらいになっていたところもあったけれども、何しろ使えるとしたらこれしかない。そのようなところでも、明治のときにつくったレジスターの記録がなくなっているようなところでも、USCARの中に、やはりレジストレーション関係で、土地何とか課というのがあった。それが現実に、そのころいた人たちが家を建てたり、田を耕したりする、その権利関係の戦前のをそのまま継承しているわけじゃなくても、そこで確定した単位というものが法的には存在していた。だから、そこら辺のをを使って、その標本について調査をする。そこで面積やなんかを調べよう。それから坪刈りと



いうか、4反量やなんかは、その中からさらに小さな面積  
 を取って、そこで実際に戦後本土でも導入されていた  
 Objective Measurement (客観的調査法)、実測調査を  
 しようということだった。ただ統計庁だけじゃできない  
 んで、名護の農業試験場の金城君——場長じゃなくて、  
 少なくとも部長くらいになっていたが——彼が主になっ  
 て、その何人かのスタッフとやった。  
 統計局は、系数という人がそのときの局長なんだよ。  
 いまでもまだ健在だが、もちろん仕事はやめている。農  
 林の方は外山君というのが局長をしていたんだけど、  
 両方統合したところの局長には外山君がなった。外山君  
 は奄美の出身だったのかな。奄美が返還されたとき、奄  
 美から琉球政府に入っていた連中はみんな首切られたと  
 いうか、やめたようなかった。それでじゃないかな、  
 彼は鹿児島に戻ってきて、鹿児島の県庁の統計課に入っ  
 て、そこで亡くなったんじゃないかな。  
 主として農業調査のをつくったわけなんだが、それは  
 研究所の「Report of the Survey Design for Agri-  
 cultural Production Estimates in the Ryukyu  
 Islands」って、「アナルス」に書いたもので技術的な中  
 身はあるから、それはもう触れないでいい。ぼくの記憶  
 だと、100万筆ぐらい沖縄に土地のユニットがあったと  
 思うんだ。そこから3万ぐらい、第1次ので拾いに行っ  
 たんだよ。そして、そいつをある程度実地調査して、幾  
 つかのサブサンプルに分けて、経常的には、1回の調査  
 には極端にいきや1つだってできるし、半分だってでき  
 るわけだが、一応最終的にやったのは、5つのサブサン  
 プルを毎月調査するようなかっこうで、それを組合せが

違うようにやっているので、同じ土地が2カ月続けて調査されたり、間1カ月おいて調査されたり、半年おいて調査されたりするとかというような関係で、幾カ月の間に畑がどう変化したかという様子がわかるようにする。  
 たとえば、前に空地であったところが植えつけられたとか、ちょうど植えたところが今度は収穫されたとか、そういう関係で、その収穫の方に使う面積だとか、いまだうこうなっているなんというのが出せるわけだ。そんなふうに、いわばサブサンプルに組んであるということ。  
 そのためには、日本でやっているような臨時の調査員じゃだめで、常任の、365日それをやることが仕事であるような、調査の実務を担当する調査員というのを置くことにした。日本でも、農林関係じゃ大体そんなかっこうで初めからしていて、それがいまでも残っているわけだ。初めのときには何人だったか記憶ないが、何しろ100人じゃなしにもっとたくさんだった。その調査員として初めのころに採用された人たちが、だんだんに調査員から指導員になり、指導員から係長になり、課長になりというふうに、優秀なのが抜擢されたりして、沖縄の統計を担っていく連中になった。ほとんどの連中が初めはこの調査員を経験しているわけだ。そういうシステムができて、全琉にわたっていつでもパツと調査できるような体制をつくった。ウォーレスがそのようなことを、予算の面だとか組織の面だとかいって、中でやらせるようにしないことには、いかにこっちがそういうぐあいにしたらいいといったってどうにもならない事だった。  
 それから農事試験場でいろいろ実験したりして、1坪か2坪、最終的には4分の1坪とか2分の1坪とかだっ



たかな、小さな土地の単位を取って、その中で、たとえば稲なら刈り取って調べるとか、イモなら掘り取って調べるといふ収量調査の方法、この2つを大きく決めるぐらいが、27年に行ったときの農業関係の仕事だったと思う。

これが相当続いていたんだけど、ウォーレスなんかもいなくなったし、またこっちが日本からよそに行ったりして、後で沖縄の連中だけでやっているときに、金がかかる、集計の方がどうのこうのというので、この方法を全部つぶしたわけじゃないんだけど、農業をやっている世帯主からのインタビューでデータを出すように、途中で変わっちゃったことがあったと思う。しかしこれは、たとえば台風なんかがよく来るんで、台風の被害があったらそれはどれだけの被害であるかということ——これはランドサンプル（土地標本）といていたんだが、この土地標本の1つとか2つを使ってそこだけ観察すれば、即日でも何でも、サンプリングで推計できるようになっていたんで、そんな利用をしたりした。

後の方で細部はどのくらい活用したか、これはちょっと沖縄の連中に聞かないとわからない。

西平 その100人ぐらいは専任なんですか。

水野 うん。初めは、さっきいった3万のがまずどこにあって、その畑はどこからどこであるか、こいつを現地で確認することが大変なんです。これに2〜3年かかったと思う。それが決まってわかったらば、もう自分の担当というのがわかってるんだから、いつでも同じところへ行っただけ範囲を見れるわけで、そこがいままで荒地だったのが耕されたとか、何かが植わっていたのが刈り取

られたとか、どうこうなっていたとか調べればいい。面積の測定でも、何も非常に精密な測定器具があったわけじゃないから、歩測で正確な距離や長さがわかるようにというので、あっちこっち下見に行ってみて、こっちもその陣頭に立って訓練だとかやったから、古い連中はときどき、あれでしぼられたというような話をしたりする。

そんなので、初めに確立した面積が出せる。それから後も、行ったら、たとえばその半分に何かが植わっていたという、その推定は、もちろん視察だとか足の距離ではかるのだから、精密な測定からいったら相当な誤差があるわけだけれども、ただ土地台帳の何坪なんというのとは全然比べられない客観的な根拠のある数字になっていたわけだ。

西平 その人たちは作報みたいなわけでしょう。

水野 作報じゃなしに統報だよ。

西平 どういうことをやっていたんですか。

水野 初めは全部が採用されてなかったかもしれない。というのは、これまた少し後の話の世帯標本なんかと絡んでくるから。沖縄では農業調査でこれが始まったわけよ。そして、その農業関係のは土地標本というシステムで調査した。

沖縄の統計というのは、土地標本と、世帯標本と、事業所標本だ。何しろ沖縄の必要とするありとあらゆる統計情報を獲得するための調査単位としては、いろんな違った統計もあったんだけれども、それを調べてみると、分析の結果、この3種類のサンプルがあれば、まず九十何%の必要な統計はみんな出せるということになったわけだ。事実、これで出せないようなものは、非常に特殊

なものでなきゃないわけ。何しろ、世帯なり人間の標本があるわけだろう。土地標本でパーセル——筆というの  
はパーセルとっているが、その標本もある。それを取る  
ためにはもうちょっと大きな、何とか標本系とはいわ  
ないけれども、国勢調査の調査群のサンプルが入ってい  
るわけだからね。それから事業所で、その事業所を広義  
に解釈すると、何も生産事業所だけじゃなしに、学校だ  
って病院だってみんな事業所に入るわけだ。普通何かの  
調査の9割5分ぐらいはそれで片づくんじゃないかい。  
一番初めは農業のだけで行ったのが、それから後に、  
この3つの標本系に対して必要な調査員を常勤で保有す  
るというかっこうで、沖縄の統計システムをつくったわ  
けだ。多いときには三百何人いたと思う。それをつくっ  
たときには、臨時の調査員なんかじゃなしに常勤だった  
けれども、そのうちに、ちよこちよこふやしたりなんか  
するのに、そこら辺の考え方がルーズになったというか、  
非常勤みたいなものを入れるようなことも後では出てきた。  
根本的には、企画したりする中央だけじゃなくて、実際  
の調査をするフィールド関係の調査員、指導員、それが  
上がってきたら集計をする者、これを全部常勤でやって  
いた。そのかわり、琉球政府で必要とする統計調査はど  
んなものでも、普通のは、この中で片づける。国勢調査  
なんかの全部やろうという大がかりなものは別ですよ。  
そのときにはもちろん臨時なんかがやらなくちゃいけな  
いけれども。

西平 それはみんな琉球政府の公務員だったわけですか。

水野 そう。

西平 政府の統計局みたいなところに出勤する……？

水野 いや、何しろ統計局に出勤したら、それこそ島な  
 んかへ調査に行かれやしない。事業所のは別として……  
 事業所は現に変遷しているし、ほかのとずいぶん違うん  
 で、これは一番後になって毎月の標本調査系というのが  
 できてきたわけなんで、経常的な標本調査のシステムで  
 ある土地標本と世帯標本をやるためには、現地にいなく  
 ちゃいけないから、それこそ極端なことをいったら、自  
 分の家から調査に行ったらいいと行ったんだけれども、  
 公務員がそれじゃどうもまずいとかいろんな議論があっ  
 て、各市町村役場にオフィスを置くことにしたんだ。  
 ところがやはり、いわゆる役人的な発想でそれはまず  
 いからということになった。なぜかという、市町村で  
 監督者がいないんじゃないという議論だよ。そのため  
 に、地方事務所に出勤して、そこから行くようにという  
 ので、非常に効率が落ちちゃったんだ。なぜかという、  
 そのときにも島の方は一部残したんだったと思うけれど  
 も、遠いところだって、一度、名護なら名護の事務所へ  
 行ってから国頭まで行かなくちゃいけないというんだか  
 ら、むだな話さ。初めから国頭の市役所へ行ったくらい  
 で、指導員の方が巡回して何かしたっていいんだけれど  
 も、よその国で何かやったとき、やっぱりどこか決まっ  
 た事務所へ行かなくちゃいけないなんてこといわないで  
 やっているのはあったが沖縄ではそれができなかった。  
 そのような地方事務所というのは、沖縄本島で3カ所  
 だったかな。北部、中部、南部で、南部が那覇だったの  
 かな、それから宮古、八重山、奄美と、もつつくった。  
 そのもつは、何も調査員をやるためにつくったというん  
 じゃなしに、調査員が市町村にいたって、それがなくち

やいけないというんで、初めからそのもつぐらいを考  
 えていた。ことに、その各群島別とか、沖縄北部とか、南  
 部とかの別に結果を出したいとか、いろいろな要請があっ  
 たので、それぐらいは必要であるということだった。そ  
 れが、後では調査員が詰める場所ということになっちゃ  
 ったんだけれども。それで農業の方は動いていたんだ。

ぼくは、研究所をやめて統計局へ来た後、3度目の沖  
 縄行きをした。これは32年、だからそれから5年たって  
 今度は琉球政府から招待された。いまちょっと記録を見  
 ると、そのときには琉球政府統計部長で署名した収入印  
 紙押した契約書かなんか出てきたよ。そんなかっこうで、  
 統計局に来てから行ったんですよ。もちろん表向きには、  
 琉球政府から総理府統計局に、統計技術指導のための係  
 官派遣というようなことでなのだけれども、このときの  
 旅費滞在費一切は向こうで出した。

統計をそのように一元化してしなくちゃいけないとい  
 うことは、そうたくさんはよその国にもなかったと思う。  
 統計が1つの役所になっているところはあるんだけれど  
 も、統計省なんというのはあるわけじゃない。要するに  
 農林省やなんか、日本でいう各省と同じぐらいのステー  
 タスを統計に与えるようなシステムまでつくったのはや  
 っぱリウォーレスで、よくがんばってやったと思う。た  
 だそれも、だんだんにUSCARのコントロールが少し  
 ずつ薄くなってきたんだらうな。また琉球政府が本土並  
 みに何かするというときに、ウォーレスみたいに突っ張  
 るやつがいなかったりして、だんだんに弱ってきた。だ  
 から、初めはよその各省と同じステータスだったのが、  
 企画統計局なんていうのに、企画部と統合されちゃった

り、今度は企画部の中の統計庁というようなかっこうに  
 なって、結局復帰まで統計庁というかっこうで続いていた。  
 名前はともかくも、その中で、約500人ぐらいの常  
 勤で、フィールドオフィスを5つ持ってやっていたとい  
 うんだから、それはりっぱなものだったんだ。  
 統計局へ来てから、今度は世帯標本調査というか、労  
 働力調査とか家計調査とか、こういう関係のをやってく  
 れというので、沖縄へ行った、これが32年で、そのとき  
 に結局、世帯標本調査というのを確定したわけだ。  
 1972年に沖縄が復帰したわけで、そのとき沖縄の統計  
 システムを本土並みにというので、改組されちゃった。  
 その後でポストモルテムにはなっているが、「Ryukyuan  
 Statistical System」というので、1973年、ウィー  
 ンでのISIの39回総会のときに報告したのがある。そ  
 こに、簡単だけれども、何調査はどんなふうになってい  
 たというようなことが書いてあるんで、これも細かいの  
 はやめるけれども、何か36とか72というような数を覚え  
 ているね。調査区が3000ぐらいあったんだね。そいつを  
 層別して、何しろ1つのサブサンプルの中に幾つ入って  
 いるんだったかな、70だったかな、三十幾つだったかな。  
 何しろ3000ぐらいでしょう。これが本土だと、いまだと  
 70万あるんだよ。そのころのは本土のだけしかわからな  
 いんだけれども、いうなれば、この3000を100だかのサ  
 ブサンプルに分けちゃって、それを順番にやっていくと、  
 3〜4年たつと一通り全部なめ回すことができるような  
 何かそんな数だったと思うよ。3年幾らという三十幾  
 っだろう。だからやっぱり、1つのに70ぐらい入ってい  
 たのかしら。



これは、日本の本土でもそういうやり方をしていたわけだが、調査するときには、一度その地点が当たると、調査員はそこで世帯のリステイングをして、そのリストされた中から何分の1かのを取って調査をするということだった。そのようにやったのを世帯標本と称して、その世帯標本にはABCとかいろいろ名前がついている。たとえば労働力調査はABCの3つでやるとか、家計調査はAだけでやるとか、こんなかっこうでサンプルサイズを調節して、しかもそういう共通性を利用することによって、本土だと、労働力調査と家計調査と関係のあるデータは何ら出せないんだけれども、これがみんなひっかかりのある集計ができるようになっていた。また、その1つのサブサンプルを使えば、それこそ世論調査から、何かこのようなことをやりたいということとそれができるようになっている。

たとえば、琉球政府としても戦後南米移住をやって、アルゼンチンにもブラジルにも、沖縄からの移住者が非常に多いんだよ。あれは戦後の方が多かったと思うんだけれども。

西平 戦前から多いです。ハワイなんか相当数行ったですよ。

水野 この統計庁の関係者の宮里君なんかも、たしかその辺の南米のどこかへ出張したという話を聞いたことがある。

西平 日本はペルーにも多いんですよ。

水野 それはどこでもいいんだが、そのような移住のための世論調査を、それこそ世帯標本の1つのサブサンプルを使ってやったり、もっと前には、こっちじゃ毎日の

方でリーダーシップ・サーベイをやったり、読書調査と  
 か、初めの方にはラジオの聴取の調査もやったが、それ  
 はこのような世帯標本をつくった後だか前だか、そこは  
 ちよっとはっきりしないがやってる。だけど、移住のど  
 うのこうのというのは後のはずだよ。  
 もう予定されている調査のために、調査員は1月の間  
 幾日ぐらいオキュパイされる、そして残りにこれだけス  
 ペアタイムがある、それだけ臨時の調査ができるとか、  
 そんな計算で初めの割り振りや数を出したんだけれども、  
 さっきいったように、本部というか、リージョナル・オ  
 フィスへ顔を出してから行ったりして、その時間を食っ  
 たりなんかというので、そこら辺の余裕というのはそう  
 出なくなっちゃっていたかもしれないんだ。  
 さっきの農業調査は、はじめ村別の結果が欲しいとい  
 うんだったよ。だから3万なんて大きいものだった。そ  
 んなの年がら年じゅう村別なんて出さないで、群島・地  
 方別にして、そこのところで連中に勧めてある程度やっ  
 たのが、プール集計と称するものだった。普通は、1回  
 の調査の結果を出すわけだ。ところがこれは、スキーム  
 として経常的に毎月毎月、または毎週繰り返されるわけ。  
 こんな何も1回で結果出す必要ない。3カ月プールし  
 て、そこら辺で出して、春期の結果でございといった方  
 が、ある一時点で出すよりもかえっていいよということ  
 をいったりした。だから、あれがやれるということと、  
 小さな単位とか細かいあれのためには、プール集計をや  
 ったことが1つの特徴だろうな。  
 さっきいった、国勢調査で設定されたEDが、土地と  
 いうか、調査区のマスターサンプル、サブサンプルとし

て当たって、そこが調査地域になるたびに、調査員がその範囲の中で調査区の見取図を書いて、必要なユニットのリストをするという意味で、年がら年じゅうアップ・ソー・デートのフレームがある。一度つくったやつを1年使う、2年使うなんということに比べれば、ある意味で金がかかってはいるわけで、そういう意味では非常にいい結果が出せるようになっていたんだよ。

何しろ常勤で1つの仕事をやっているんだから、連中の経験なんというのは非常にリッパなものになっていったということだよ。日本なんかでは、調査員を幾らやっていたとあったって、そうよくなならないわけだけれども、それからだんだんに来ているから、統計の課長だ、部長だ、何だかんだっていったものの経験も、ただ行政経験というだけじゃなしに、何から何までわかっているということと、それは非常によかった面だと思う。

事業所標本の方、事業所に関する調査は、初めの方から、やっぱり賃金の調査というので、膨大なデータを全部調べてどうのこうのという要求があって、そのためには臨時の調査員を置いてやったりもしていた。というのは、事業所セサスなんかをこっちと同じにやったりしたからだ。これなんかも賃金の調査と、向こうでいわゆる毎勤みたいなのが欲しかったのかな。やっぱり日本だって、毎勤は標本調査をみんなやっていたんだから。そのようなものも標本調査で片がつく。

ただ事業所の場合には、非常に大きなユニットと小さいのがあって、世帯だとか土地標本のときと同じようなかっこうでできない。小さな事業所というのは、泡沫みたいなのができたり消えたりしているわけで、そこら辺

のは、エリアのサンプル取って、その中で新しくリストして拾い出すということをしなくちゃいけないし、そんなのだけやっていたんじゃない、大きなユニットはとて標本に入っていてなくてまずいから、大きいやつのレストランの標本と、エリアから拾ったフレッシュリスティングからの小さなもの、または新しいもの、これをあわせてやる。リストからのもの、たとえば最大の規模のやつは、毎月の調査にパーマネントに入っている。その次のやつは、AとBと2つあったとすると、1月おきにAB交代に調べるとか、3カ月おきとか、半年おきとか、サイズによってこんなかっこうでやる。さっき見たら、1968年ぐらいには標本調査の最終的なかっこうのができたんだけれども、復帰まで4年ぐらいしかもたなかったわけだ。ピシッとしたかっこうじゃそのようなので、事業所までできるのにはそんなに遅くなったんだ。

土地標本、世帯標本、事業所標本、そしてその標本を定期的に、しかるべくサイズだけは調査できるような人間なんかもちやんと保有し、集計する人間も保有し、これとこれは必要だという調査項目をちゃんと考えて、月だとかで割り振ってあって、それが経常的に出せるようになっていたというので、非常にユニークなものであり、小さな単位なんだけれども、非常にたくさんの種類の統計が精度のいいもので出せた。

このごろ、小さな国がいろいろと独立しているが、その統計機構にアメリカだとか日本のものを導入したってとてもできないんで、アジ統なんかでそのようなのだと、むしろ琉球のこんなシステムなんか考えたらどうだということをよくいったりするんだ。またそのようなのを研

究すると、確かにそれは非常にいいというので、そういう意味で情報がいろいろ得られている。

沖縄復帰の2～3年前から、いわゆる日琉一体化という問題が出てきたわけ。それまでいろいろなので、琉球は別に行っていたから、復帰させるためには、システムにおいて日本と似ていないとうまくいかないということ、で日琉一体化といていた。システムは同じじゃなくちゃいけないということ、初めは余り意識していなかったけれども、同じような項目だとか、どこをどうすればうまくいくかというので、復帰の2～3年前は、日琉一体化のための指導とかで、統計関係だけからでも各省から相当な数の人が相当な頻度で繰り出しているわけね。そこら辺のときに、オレも41、42、43と毎年2カ月ぐらい行っているね。さっきの事業所なんかも、ここら辺でひっかかっていたと思う。日本でも、話のわかるのは、すぐ本土と同じようなかっこうにするのは、沖縄にとって都合がいいということじゃないし、できないことであるということ、簡単にただ本土と同じものにすればいいという日琉一体化にいろいろ抵抗してきて、少しずつ琉球は変えていったわけだ。

実は奄美が復帰したときには、奄美の中でもさっきいったシステムで、各市町村とか奄美の事務所に何十人かの調査員を置いてあった。農林だけじゃなしに、統計関係のこと、統計局みたいなのがやっていたんだけど、日本の統計局はフィールド・オフィスを持ってない。それこそ作報事務所、片一方は統計調査事務所で持っているので、奄美のはそのまんま作報事務所に移行させちゃった前例があるんだ。だけど今度のは、作報だけじゃな

しに、労働力だって、家計調査だって、事業所調査だっ  
 て、何でもやっているんだから、全部作報というわけに  
 はいかない。後で、また結局こっちと同じにされてしま  
 った。日本じゃ農林省なんかの特殊な例を除くと、統計  
 局にしろ、通産省のにせよ、厚生省のにせよ——厚生省  
 は一部厚生衛生課とかを経由しているのもあるけれども、  
 県庁の中にある統計課というのを通じてやることになっ  
 ている。それだから、その点は本土並みにして県の中の  
 統計課をつくり、それから、農林省というんじゃなくて、  
 沖縄開発庁の中の総合開発局の中に農林部というのをつ  
 くって、その中に統計の課をつくるというかっこうで、  
 統計庁を2つにちぎったかっこうで後を継いだんだ。  
 ただ、沖縄としては4分の1世紀以上切り離されてい  
 て、しかもそれのためだけの情報が欲しいというなら、  
 よその県よりも標本のサイズだって大きくなくちゃいか  
 ぬし、結果も出さなくちゃいけないというので、特殊扱  
 いしている点はあるんだが、製表なんかは統計局にやれ  
 ばいいという問題だから、そういうものをちぎっちゃっ  
 たりしてね。総体でいけば、大分縮小されて、よその県  
 よりも標本が多いし、一部分特別なものがあるというか  
 っこうで、それが勘案されて、事務なんかを大きくされ  
 ている点が違っているだけで、大きく見れば、県庁の統  
 計課と農林省の作報事務所のかわりに、農林水産部の中  
 の統計情報課をつくり、この統計情報課がさっきのフィ  
 ールド・オフィスを持って、県庁はそれを持たなくなっ  
 たわけだ。  
 そこに働いている人たちはだんだんに定年退職してい  
 るけれども、古くからやっていた人もいるんで、少しそ

こら辺の名前をいっておくと、奄美の関係では、奄美の出身で春島君というのがいた。これはほかの連中よりはちょっと年配で、奄美の復帰のときにやっぱり統計を離れた。彼はウォーレスのあれだったせいか、公認会計士の試験に通って、いま東京だか横浜でやっている。それも初期の琉球の統計じゃ大事なあれだよ。

局長では、さっき系数、外山という名前を出した。何人もの統計局長がいるんだ。その名前全部は順番立てて思い出せないんだけど。瀬長君なんというのもあるし、沖縄製糖か、沖縄電力の社長をしている真喜屋恵義というのは、さっきの統計法だとか全体の統計を大きく整備したときの親分だった。まだウォーレスがいたときかな、これがオレを招んだりしてやったので、彼が琉球政府の中でがんばってちゃんとシステムをつくった。そのかわり、調査員を地方事務所に集めたりしちゃったけれどもね。

課長クラスでは、この前名前を出したが、宮里茂君。あと宮城吉正、これはもうやめた。それから徳峯。彼は開発庁の統計情報課の方に残った。何か本部の所長をして、それからやめたのかやっているのか、ちょっとそこははっきりしないんだ。それから、いまはもうやめたのかな、統計局の課長をやったり、東京の事務所長したり、企画の方の部長したりしていた吉元君だとか、課長もし、復帰のころには日米琉委員会というのでる者でいろいろやっていて、このときに沖縄の委員になったのが瀬長君といって、これも前に統計局長をやった男だ。そのときの参事官でついたのが座喜味で、いま沖縄の副知事をしている。東京で昭和28年に、1960年の人口、住宅、農業

センサスのための国連のトレーニングセンターが、4カ月にわたって開かれたわけだ。20～30カ国から40人が招んで、いままでやった国際プロジェクトの中で一番大きいものだと思うんだけど、そのときに、この座喜味と、琉大の先生をしている仲宗根は、琉球政府から参加した。

これもそうだし、統計局に統計研修所もある。何しろ沖縄は、県の単位だけれども1つの独立国のようなかっこうでがんばっているのだから、統計局でもできるだけ応援すべきであるということを、周りから注文も受けたたりしたが、統計局長なんかでも統計局でも、そのことをよくわかっていろいろやっていた。この研修所で、ほかの県は何年かに1回ぐらいいんだけど、每期2人ずつ沖縄のやつは文句なしに引き受けるという別枠を作り、そのほかにも何人が研修に来るとか、統計局が沖縄にやった援助というのは莫大なものだよ。それは、大ぜいがんばれ、がんばれといったから、そんなふうになったという点はあるけれども、何と云って統計局を通じてやっていた。だから、沖縄のでも統計局とはよく行き来があった。

ここに書いてある名前だけでもいっておかないと、記録にないとちょっとまずいから……。安次富宏、これは琉政のころにはまだ課長まで行かなかったけれども、やっぱりずっといろいろやっていたし、そのほか課長になった人たちだってまだたくさんいる。いまだって続いてやっているというので、まだたくさん名前を挙げなくちゃいけないけれども。

復帰のころに、何か九州の鹿児島大学だったかな



沖縄の統計の歴史の資料を集めてちゃんとした統計史を  
 つくるべきで"どうのこうの"というので、あそこの大学の  
 プロジェクトでやるようになったから、援助をお願いし  
 ますとかって言ってきた人たちがいるんだけど、そ  
 れから後は余り連絡がないんだよ。

西平 学術会議じゃないですか。

水野 学術会議か。何かそんなのあった？

西平 九大の……。

水野 その結果まとまったのか。

西平 つぶれちゃったんじゃないですか、学術会議の途  
 中で。大屋さんの先生なんかですよ。

水野 そんな感じだ。

西平 彼が一生懸命やっていて、半ばそれが大変で、余  
 り養生しなかったような感じですよ。

水野 集まった資料なんかはどうなった？

西平 ぼくは具体的なことは全然知らない。

水野 戦後こんな話が出て、復帰の後オレが沖縄へ行っ  
 たときでも、みんな同窓会みたいに集まってやるとかっ  
 て計画なんだけれども、何しろ25年にわたったやっで、  
 昔の資料が必ずしもないとなると、みんなも現職でなか  
 なか忙しいとかっていうので、いままで余り動いていな  
 かったのが、今度総合事務局の方で、農林関係のだけで  
 もまとめようというので、ことしオレがブラジルへ行っ  
 ている間だったかな、何か連絡があった。もちろん大い  
 に援助しますよといったが、まだそれから課長に会った  
 り、話はぼつぼつしかしていないんだけど、何かこ  
 こでまとめようとしているし、県庁の側でもやろうとし  
 ている。ただそのときに、古いこととかっていうのはな

かなか集められないというので、これなんかでも少しは参考になるだろうと思っているよ。まとめておく必要があると思っているんだ。

沖縄のは、もしかすると向こうにだってそれくらいはあるかと思うんだけれども、統計庁をつくるとかでどんな調査があるとか、調べるのに集めたいろんな資料のファイルボックスが、沖縄のだけで少なくとも1本半かそこらオレが持っているから、そこら辺のを開けて、それこそ整理する必要があるかと思うんだけれども、完全に定年退職にならないと、なかなかそれ全部開けてやることはできない。だから、だれかやるというんだったら、使う材料なんかは出して一緒にやることはできるんだけれども、詳しい記録というのはぜひ残しておくべきだと思ふし、さっきいった、ただ直接記録として残すという意味だけじゃなしに、小さな範囲でやっていかなくちゃいけない、いわゆる開発途上国の統計調査はどうあるべきかということに非常にいい参考になると思うんだ。だからオレは、アジ統じゃ、頼まれると、いつでも琉球をすぐ突っ込めとやってやっていた。

西平 ベルギーが第1次大戦の後ですっかり戦場になって、もう全然地回でアイデンティファイできなくなって、やっぱりもとの地主に返すんで大変だったといっていたね。

水野 この沖縄のでも、初めは本当にどこなんだかわからないわけだ。だけど、戦前の、明治政府がやったときの土地台帳そのものが使える北部と、那覇でUSCARが申告で認めたり、新たに何か査定してやったような単位をもとにして、現地へ行って、関係者を集めて、どこ

からどこまでがオレのものだというようなことをやって、調査員がそいつをはっきり確定して何かやる。これは1次調査といていたが、これをするのに2年だか3年、大変なあれがかかって、それでちょっと評判が悪かったんだ。

オレが沖縄へ行ったのは8、9回なんだよ。続けて1年とか2年いたわけじゃないけれども、延べで2年近く沖縄にいたと思う。そうじゃないときでも、それこそ統計局なんかに来ていろいろ口頭で話をしたり、相談に乗ったりした。オレがバンコクへ行ったときなんかも、手紙で連絡がなかったわけじゃないが、ただバンコクへ行ったりしちゃっていたんで、連中が水野先生に聞くのに少し不便になっていた。そこら辺のときに少しタガが緩んだり、変になっちゃったというので、ちょっと残念なんだけれども、そうじゃなきゃもっとできた。

日本のいまの統計調査のシステムというのは、何もほめられるもんじゃないんだよ。各省で縄張りが分かれていて、ある意味じゃ重複のところもあるし、それこそ復帰のときに、本土のにそろえるんじゃないしに、沖縄のに本土をそろえるべきだったくらいなんだけれども、そんなことを、数少ないが、いう人がときどきはある。ここら辺のは、ただちょっと報告に載っかっているというだけじゃまずいかもしいな。沖縄の統計庁の刊行物に、完全じゃないけれども、調査のデザインとか何かが記述してあるようなものも幾つかあった。毎号出ているわけじゃないけれども。

もうやめちゃったけれども、南風原孝君というのが、日本人だが、後でUSCARの統計部長をしたと思うん

だ。そのUSCARのアメリカの方のは、座喜味も統計部長をしたことがあるんだよ。ずっと昔はウォーレスだったけれども、クラレンス・タテカワという2世がやった。USCARの英文の記録が出てくると、そっちの方にはずっと続けての何かがあるわけで、それがどこかにあるんじゃないかと思う。これをだれかが掘り出してくっつけてということになると、非常にしっかりしたものになると思うんだ。

沖縄で人が住んでいる島というのは六十幾つあるが、土地標本をつくったりするのには、ただ回上だけでやっていたんじゃないだめだ。やっぱり様子を見てみなくちゃということから、あっちこっち行って、人のいないところまで行ったりした。人の住んでいる島でオレが行ったことのない島というのが4つだけあるんだよ。あとの六十幾つはみんな、少なくとも1度は様子を見てきた。沖縄の人でも、それだけ回っているやつはめったにいないし、そういう意味で非常にありがたい経験をした。沖縄はあっちからこっちから一通り見れた。

アメリカの厚生省の部長をしたドクター・オノというのは、若いときについて島を回った。そのときに、あれは新城島だったかな。島へ行くと船がつかないんだ。潮の関係で行けない。じゃ、泳いで行くというわけで、ジャボンと飛び込んで、それこそ水着で2人で島へ泳ぎ着いて様子を見たなんてこともした。そのときに回って撮った現地の様子なんかの写真は、これこそ何百枚もある。これも整理すれば、統計に関係のある写真も相当あると思うんだ。

いろんな主席や副主席とも会う機会があった。最後の

屋良主席 なんかはまだ先生をやっていたときで、先生の方の調査で宿屋で相談に乗ったなんて記憶もあるよ。一番初めての主席は奄美の関係だったが、奄美へ帰っちゃったら、今度は日本の南方連絡事務所の主席になった。そんなことで、いろいろ沖縄の人たちにも会った。

統計の方は、さっき出したような人から聞けばまたたくさんの方が出てくるわけで、そこら辺の人からも、ぜひ沖縄のもヒヤリングなんかして、それをもとにして記録をつくったらいいいといっているんだけれども、やっぱり予算とか何とかでなかなかそうもいかないのかもしれない。もし何かがあったら、沖縄の統計という特別プロジェクトでもやって、10人、20人でもやってほしいんだけれども。

西平 もう日本の統計の発展でこりごりしている。(笑)

水野 こりごりしちゃったって、非常に意味はあることだと思ふんだよ。

西平 意味はありますけれどもね。

第 3 回

昭和 57 年 3 月 9 日 (火)

総理府統計局にて

西平 この前で大体沖縄の話が終わって、今度はそのほかの国際関係についてですね。

水野 この前から国際関係のことをいおうといていたんだけれども、初めにちょっと断っておく必要があると思うのは、このプロジェクトは統計学の進歩の跡ということをやっているが、こっちとしては、いわゆる統計学というんじゃないしに、統計という事業、活動そのものについて語ったり触れたりすることが多いんだよ。人によると、それは統計学と違うのどうのこうのというバカ者が出てくると思うので、ここでひとついっておきたいと思うんだ。

西平 でもそれは、水野さんのお話、あるいはどなたにしても、そのお話そのものが統計学の発展に貢献したと思うかどうかは見る人の勝手であってね。ですから、別にそれはどうでもいいことだし、議論はいろいろあるわけですよ。たとえば統計学というのは統計を研究するんであって、統計の方法を考えるんじゃないとか、いろんな議論があるのは、それは一向構わないと思うんです。だけど、何も統計学というのはこれしかないと決めつけなくてもいいんじゃないですか。

水野 しかないという意味じゃないけれども、これは入らないとかいう議論に対して、そういうふうを考えられるんじゃないかという意味で、こっちも一言いっておくということだ。

西平 それも結構ですけども、それはこうでなきゃならぬとか、そんなことはないですよ。統計学をそういうように考えている人でも、官庁統計なんかがいかに行われてきたかというのを見て、何かを考える。たとえば、

経済学の中に経済学史もあれば、経済学科論もあれば、金融論もある。いろんなことがあるわけで、何も統計学をこれだと決めつけなくたっていい。だれも決めつけていないと思いますよ。

水野 そうなんだよ。たけど、そのところがこうだというような説明をしておくと、こんな話を2度も3度もするのがよけいよくわかってもらえると思うし、そこでいっておく必要があると思ったんだよ。

というのは、決めつけるのどうのこうのじゃなくても、これはよく議論するんだけれども、Statisticsというのは、日本じゃ「統計」とも「統計学」とも訳している。また、Economicsのときは、「経済」という訳もあるし、「経済学」という訳もある。「経済」そのもののときにもそう使っているわけだ。統計にもそんなところがある。ところがMathematicsは、日本語のコンテキストじゃ「数」というのはなくて、「数学」しかないわけだ。この意味の「学」がついているとかついてないとか、統計なら統計に「学」がついているとかついてないとかは、たとえば昔の大学では、学を講ずるというような意味でみんな「学」がくっついている。そういう意味で「学」というのは非常に気軽なものだと思っているんだ。

もう一つ、統計学とは何だという議論は、統計学会だとか仲間なんかで議論したときにも、これはいわゆる理論学か統計方法論かということだし、日本じゃ「統計学」で、「統計方法論」をStatisticsの訳とはすぐ結びつけない。ところが外国へ行ったら「スタティスティックスをやっていたんだ」というと、それはスタティスティカル・メソッズだという。スタティスティカル・セオリーと



は必ずしもいわない。だから、統計には一般的にまずこういうような性格があるわけだ。

オレたちは昔、それこそ統計数理研究所で君たちと一緒にやっていたときにも、統計数理とは何だ、どこら辺まで入るの入らないのと議論した。ところがその議論したのを、オレ自身は知らなかったんだけど、青山君が「日本科学何とか大系」というのに、オレが統計数理とは何ぞやとかいったのをまとめて入れてくれたらしいね。統計数理とは何ぞやというところを、彼が拾ってそれに入れてくれたんだ。朝倉の全集をつくったときに、統計数理と書いて書いたのだったか何かもとにしたのを、そこに入れてくれたんだと思うんだ。だから、これは日本の統計数理の1つのデフィニションだか、説明みたいになっているんだけど、いわゆる狭義のセオリーだけじゃなくて、生きたところからそのようなセオリーだか方法が出てくるようなものが何もかも入るということ。そこで旗幟鮮明にいつているわけだ。たとえば世論調査というんだって、これは1つのスタティスティカル・インクワイアリーであり、そこで見られる活動というのは統計活動であって、その中のどんな方法を使おうとか、後で触れるが、デフィニションなんかも影響してくるんだけど、分類だとか、概念とか、こんなのをどうするかということを考えることは、まさにいわゆるスタティスティックスの中の重要な貢献だと考えているわけだ。研究者、リサーチャーというのはそういうことをやるのがふさわしいし、必要なことだ、こういう立場をとるからね。

たとえば世論調査だって、いわゆる数理統計だとか数

式に乗っからないのも幾らだっている。クエスチョネー  
アをどうつくるとか、クエスチョネーアをどんなぐあい  
に、たとえば前にやったいわゆるクエスチョネーアデザ  
インだけじゃなくて、スプリットみたいなかっこうで幾  
つもやる。これは一種のデザイン・オブ・エクスペリメ  
ントだよ。グレコラテンとはいわないが、コンビナトリ  
アルな組み合わせとか、こんなのは実際の調査に出てく  
るが、このようなものが、やはりスタティスティックス  
の重要なメソドロジーとしての1つの研究題目だと思っ  
ている。

オレきょうちょっと思ってきたんだけど、いわゆ  
る理論の場で考えた方法論という、そこで考えたとき  
に、いわゆる理論と応用の応用かもしれないが、必ずし  
も応用というものはないんで、抽象的なかっこうの報告  
が出る。ところが、こういう実際のは、抽象的なものと  
して考える場合もあるけれども、それよりも具体的な場  
面でそこをどうするかということ考えられるから、そ  
の報告は、肉をばらしちゃったスケルトンだけじゃなし  
に、本当の生身の体のレポートのかっこうで出てくるわ  
けた。それをやった後でその肉を剥いたら、スケルトン  
だけを別の論文として出さないのが習慣だ。

だから、たとえば事業の報告とか、調査を企画して結  
果がこうなって、どうのこうのというような報告書だけ  
をひょっと見たり、そういう話を聞いたりすると、ああ  
それは決まったことだけで、その中にはいわゆる学的だ  
か研究的だか、そんなことは入ってなくて、ただ実態を  
調べて、やって出てきたものだけが書いてあるという印  
象を持っている人たちが相当いるような気がするんだ。

ところが、われわれが関与するような調査の報告書や何かというと、そこら辺に何か1つや2つの新しいもので、ここで頭をひねってこんなことをやったということ、それとよく似たような、別のシチュエーションで、一般的な方法論として使えるようなものがその中に入っているのが多いんだよ。そういう意味で、こっちは、実際の統計の事業とか活動とかと統計研究の間に全然差がないと思っているわけだ。

そういうようなことははっきりしているから世論調査の話もする。いわゆる官庁統計というと、決まったかっこうで行くけれども、その中にまたこういう問題がたくさんあるわけさ。官庁統計で、決まり切った調査票を毎月繰り返してその結果を集計して、上がったのが下がったのといっている限りでは、そういう新しいものは何も出てきてないかもしれない。しかし、そうじゃないものもたくさんあるわけだ。

第1回ときには、一番最後には統計局にいたわけだが、必ずしも統計局の仕事というよりも、大分前の世論調査のころとか、初めのころの話があれだったから、まだ統計局での活動に関連しての話は余りしていなかったと思うんだけど、きょうは、それよりも国際的な場というか、関連での統計ということ話をそう思っていた。

統計局に勤めている間に2回、国際機関に行けといわれた。こっちが自発的に願書を出して行ったというわけじゃない。前にもいったように、研究所をやめたころそんなふうにしたんだけど、それは6カ月の間に来なかった。ご承知のように、いま統計の国際機関というと、

国連のスタティスティカル・オフィスというのが一番大  
 きいのかもしれない。これはニューヨークに本部がある。  
 そして国連の地域機関として、ある意味じゃ独立な国際  
 機関の性格を持っているが、バンコクにE S C A P (Eco-  
 nomic and Social Commission for Asia and the  
 Pacific)がある。前には、オレなんか行ったころには、  
 E C A F E (The United Nations Economic Com-  
 mission for Asia and the Far East)といってい  
 た。地域経済事務局と訳したりしているが、このような  
 のが世界に何か所かある。それからいわゆる専門機関と  
 いうので、W H O だとか、I L O だとか、F A O だとか、  
 ユネスコとか、いろいろあるわけだ。これがまたそれぞ  
 れ独立した国際機関で、さっきからいっている独立とい  
 うのは何かというと、それはそれ自身の憲章みたいなもの  
 を持っているし、それぞれ独自のメンバーシップを持っ  
 ているということだ。

西平 国連と完全に対応はしていないわけですね。  
 水野 そう、だから国連のメンバーでもこっちへ入って  
 ない、こっちのも国連に入っていない、いろんなのがある  
 わけ。だけどこのような国連専門機関というやつは、大  
 きな枠で国連と一緒にやるというので国連ファミリーの  
 中へ入っていて、機関間協定というようなもので結びつ  
 いて、調整をとってうまくやっついていこうというわけで、  
 たがをかみ合わせようにはなっているんだけれども。

西平 完全に下部機関ではない。  
 水野 そういう国連機構としての国際機関の中のE C A  
 F E に3年と、F A O に3年行ったんだよ。そこでの見  
 聞きだとかいうこともあるし、どっちが原因か結果かわ

からないけれども、統計局でも国際関係の統計によけい  
 触れたりするようなことをしていた。そういう立場にあ  
 ったんで、国際的なところでの統計の活動とか問題を少  
 し話しておいた方がいいんじゃないかと思う。

水野 初めに、日本外の統計との接触というのは、前に  
 もいったけれども、占領直後に、デミングなんかとの接  
 触から、アメリカの連中との個人的な関係に始まるかも  
 しれない。それで、アメリカであっちこっち行った。そ  
 ういうことは研究所のころにあったけれども、研究所の  
 ときには、国際的な会議だとかプロジェクトというのは  
 まだなかったと思うよ。

西平 I S I の東京のときはどうですか。

水野 I S I の東京のときはもうこっちへ来ちゃった。  
 いまの君の話にあった I S I の東京というのは 1960 何  
 年だよ。あれも、ぼくがバンコクへ行っている間なんだ。  
 ぼくなんかは関係していないんだけれども、戦前にもそ  
 のようなのはあったわけで、I S I の第 1 回の日本での  
 会議というのは戦前に開かれたわけ。

西平 五十何年前ですね。日本統計学会がその後ででき  
 たわけですから。

水野 貴族院を会場にしてやって、どうのこうのという  
 ようなのがあって、戦後やったときだって、国会は使わ  
 なかったけれども、名誉総裁に皇太子殿下になったとか  
 関係者で来た連中に勲章までやったというような、ほか  
 の学会とか分野の活動に対する日本政府の対応とは大分  
 違っているよ。

その前に、統計へ来てすぐだと思ったんだが、1960 年  
 センサスやる準備で、国連だとか国際機関がワイワイ

騒いでいた。昭和33年に、ぼくは統計局へ来てもう5～6年たっているわけだが、日本で、1960年人口・住宅センサスと、それから農林業センサスのためのトレーニングセンターというのを開催したわけ。統計局と農林省の2つが共同して、日本側での受け入れみたいなものになった。もちろん実施したのは国連だけれども。向こうから職員なんかもたくさん来た。日本じゃ森田さんがコーディネクターで、統計局、農林省、それから行管なんかも協力した。

これは4カ月続いたと思うんだ。4カ月、しかもパーティシパンスをアジア、極東から——アジアといったときに、郵便料のアジアのところだけじゃなしに、もっと中近東まで入っているからね。イランだとかアフガニスタンも入っているでしょう。何しろ30カ国ぐらゐから来たのかしら。それだけの人数は50～60人はいたと思うし、レクチュアラーなんかも、全部が常駐というわけではないうが、外国から入れかわり立ちかわりで来たりしたから、やっぱり30～40人はいたんだろうと思うし、日本側での対応というのは大変だったと思うよ。君も1つぐらゐ何か講義したか？ そのようにレクチャーをやったりしたんだ。

オレは初めに、そのトレーニングオフィサーというので、統計局から実務者として参加したんだ。農林省からは事務の方をやるというかこうだった。課長クラスは、われわれと、農林省の土屋さんというのと、トップは森田さんで、以下たくさんいた。そのときにこっちの補佐をしてくれたので工藤（弘安）なんかいるわけだ。途中でかわって、オレがやめた後、工藤がトレーニング

オフィサーになって、ずっとやったりしたんだ。そのころで大分国際的な連中とも知ったし、いわゆる国際統計での問題を一般的に知ったわけだ。まだそのときは、セミナーみたいなものに出て行って、議論をふっかけたりしたようなこともあったと思う。

話が逆になるけど、ぼくが統計局に28年に来たときは、後で労働力統計課とっていったところの課長で、労働力調査というのだけをやっているようなわけだった。ところがこの労働力調査というのは、戦後はアメリカの方で始めて、アメリカが1つのモデルをつくったが、労働力とか家計調査は、国際機関に行くとILOの所管なんだ。それでここへ来たときに、ILOのいろんなそこら辺の書類を見たわけだ。来たころは、労働力調査が始まってまだ長年月がたっていたわけじゃないんだけど、来たころの印象じゃ、日本の役所でやっているのでは、国際基準へのレファランスというか、それとの関連は甘かったと思うね。

そこら辺ができてワイワイ議論していたときのスタッフには、いまの統計局長の永山君だとか、伊藤君とか、まだここにいる上田君だとか、統計数理にもいた福島和子嬢とか、そこら辺がいたんで、そのような横文字のやつを読んだの議論なんかも大分できたんだ。考えてみると、そこら辺がなかなかおもしろいんだよ。

というのは、労働力調査というと、毎月の日本でも一番重要な標本調査ということになっているが、そこから出てくる1つの大きなものが完全失業という数字だよ。このごろでは大分それについての理解もあれになってきたけれども、失業統計というとパッと完全失業というよ

うなところで、それがふえたの減ったので変だとか何とかという。簡単にいうと、完全失業のデフィニションは調査期間——調査期間というのは、国際基準でいくと1週間を超えちゃならないとなっているんだが、日本の調査週間というのは月末になっていて、月末の調査週間1週間の間に、仕事をしたいと思っても1時間も仕事ができなかった、しなかったということになっている。この仕事というのは収入を伴うもののことで、実際にお札が入ってくる入ってこないは別にして、自営の農業だとか商業なんか、こんなのもみんな収入を伴うものだ。

だから、どこか首になる、そして仕事を探しているが合ったのが見つからない、これはいまの1時間も仕事をしていないというのに入るわけだ。ところが、いよいよ失業してられないほどせっぱ詰まったのがいるわけだ。いままでの給料は20万円だけれども、そんなこといってられないんで、1日3000円でもいいから働かなきゃおまんま食えないというようなのが、1日でも、たとえばニコヨンに出ていくと、これは就業者になってそこから外れちゃうわけだ。1時間でもということ、4捨5入で、2分の1未満は入らないで、2分の1以上は入ってくる。29分まで働いたのはゼロになって、30分以上働いたのが働いたことになるわけで、そんなかっこうで統計的にはとられている。それを、ただ常識でいうような失業者としてその数を見たら、大分おかしくなるわけだ。失業というのは、業を失う。無業者じゃない。ということは、前に何か持っていて、それを離れる、シヨブリーヴァー、離職者というような概念が非常に強い。ところが、そんなのはいまのあれに入っていない。



というようなことで、このような統計調査である以上、あるデフィニションに従って、デフィニションに合った対象を調べるし、それに合った集計で、どういうものがどれだけと出していくわけだ。そうすると、そのようなときに概念としてどんな概念をやるのが妥当か、これでいいのか。アメリカじゃ、失業すると失業していられるわけだけれども、オレが統計局へ来たころは、日本で失業したら失業してられない、何か食わざるを得ないというようなことだった。

そんなことで、統計で使われる概念とか、就業者、非就業者の分類とか、これが非常に大事だ。統計数理でそういう問題を考えなかったわけじゃないけれども、こういうところでやるのは実に基本のことだ。アメリカのお仕着せでやっていたという点もあるのかもしれないけれども、そのころのところに何か問題があるなあというので、そんなような一般的な印象を持ったし、そういう統計でのコンセプト、デフィニション、クラシフィケーションというのが、大分、考えるもとみたいになっていたわけだ。

労働力の課長をしていたときはそんなことだけれども、その後研究課長にかわった後で、あそこで「日本統計年鑑」の編集をしているわけ。これは局の一番大事なことでというので、ほかのことはともかくも、そのころ森田さんが局長をやっていたんだけれども、ゲラ刷り一ページずつ森田さんのところに持って行って、承認してもらうくらい、しっかりとやるべきものだったということになっていたわけだ。いつだったか森田さんが、私は定年でやめた後、年鑑の編集みたいなことをしてみたいというよ

うなことをいわれたという話をだれかから聞いて、さも  
ありなんと思ったりした。

その年鑑というのは、統計局のだけじゃなしに、日本  
の統計、一部は官庁統計でないものまで入れてやってい  
る。そうすると、そこら辺の原点について、その定義が  
どうなっているとか、あっちこっちからよく似たような  
ものを持ってきてやるときには、定義がちゃんと調整で  
きるものなのか、食い違ったものなのかどうか、はっき  
りしなくちゃいけないから、一般的によそでやっている  
ものについても、そこら辺の問題というのが直接仕事に  
も関連して目に触れたりするようになったわけだ。

そんな素地のあるところで、今度は農業統計にまで話  
が飛ぶが、さっきのトレーニングセンターのときに、あ  
その研修というのは、レクチュアラーが書いてあるこ  
とを読んで講義して、さあわかったかというんじゃないし  
に、その問題を出して皆で議論するとかしていた。そこ  
ら辺なんかだと、こっちはトレーニングオフィサーだか  
ら、参加したいと思ったところはどこでも参加して出て  
いったりした。

水野 そんなことがあって、そこら辺で目をつけられた  
のかな、翌年に、日本からだれかEC A F Eへよこせと  
いうことで、条件が悪かったから、こっちは何もそのと  
きに行きたいと思っていたわけじゃなかった。だけど、  
森田さんや、そのときには小田原局長になっていて、統  
計基準局の局長が美濃部さんで、だれかやらなくちゃい  
けないし、ちょうどいいからというので、どうしても出  
してしまえというところがあったらしくて、行け行けと  
大分いわれて、結局行くことになったんだ。

E C A F E には、いまは統計部といって4つの課があ  
 って、後でコンピューターのところが分かれたから何人  
 になっているかわからないけれども、相当な組織になっ  
 ている。オレが行ったときには、親分をしていたのがイ  
 ンドの統計局のコディレクターをしていたドクター・ラ  
 マムルティーで、オフィサーというのは、それとオレの  
 2人なんだよ。あとはセクレタリーだ。年鑑を編集した  
 りするところに1人、プロフェッショナルがいたけれど  
 も、スタディッションというのは、オレとラマムルティ  
 ーなんだよ。その2人で、それこそこの地域の官庁レベ  
 ルでの統計の発展のためにどうするか、何をするかとい  
 うことで、すべてのことをジタバタやっていた。大変だ  
 ったけれども、考えてみると、それみんな意義があった  
 ことだと思う。

さっきの労働力のじゃないけれども、いままでどこか  
 のところにあったのをそのままトランスプラントできる  
 というようなのはどうもないんだ。というのは、ヨーロ  
 ップとかアメリカというようなところとアジアじゃ、そ  
 れこそ一般的な経済、社会発展の程度というか、向きが  
 違うし、種類が違っているし、機構とか、その習慣と  
 か、いろいろなのがあって、そのまんま持ってこれない  
 のがあるんだけれども、それまでのだと、大体英米のエ  
 キスパートとか統計家がいって、アドバイスなんかをして  
 いたのが多かったんじゃないのかな。オレたちが行った  
 ころは、そこら辺がアジアのに変わる初期のころだよ。

何もぼくが一番初めじゃなくて、E C A F E には昔、  
 大来佐武郎も行ったわけだし、たしか都留重人もE C A  
 F E に行ったことあるんじゃないかな。いや、都留はF

A O かな。

西平 F A O には行ってましたね。

水野 F A O の方で彼の名前を見たのかな。オレは F A O の名簿と E C A F E の名簿と両方入っているから、どっちで見たんだか。大来さんは E C A F E だったと思う。ただし、彼は統計に行っていたわけじゃない。統計にはオレの前に企画庁から平山君というのが行っていた。経済研究所の部長でやめたんだけれども。ただ彼は経済統計だから、そういうことじゃなしに、ちょっと種類の違うことをやっていたような話を聞いた。

1960年センサスで、いままで国勢調査もやってない国もたくさんあったし、農林センサスなんてもちろんやってない国が多いわけ。これに何とかしてやらせるのにどうするか、その方法をどうするかということだった。

いまだとリージョナル・アドバイザーという制度はあたりまえだけれども、昔は、よその国からのエキスパートを常駐させて、そこで指導するというかっこうはあったんだが、小さな国だと、それがずっと1年間そこにいなくちゃいけないということもないんだし、そんなことしたら、エキスパートの数が、必要とするところからいって間に合わないという点もあるし、お金もかかるということもあったんだ。だけど、そんなかっこうでやって

いた。

それを、このときに、はっきり覚えてないが、ロッキンジャーから30万ドルかをもらったのがもとで、国連が1960年のセンサスやなんかいろんなことをやろうとして、そのプロモーションでトレセンもやったし、E C A F E にも統計の金をよこしたりしたんだけれども、各国に1

人ずつなんというふうにはいかないが、それを使って、エキスパートをE C A F Eとして採用して、それに必要なところをグルグル回ってもらうようにしたらいいじゃないかということ、ラマムルティーと2人でいって、いるうちにそんなかっこうになったんだと思うよ。

まず第1発にやって出てきたのが、農業統計の方で有名なパンセとか、ポピュレーションなんかのインドのU. S. ナイール、それからそのときにはアメリカのアドバイザーもいた。3〜4人であっちこっちに行ってもらうようにした。そのかわりオレは、それこそその日程を組んだり、政府との手紙のやりとりやなんだかんだで、べらぼうにめんどうくさくなっちゃったわけだ。こんなのも何でもないことだけれども、1人の人間であちこちやるというのはそれまではなかった。いまじゃ、国際機関はどこでもほとんどそのかっこうだよ。

それからサンプリング調査で、ことに開発途上国は統計をつくらなくちゃいけないが、統計がひとりでにバイプロダクトとして出てくるような、行政的なチャンネルもスキームもないわけさ。そうすると、標本調査でもやるより仕方ないわけで、そのあれとして、まず中央に、小さなのでいいからSample Survey Organizationをつくれと、われわれが報告書であっちこっちに書いてい出して、だんだんに皆がそうだといって広がってきたわけだ。いまじゃもうそんなのは常識になっているけれども。

そのためにはトレーニングが大事である。それまでは、統計のトレーニングというと、インドのカルカッタとフィリピンにセンターがあって、国連とかISIも少し応

援をしていたんだけれども、これは何ととっても両方の政府がイニシアチブをとってつくってやっているの、国際的なものが頭になってつくっていたわけじゃない。そういうのも大事だし、その研修をどうすべきか、その中身はどうすべきか、どんなふうにしてまず必要な人材を確保するかとか、いろんな問題があるわけで、そのよなのを1つのプロジェクトとして、サンプリングの次に取り上げたのがトレーニングというわけだ。トレーニングに関する第1回のエキスパートミーティングなんか開いて、そのためのペーパーづくりはオレが全部やらされたわけだ。ただしそのころ、英語の文章でこんなのを書くのは大変なんで、文章を書かないで、ポイントだけ書いたような報告もつくってやったりしたんだけれども、十二指腸潰瘍になったのはそのトレーニングのあれのときじゃないかと思うんだ。サンプリングのときは無事に済んだんだと思う。

何も自分たちの手柄話にというんじゃないんだけれども、それがもとで、トレーニング・オブ・トレーナーズとか、どんな標準シラバスでやるべきかとか、そのよなセンターをつくるべきであるとか、それがみんなだんだんに実現したわけだ。やめるころになって、トレーニングのアドバイザーもとれるようになったし、オレのつくったトレーニングのセミナーのときのペーパーというのは、中級とか初級のには大体どんな内容のことをやったらいいとか書いてある。

リージョナルなトレーニング・インスティテュートをつくれということ、トレーニングのときのセミナーでのレポートに一番初めに入れたのかな。それが最終的に

アジ統になった。途中でインドに取られそうだとか何とかあったけれども、それがだんだんにこうなってきたわけだ。そのトレーニングのシラバスがどうあるべきかというのをぼくが考えて、その後でインドからマシユーというのを招んで、彼にそれをアノータイトさせて、よりしっかりしたものにつくる。だんだんそのようなのが積み重なって、そのうちにそれらに基づいての研修をやる。日本は、何も国連機関がないし、これはぜひということやった。

このアジア統計研修所というのは、統計局の7階で始まったわけだが、これについても大分記録に残しておいた方がいいことがあるんだけれども、それはまた時間があったら戻ることにして、サンプリングとトレーニングというのが、E C A F Eのときのあれだったかな。

西平 E C A F Eの統計のセクションというのは、そこでこういう統計をつくるとか、集めるとかいうことではなくて、どういう任務を……？

水野 スタティスティックス・デベロプメント・セクションと、もう1つスタティスティカル・コンパイレーションというのがあって、後者は、各国でつくった統計を送ってもらって年鑑を出している。われわれのスタティスティックス・デベロプメント・セクションは、それこそ各国に、国勢調査をポピュレーション・センサスになさいよとか、サンプリング調査をなさいよとか、こんな研修にきなさいとか、研修にこんなフェローシップを出しますとか、アドバイザーはどうだとか、何しろスタティスティックス・デベロプメントのためのあれこれをいろいろやっていたわけ。

いまのサンプリングのときのセミナーには、日本から  
 斎藤（金一郎）君が参加したし、トレーニングのときには、  
 北川豊だったかだれか来たんだと思うよ。いや、彼は  
 はまた別のところかな。  
 西平 水野さんの後ぐらいい行ったんじゃないですか。  
 水野 いやいや、そうじゃなしに、このセミナーに招ば  
 れて。こっちは事務局のセクレタリーとしていたわけな  
 んだが、パーティシパントというか、そこでのエキスパ  
 ートとして行った。  
 E C A F E にいるころに、I S I が東京でやられたわ  
 け。だからこっちは在外のステーションとして、皆さ  
 んよりごちそうになった回数がちょっと多いのかもしれ  
 ない。それでI S I に参加したんだったと思う。だから、  
 あれのときにはE C A F E だったと思う。  
 E C A F E ではラマムルティーと2人だったんだが、  
 ラマムルティーが親分で、センサス・サンプル・サーベ  
 イとトレーニングをおまえやれといわれて、それを担当  
 した。経済統計みたいなのは、いままで統計局長でやっ  
 ていたということがあるし、おまえはあれじゃないから  
 というので、ラマムルティーが担当した。経済統計のセ  
 ミナーというのはぼくがセクレタリーで出たわけじゃな  
 いんだが、これがまたいろいろあるわけだ。1963年イン  
 ダストリアル・センサスとかいろんなのがある。そうし  
 て、ここにニューヨークからやってくるわけだ。  
 西平 国連からですね。  
 水野 エーデノフというんだよ。これが次長役でずっと  
 いたわけなんだ。10年ぐらい前に死んじゃった。彼は手  
 塩にかけて産業統計をやっていたわけ。欧米社会じゃい



ままでそれでそろえていたわけだ。それをアジアにや  
 せることが世界のためだと彼は信じて疑わないわけさ。  
 こっちは、バカなことというな、アジアの実態に合わない  
 ようなものを持ってきて押しつけるとは何だというわけ  
 で、E C A F E のときにエーデノフと大げんかやってい  
 るわけだ。このセミナーには突戸が来ていたんじゃないか  
 ったかな。違ったかな。  
 そんなのが原因で、後でエーデノフに、たとえばアジ  
 統の講師を採る採らないとか、よそのポストにつけるつ  
 けないとかいうので、えらい意地悪されちゃった。だけ  
 どオレが、やっこさんのいっているようなことじゃなし  
 に、この地域の実態に合っているんじゃないかやダメだ  
 というかっこうにしてが、んばったのは地域のためになっ  
 たし、それがもとになって、こういう態度が、欧米で決  
 めたそれだけがアジアなどでは必ずしもよくないと判然  
 いう先鞭をつけちゃったことになっていたかもしれない。  
 シカゴのハウザーがアメリカの統計局長をしていたこ  
 ろに、レイバーフォース・サーベイをやったんだ。彼こ  
 のごろよくこっちに来るんだが、アメリカでよかった  
 わゆるレイバーフォース・サーベイで使ったアンエンプ  
 ロイメントだとかがうまくないということが、彼自身も  
 わかってきて、ここら辺どうするかということ、アン  
 ダーエンプロイメントとか、アンダーユースリゼー  
 ションだとかいい出したくらいだ。ぼくがいる間には、  
 このプロジェクトをE S C A P でやった記憶はないんだ  
 けれども、統計局へ戻ってきて、国際担当の統計調査  
 官というようなかっこうでやっていたから、いろいろこ  
 ういう問題に触れたりしていて、ハウザーにも会ったし、

I L O の会議に日本代表で出るチャンスなんかがあった。  
 そんな関係で、また後で、I L O でこのようなアンダー  
 エンプロイメントをやるときに招かれて、コンサルタン  
 トで3~4カ月やったりした。  
 こういう、どんなデフィニションだとか、分類だとか  
 何をしたらいいかという問題には、それからの関連で、  
 後でもいろいろ触れることがあった。いまでも、何も決  
 定版というのはなくとも、少なくとも後進国じゃ、労働  
 力調査のあのようなアンエンプロイメントだけじゃなし  
 に、ほかのものをやらなくちゃというのが大体常識にな  
 りつつあるんじゃないのかな。  
 O E C D は先進国のサロンといわれるくらいで、大体  
 欧米、あとは日本とかオーストラリアとかがちょっと入  
 るくらいだから、このO E C D で取り上げたりしたって、  
 O E C D の枠の中じゃアンダーエンプロイメントとか  
 アンダーユーズーリゼーションというのはそう問題にな  
 っていないんだけど、I L O じゃこっちが問題にな  
 っている。  
 水野　　オレはE C A F E に3年いて帰ってきたんだが、  
 実はオレがE C A F E に行く直前に、いやだいやだとい  
 っていたということをつたえたけれども、バンコクから来  
 てくれという話があった。いよいよ最終的にオレが返事  
 して1日だか3日目だかに、F A O から来てくれという  
 話があったわけだ。こっちの方は条件もよかったわけな  
 んだ。だけど、一度ウンといたので、E C A F E へ行  
 った。いま国連の次長をしているナラシマンというのが  
 E C A F E の事務局長をやっていて、ナラシマンとスカ  
 トメ、それからF A O の親分のセンだったかしら、この

両方で水野をよこせ、いややれぬというようなかったこうでゴチャゴチャやっていたんだ。

そんなことがあったんで、オレがE C A F Eにいる間に、小田原さんがヨーロッパを回って帰ってきて、F A Oへ寄ってきていたのかな。そしてE C A F Eから帰る前に、初め2年で行ったのを延ばして3年いて帰ってくるときに、帰ってきたら今度はF A Oにやるという話をつけて帰ってきて、そしてバンコクへやってきたわけだ。

だからオレは思ったんだよ。会社勤めだって、外務省の連中だって、よそへ3年ぐらい行って帰ってくりや、中にゆっくり何年かいられると承知しているんだけれども、オレは、帰ってきたら、一体いつ来るんだいつくるんだの催促で、結局1月に帰ってきて、引っ越しの荷物の最後が届いたのが5月ぐらいたよ。ところがもう8月ぐらいには、引っ越し荷物の送り出しをしなくちゃいけなかった。だから、アホな話だけれども、バンコクで使っていた道具が送り返される過程で、東京で使っている道具と、ローマへ送る道具で、つまらない台所道具なんか3つずつになっちゃったのがこの時期だったと思うんだ。(笑) 10月の末だったかな、生まれて2〜3カ月の次男を女房が連れて、それで延びたんだ。もしそうじゃなかったら、もっと前に追い出されたかもしれないんだ。

西平 それは何年でしたか。

水野 昭和37年。

西平 1965年までローマにいらっしゃったんでしょ。

水野 そう。だから、1962年にバンコクから帰って、1962年にローマに行ったわけだ。そのときは、Regional

Statistician for Near East (中近東担当の地域統計家) というんだ。それは、E C A F E でラマムルティ  
 ーがしていたようなポストで、F A O の中近東の親分な  
 わけだ。だけど、実際にはその仕事は全然やらないで、  
 そのポストで採用しておいて、すぐ本部のディレクター  
 ズ・オフィスの統計部のサービス・セクションへ行った。  
 サービス・セクションといっても、ディレクターズ・オ  
 フィスの中にはサービス・セクションだけがあって、あ  
 とアドミニストレーティブ・オフィサー達がいたんだが、  
 セクションというのはそれだけだ。F A O の中には、農  
 業関係のは統計部にあるけれども、林業とか水産業はま  
 た別のデパートメントになっていて、そこにスタティス  
 ティックス・セクションがある。しかし、全体の調整は  
 統計部でするんだ。  
 こっちはそれとの窓口調整の係とか、それから外との  
 問題。たとえば I A S I ( International American  
 Statistical Institute ) という南米の統計機関とか、  
 そうじゃなくても、何かのときに E C A F E へ手紙を出  
 すとか、三浦の行っていた E C A ( Economic Commission  
 for Africa ) とか、E C E ( Economic Commission for  
 Europe ) とか、そんなような国連との連絡窓口。具  
 体的なのだと、各国へのエキスパート、研修生のコントロ  
 ールをやっていたわけだ。予算と、エキスパートから来  
 る報告を見て、そしてアドバイスをすることとか、フェ  
 ローシップの関係でもそうだよ。どこかそれを探してや  
 って、そこに留学させるとか、帰りに、どうだったと  
 インタビューして点をつけたり。F A O がどこかで統計  
 のミーティングをやろうという、そいつのいろんなお

ぜん立てをするとか、要するに総務課みたいなものだよ。  
 もう一つは、コンピューターもここで扱っていた。ロー  
 マにコンピューターセンターはできていたんだ。そこ  
 のを使って、コンピューターで刊行物をつくってみよう  
 という第1のプロジェクトを、FAOのオレのときにこ  
 こでやったわけ。それがもとになって、結局オレがサー  
 ビス・セクションを離れちゃった後だけれども、あれが  
 できたわけだ。だから実際にやったのは、そのときは、  
 いまここのアジ統次長をしている川勝君が、年鑑の編集  
 をやるのでいたんだけれども、初めはそうじゃなかった  
 と思う。しまいにはそんなのが乗ったんだと思う。  
 彼のやりたいものがあったかと思うんだが。  
 オレはそこでまたポストを変えられて、Statistician  
 in charge of Methodology (方法論担当) というこ  
 とになった。そのシニアメンバーとしてザルコビッチ  
 がいて、ザルコビッチの付人みたいなところに行くこと  
 になったんだ。そのメソドロジーの担当のポストで帰っ  
 てきたのかな。  
 こんなようなことで、コンピューターの方は、君も覚  
 えているけれども、あのころじゃわりあいに珍しかった  
 が、俺が統計数理にタビュレーターなんか入れたのから  
 始まって、今度のテーマでも、コンピューター関係で統  
 計局のが大分急激に変わったりしたのも、来て関心を持  
 って見ていたり、アメリカでコンピューターを見たとか、  
 またE C A F Eで、これはいまクラークがコンピューター  
 の親分をやっているんだけれども、ここのおやじはオ  
 レとおまえだというわけで、オレとクラークの2人で、  
 こういうぐあいにしてやろうといってコンピューター関

係のをつくることにして、それがいまのもとになってい  
 るんだ。  
 直接自分でコンピューターのプログラムを書いたら、  
 いまだって満足に書けるのはないんだ。ただし、統計局  
 で第1回のコンピューターを入れるために、要員の訓練  
 を3カ月やったときに、オレと松村君という課長クラス  
 の2人の統計調査官がその研修を受けて、オレは行っ  
 った後で松村君が電子計算課の初代課長になってやっ  
 たんだ。そんなので、計算機械とかは関心があって、あ  
 っちこっちでちょこちょこ引っかけりがあるんだ。  
 方法論で、またさっきのE C A F Eのときの概念だと  
 か分類だとかいうことに行くけれども、農業統計で一番  
 大事なのは収穫高（プロダクション）だよ。そのプロダ  
 クションをどうして出すかというと、エリア（面積）に  
 イールド（単位面積当たりの収量）を掛けるかっこうで  
 プロダクションを出すというのが普通のやり方なんだ。  
 収量を出すのは、F A Oなんかがワイワイって、オブ  
 ジェクティブ・メジャーメント——実際に客観的にそれ  
 をはかって、その数値を使ってやるという方法。昔は、  
 いわゆる聞き込みというか、見込みというか、これは上  
 のでき、中のできというので、日本でもずっとそんなの  
 でやって、収量調査を出していたわけだ。  
 あとは片一方の面積だよ。この面積はキャダストラル  
 ・マップというか、土地台帳がきちっとしていて、その  
 面積がリッパならは、そっちから面積が出てくるし、な  
 いと、やっぱり役場なんかの見積もりとか、それをまた  
 仮に統計調査でやるとしても、個々の百姓に「おまえど  
 れだけ土地を持っているか」と聞いて、その返事をもと

にして出したりしているわけだけれども、日本でも縄延びというのは1割、2割はあるというし、明治のころにやった土地台帳の面積なんというのと、実態の面積と合いやしない。今度家の方で区画整理したって、家の近所で1割ぐらいかな、もっとひどいところじゃ2割だか3割ぐらいあるわけだ。また土地を正確に測定することは大変だから、統計的には、面積をはかるというのも非常に大きい問題なんだ。その1つの回答というか、この前も触れた沖縄の農地調査のときにやったのは、それなりに少しでも精度のいいデータを出そうというので考えた結果なんだ。

いわゆる面積というのは何かという問題がある。そんなのあたりまえじゃないかという気がするんだけど、日本のように、田んぼではっきりしていて、いわゆる本場というのかな、畦畔といって、田んぼなんかだとあぜ道のところに水が張られるところがあって、このようなのだと、あぜを除いた面積が、収量を掛ければいい数字だぐらいのことはいえるわけだけれども、これは非常に特殊な都合のいい場合なんだ。ことに日本なんかじゃ、縦、横ちょっと違った幅になっていて、正常植えなんてやっているときにはわりあいいいんだけど、パツとまくとか、はっきりとした境界のないようなものがあるわけだ。日本だって、お百姓がつくっている野菜畑でそろえるというのと、端っこのところはどこが終わりか、どこで始まるかなんて、ちょっとわからぬだろう。

西平 田んぼは平面だけれども、畑は曲面になっていきますからね。

水野 それもあるし、もっとひどいのはアフリカなんか

だ。F A O へ行っていたときは、ローマはアフリカに近いが、アジアのことはわかりにわからないんだ。アジアでもやっぱりそういう問題がある。というのは、日本では米といっても農林何号といって、まく種は決まっているわけだ。ところが、純粋種の種が手に入るといのはよっぽどのところなんだ。純粋種の米の種じゃなくても、麦が入っていない米の種が手に入るところはいいところなんじゃないかな。

アフリカなんかだと、種をまくんだけれども、米も麦も大豆もトウモロコシもまじっているような種をまくわけだ。刈り取りというのは、日本のようなぐあいにやるんじゃないくて、熟した穂をつまんでくるようなやり方で、そんなのを女にやらせたりして、首からこんなように突っ込むなんというのは、テレビでやっていたりするだろう。あんなのだと、時期が違うときに熟してくれれば、いまは麦を収穫する、いまはトウモロコシだ、いまは何だということになって、そう構わないようなものだ。

西平 どれかがうまくいってもいいかもしれませんが。

水野 一種の保険にもなっているかもしれない。

ところが、このようなところにいままでのような、それこそ欧米式の面積と収量をどうのこうのといったって、一体どうやって出させるか。そこでいう面積とは何か。いままでの観念は、何も作というのを除いて、何の面積と何の面積を足したものは、現実にフィジカル・エリアに一致するわけだ。もちろん、空地があれば空地も足してだけれども。ただこれだと、何のことはない、5種類の種が入っていれば5倍の面積が出てきてしまうわけだ。そうすると結局、エリア・アンダー・クローフとはどう



デファインするかという、ちよつと考えると全然話にならないようなことが問題になるんだよ。

そこら辺のでいくと、これはいいコンテキストかどうかかわからないけれども、国勢調査とか農業調査で、国勢調査で人の数を数える、農業調査で、たとえば牧畜で家畜の数を数えるというときに、国勢調査も、ちゃんとどこかに家が建っていて、決まったところにいるから、そこへ行けば人間を数えやすいわけだ。これが金魚だと、オレの家の池に一時200匹以上置いたんだけれども、200匹なんというのはもちろんだが、20匹とか30匹の金魚が小さな鉢の中で泳いでいても、泳いでいるのは、何か毒を入れて浮き上がらせて数えないことには数えられないよ。

だから、ムービング・ポピュレーションの国勢調査で頭数を調べるのはどうするか。遊牧民なんかがあるわけだ。全然統計学に乗っかってこないというようなのが実は非常に重要な統計の研究テーマなんだ。動くやつを追っかけろ。国境なんかお構いなしに行ったり来たりする。

しかも極端なことをいうと、われわれだったら、オレの所有している牛が何頭とかがってみんなちゃんとわかっているわけだ。ところが遊牧民とかは、アメリカの「ローハイド」じゃないけれども、西部劇なんか見ても、焼き印なんか押したりしているけれども、どれがどれだかわからない。焼き印も押さないで、家畜の群れを追ったりしているのもあるからね。ちよつとやそつと減ろうと、よそのが入ろうと、そんなことお構いなしだ。何も数えるわけじゃないんだから。「あなた何頭持っていますか」と聞いたって、「見たとおり、これがそうだよ」という。

「これ」というのは、きょうときのうと数が違うかもしれない。その「きょう」というのも、一体どうやって数えたものかはっきりしない。さっきの金魚じゃないけれども、ぶっ殺して数えるわけにはいかない。

それでいろいろ、航空写真だとか、このごろじゃサテライトのレーザーだとか、南米なんかで使われている。その点じゃ、非常に新しい進歩的なテクノロジーを使っているのもあるんだけど、そのもとで所有という概念がはっきりしない、所有する家畜が決まらないようなところだってあるわけで、そんなのをどう決めるかという問題だってあるわけだ。統計屋とすると、回答を、何とか納得できて、どこかへ使ってもいいように決めなくちゃいかぬわけだ。ミックスド・クロッピングの場合のエリアをどうすべきとか、ことに、アフリカでオレが幹事役してやったセミナーを開きに行ったときのペーパーにそんなのを取り上げた。考えても非常におもしろい。

水野 国連の一番の統計の会議というと、スタティスティカル・コミッション(統計委員会)で、いま日本は会員になっていないのかな。昔会員だったときは、森田さんとか、その後でさっきの斎藤君だとか、その後で、この間まで川合三良がやっていた。国連の機関で、ここで最終的には世界的な基準だとか、そのプロポーガルだとか、スキームなんかを決めたりするわけで、もちろんそれへ持っていくまでに、実質的な審議はいろんなところでやっているわけだ。

F A O にアドバイザー・コミッティというのがあって、中にいるときには事務局で参加して、そのときに、日本から久我(通武)さんになってもらって、2年ぐらい来

ていたことがある。オレがこっちへ戻った後で、今度は  
 アドバイザリー・コミッティーのメンバーを頼まれて、  
 この地域から2〜3人出たんだよ。そんなのに行ったか  
 ら、またそれで相変わらず、農業センサスに出てくる何  
 はどうだとか、そんな問題なんか考えたり、コメントし  
 たり、一議論したりするチャンスはあった。

メソドロジー担当のときには、一時FAOの大きなプ  
 ロジェクトで、フード・コンサンポション・サーベイ  
 日本でも相当ワアワアいったが、WHOとFAOの共同  
 で、これを大きな問題として、「フリーダム・フロム・ハ  
 ンガー」とかに関連してやっていたので、日本でも厚生  
 省なんかがいろいろやっていたわけだ。統計部の方では、  
 食糧消費調査についていろいろやっていた。だから、統  
 計を代表して、ニュートリション・デイビジョンなんか  
 に行って、会議に出てゴチャゴチャというのがオレの仕事  
 だったんだ。

昔は、いわゆるニュートリティブ・バリューなんとい  
 うのは、大規模に調査やったりすることはできない。そ  
 れこそほんのちよっと出てきた家計調査みたいなデータ  
 から計算する。もちろん日本だったら、栄養調査といっ  
 て、小規模だけれども細かく聞いたものがある。たとえ  
 ば大豆を何グラム食った、そうすると、日本標準食品分  
 析表で、大豆1グラムには何がどれだけ、何がどれだけ  
 というので、それを掛け算して、それを足して、カロリ  
 ーがどれだけだ、プロテインは何グラムだ、何だかんだ  
 って出しているわけだ。

それは要するに、そういうことを問題にする人たちが  
 直接調査をして、それからニュートリティブ・バリュー

を計算するというよりも、アベイラブルな統計を使って  
 それを出そうというかっこうで、みんなとはいわないが  
 大部分が算出されているわけさ。それも、フード・コン  
 サンプション・サーベイはどんなぐあいにしたらいいか  
 というので、それはまたいろんな段階で栄養調査がある  
 わけた。一番ひどいのは、たとえばフード・バランスシ  
 ートで、どれだけ生産されて、どれだけ輸出して、だか  
 らこれだけのものを消費した、それを何人で割って、1  
 人当たり幾らなんて大ざっぱな出し方だって、食糧の需  
 給表に基づいたものもあるわけだ。それをだんだんに、  
 プロセスの間の目減りとかでいろいろ入れたりして、そ  
 れでもいわゆる業務統計というか、既存の統計をいろい  
 ろやっていつて計算を出しているわけだ。

先進国はそれでいいけれども、後進国の場合に、飢餓  
 かマルニユートリッションかといっているときに、どん  
 な調査をやらせるか、その方法論を考えるというのが、  
 オレがいる間の問題だったわけだ。

オレにいわせれば、あたりまえな、自明なことだけれ  
 ども、もしそのようなニユートリティブ・バリューを出  
 すことが目的なら、何も大豆何グラムだ、キャベツ何グ  
 ラムだ、キャベツは何かだとか、肉の中等のやつの基  
 準値が幾らだ、何だかんだと計算してどうこう出すとい  
 うんじゃないしに、連中の食っている食糧の標本をちよっ  
 とずつ持ってきて、全部まとめてミキサーで回したやつ  
 を1回分析すれば1発じゃないかというのが、簡単にい  
 うと筋なんだけれども、そういうオブジェクティブ・メ  
 ジャーメントで、計算が案外大変なようで大変でないよ  
 うな方法を主にしてペーパーを書いたんだよ。

どうやら統計の方はそれであれだったんだけれども、  
 これを一生懸命やっていた統計のドクター・シュミット  
 あたりは、全然そんな斬新なやり方じゃ気に食わないん  
 で、結局オレの書いたのは一種のお蔵入りにさせられ  
 ちゃった。いまでも、もしそういうことが本当にあれだ  
 というんだったら、いままでのようなやり方じゃ大変な  
 手間暇かかるから、それよりも簡単にできると思う。  
 タイなんかだと、お坊さんというのは朝4時から5時に  
 托鉢に歩くわけ。そして米をもらって、帰るとそれを食  
 わないんだ。みんなが持って帰ってきたのを全部ぶち込  
 んでおかゆにしちゃって食う。これはタイだけじゃなし  
 に、京都あたりでも、あそこら辺の托鉢も大体原則的に  
 はこんなものらしいね。こんなのは、どこで米をどれだ  
 けもらった、肉をどれだけもらったなんてアホなことい  
 う必要はない。全部まぜちゃってやればノ発だよ。  
 いわゆる研究者の場合だと、さっきいった抽象的な場  
 合で、実際のあれと離れているから、行政的とか、その  
 他の制約は何もないわけだ。ところが、実際の活動とい  
 うと、制度がある、予算がある、人間がある。いろんな  
 こういう制約があって、ちよつとしたことでもなかなか  
 筋が通るようにならないという点があるから、ステイ  
 ステイカル・メソドロジーとすると、こんなのはちよつ  
 と普通のと大分あれだけれども、そののところでどんな  
 ふうにするかというのが実は大事なんだ。  
 いまは、国勢調査の報告書は、コンピューターで原版  
 が出て、それをオフセットでやって出すようになってい  
 る。ところが初めは、漢字印刷も何もできなかったわけ  
 だ。そのころはどうしたかというと、初めはみんな字を

組んでやったわけさ。これを清刷りといって、表頭、表側だけきれいに印刷して、コンピューターから出てきたボデーを合わせて、それを2つ張り合わせてつくればいいじゃないかといって作り出したのが、それこそまだ十何年前だ。グラフをつくったりするのに、いまじゃもう貼り合わせもやらないで自動化されているけれども、そのころはそんなこともやっていなかった。その頃は、校正なんかでデータの入れかえなど何かやると、活字がガラガラとそこで1回ひっくり返されちゃうとか、どこかが踊っていたとか、なくなったとか、そんなアホみたいなことでも、実際問題とすると大事なポイントなんだよ。

ここでは、昔はグラフをたくさんやらなくちゃいけなかったが、いまはコンピューターに連動していて、コンピューターがグラフをかく機械が入っているよ。昔はそんなものなくて、この職員がいたわけだ。オレー一体何で見つけたんだったかな、後でスクリーンだか、ジプトンだか、和製品が出てきて、要するにほかの問題に使うんだけれども、ハッチになっている柄のがあって、それを切り抜いて張ればいいようなのを使ってグラフをかくとか、もっと前にいけば、グラフだと一々手で字を書いたものだよ。ところがレタリングセットなんというのができた。レタリングセットというのは外国でだけれども、日本だって、大きなものについてはレタリングでやる。レタリングのためというよりも、箱かなんかに荷物の表示をしたりするのにつくった……。

西平 オフセットというんですね。

水野 ところが、グラフをかいたりするときに使うアイ

デアは、いまじゃコンピューターのプログラムのセルロ  
 イドなんかでつくったのはみんなあたりまえになってい  
 るが、こんなことは、何しろ15年だか20年の間に、全然  
 そうじゃないのから変わっているわけだ。  
 西平 だけど、それは1つは、ぼくたちが国民性のとき  
 にあれするのに、グラフのかき方をそろえるということ  
 で、全部同じ体裁にそろえちゃえば、表頭、表側は一遍  
 に張り合わせればいいということになるわけですね。そ  
 ういうことが昔はやられていなかったんですね。1つ1  
 つ違っていた。  
 水野 国民性だとみんな違った、それこそそれぞれにう  
 ま味を出したというのがあるけれども、国勢調査の報告  
 書というの、46県、表に何か同じようなのがくっついて  
 いて、こっちのこれだけが返ってくるとか、町名が出て  
 くるとかというのがあるんだけど、いままではそう  
 いうことやらないで一々組んでいたわけだ。といって、  
 全部がちょろいことばかりじゃなしに、中には相当おも  
 しろい、むずかしいものもないわけじゃない。  
 オレは2つの機関に行ったんだが、統計局の国際担当  
 国際協力の統計調査官をやっていたからということもあ  
 るんだな。ユネスコで図書出版統計とか、図書館統計と  
 かをやるので、ここら辺の基準とか分類とか、やっぱり  
 デフィニションの問題で、全然種類の違った調査を頼  
 まれた。こんなように、日本のよその省庁でもやってな  
 いものというのと、統計局に声がかかったりして、そうす  
 ると、各課でやってないんだったらオレが出ていくとい  
 うことで、こんな問題には大分触れるチャンスがあった。  
 それで1つ、文化統計も頼まれてやった。これも、東

京で会議があったときに、それに出席してくれないかという話があったのだな。それから後で、ユネスコに頼まれて文化の分類をつくったり、考えたり、モスクワでヨーロッパのそののセミナーを開いたときに、コンサルタントで招かれた。この間も、また一つ、アジアでやることになるから、2月末までにこういうのでペーパーを書いてくれとやってきた。その話はおもしろくて、それをやってみようと思うけれども、その指定の条件じゃちょっと引き受けられないからというので断った。

もう一つはR & D ( Research & Development ) の統計。これはOECDでやっていて、今度ユネスコがそこに殴り込みをかけて、両方がガチャガチャしているんだけど、これまた統計局でやっていた関係で頼まれた。ここの辺のはまだ、ずっと決まった慣行はなく、どんなぐあいにつくっていくかという段階にあるので、それを考えるとおもしろい問題があるわけだ。R & Dじゃ、何を研究とするか、何が理論研究、何が応用研究、何が開発研究かというところもあれだし、その学問分野で使っているものでもだよ。

このようなことにもうちよつとみんなが関心を持ったりするといいんだけど、いままで見たところだと、そういう場が少ないからかもしれないけれども、統計やっている者でも、こういうのに興味を持つのはいないんだよ。ことに、日本がよそに対して統計で指導性をどうのこうのといったときに、ただ日本のシステムを、こうだからこれがいいんだからということを入れるのはよくない。それは日本の環境とか客観条件の上に育ったもので、日本じゃいいのかもしれないし、よくなくとも歴史



的に許容されているのかもしれない。だけど、これをよそへ持っていったってどうのこうのいうところにはいかないのが大部分なんだよ。だから、そういう観点からいろいろ考えてくれるといいんだけどな。

この経験はたくさんはないんだけど、外国で何かアドバイスするとかで、アドバイスというほどじゃないけれども、バンコクに行ったときは、タイの統計局にときどき出入りして、さっきのトレセンに来たのなんかがいたり、いまでもそのときの統計局長とつき合ったりしている。この間も何か頼まれた。

京都に東南アジア研究センターというのがあって、もういまはやめたけれども、市村貞一君というのが所長をずっとやっていた。これの関係で、3〜4回、何カ月かインドネシアに行った。これは、初めは国民所得の計算をするということだったが、向こうに、日本なんかで計算するのに使うようなデータがない。じゃ、そのデータをどうするか。そうすると、いままでのパイオニアたちがやった国民所得の計算というのは、欧米に存在している統計をいろいろ操作したりして出しているわけだ。だから、それと同じようなかっこうでやろうというとなかなか簡単にいかない。調査して必要なデータを出すとすれば、どんなかっこうでどんなふうにするかという問題は、経済統計学者でもいままで余り考えたことがなかったろう。そこら辺のをジョイントにして、けんかまで行かなくても、大分うるさい議論なんかやって、こんなのをやった。初めはそれでいったし、後は、それがまたインプット、アウトプットの表だとかつくった。2〜3年たってから、今度はスマートラのデベロップメント・プロ

グラムをつくるための一環として、こういうものを出すプロジェクトに行ったりした。

オレがいたいのは、ある意味でいえば、食糧消費もそうだし、農業生産もそうだし、後進国で、先進国ではこうやって計算して出しているような統計が欲しいが、具体的にその材料がないときに、どんなふうにしてそのようなものを出すかということについて、何も理論的なものを書いたわけでも、それをすべての場合に対して提唱しているわけでもないんだが、このようなプロジェクトに、いろんなかっこうでちょびちょび関与できたといふのは、おもしろかったし、意味のあることだと思ふんだ。また、こういうのが大いに盛んになる必要があると思ふ。

このようなことに関連して、インドネシアのこの連中を20～30人日本へ招んで研修をしたわけだ。そうすると、エコノミックサイドの研修は京都へ連れて行って、そこで2～3週間から1月研修する。そうじゃない統計のは東京でというときには、これは統計局のプロジェクトというわけじゃないんだけど、アジ研を使ってやったんだったかな、1月ぐらいにわたってこういうのをやった。

そういう研修のときには、こっちが知ってる方法を教えてやるのじゃなしに、向こうの問題や事情を聞いて、そののところはどうであるかを考えるようなことをしなくちゃダメなんだ。

この夏、ブラジルで日系人の調査をやるということで、何しろ日本の23倍あるところで、日本の総人口と同じくらい。そこに散らばっている中の1%に満たない日系人

を、それこそもちろんセンサスなんかやるわけにいかないが、何か妥当なサンプル調査をしたい、しかもそのために日本のようなリストも全然ないんだ。ここで一体どうやって標本をとるか、こんなような問題で、行っただ。

アジ統の研修での講義とか、その関連では幾つかの場があったけれども、スタティションの中に、こういうものを興味を持って取り上げるやつがもうちょっとたくさん出てくれるといいと思う。そうやって初めて、日本は世界に誇る統計ができると思うんだ。

西平 日本では、だれかがやったまねばかりですからね。

水野 本当に、いままでのまねで片づかないようなところでみんなが求めているものがあるって、それがケヨロイのような問題だけれども、やってみると結構おもしろいんだよ。

きょうはこの辺で。

第 4 回

昭和 57 年 9 月 17 日 (金)

総理府統計局にて

水野 僕は、いろいろな関係で統計局にも統計数理にもいたし、外国にも行っていた。行っただけじゃなしに、国際的な統計の場に関与したから、そっちの方のこととか、初めの世論調査、またこのごろの世論調査との腐れ縁と  
 いうか、続いているから、いろいろなところでまだちよつとずつ触れていなかったことでも思っ……。

こっちの統計のキャリアというのは統計数理研究所で始まっているわけで、統計数理研究所のことはちよつとは触れているし、小生だけじゃなくても、松下とかほかの人たちも触れて、ある程度わかっているだろうとも思うのだけれども、要するに、草創期で、東拓ビルにいたことはこの前出ていたが、僕と小川君が入ったころは、場所がなく、学士院から出て細川邸へ移ろうとしていたころで、それで移った。そして、飯田に疎開していた連中が戦後戻ってきて、行くところがなく、あそこに顔を出すくらいの上に、われわれは東拓ビルへ出ていった。

そうしたら、今度は大蔵省が余り直接の協力もしないとか、建物の関係やなんかだったろう、東拓ビルから出ていけということになったんだらうと思う。それで、行くところがないから探してくれということで、三軒茶屋へ移ったわけでしょう。ここら辺は、オレか林君ぐらいがいておかまいとあれだろうから、ちよつと触れておく必要があるかと思う。

三軒茶屋は、ご承知のように、昔、砲兵関係の連隊だったかがいた。われわれが使ったのは将校集会所の古い建物で、オレの机の後に、菊のご紋章がついていたようなんだな。小川君なんか世帯持ちで、住むところがなく、

あそこの物置きだか守衛小屋に住んだりしたこともあった。そんなころだった。まだあそこら辺は大分あいていて、ゆったりしていたから、それこそ、休み時間に庭でキャッチボールとか、サッカーのボールをけつとばすぐらいが健全な運動だったと思う。

あそこにいる間だったね、オレがまだ部長をしているときに、広川弘禅の口ききで、ふろ屋にかっぱられる事件が起きたわけだ。広川弘禅はあそこのところの有力者で、払い下げを大蔵省に願ひ出て、研究所で使っているあれが取られそうだというのを、大分遅くなって聞いたのだったかもしれない。どこへどう陳情に行っているかわからなくて、行ったけれども、結局、既定方針で決まったので、門前払いで済んじゃって、庭先のところをふろ屋に200坪かそこら持っていかれたわけだ。広川弘禅だから「弘禅湯」という名前がついた。しかしふろ屋も、そんなことを知ってか知らないでか、引っ越しのあいさつに「どうぞふろがわいたらば、ただでお入りください」というわけで、(笑) 昼休みに、運動した後で一番湯に入ったりしていた。

西平 非常口からね。(笑)

三軒茶屋というところ、いまは1つのセンターになっちゃっていますけれども、とにかく、あそこは電話は市外で、市内に電話をかけるのに、朝電話を申し込んで、夕方くらいにしか通じないというところでしたからね。

水野 しかも、初め研究所には自動車も何もないんだ。三軒茶屋にいるときに、やっとなダットサンのエンジンが200とか300とかの小さなトラックが配給になったわけ。初めは運転手いたのかな、いなかったのかな。渋谷かな

んかが……。

西平 それで、小型トラックに乗っていたというので、  
渋谷を見つけたんですね。

水野 だけど、年がら年じゅう彼が運転していたわけじ  
ゃない。もう時効だからしゃべるけれども、オレは何し  
ろもぐりで、免許証なしで成城まで運転していったり、  
あそこら辺乗り回していたからね。結局、前の玉電で渋  
谷へ出たわけで、渋谷からあと国電くらいだろう。大変  
だよ。三軒茶屋のときに、こっちはやめて統計局へ来た。

西平 少し祖師谷にいらっしゃったんじゃないですか。

水野 いや、オレは祖師谷には行かない。談話会かなん  
かのときに、もぐりで自動車を運転して向こうへ行った  
わけ。

三軒茶屋のときだって、あそこにコンピューターとい  
うか、ソーターとかタビュレーターぐらい置いていた。  
それから、これ見ると統計技術員養成所というのは附属  
だけれども、別に文部省から発令が出ているくらいだな。  
「附属統計技術員養成所講師を嘱託する」とか書いてあ  
る。オレは、あそこの主事をやっていた。白石は、あそ  
この主事になっていたと思うんだけれども。

西平 主事だったか、所長だったか。

水野 所長という名前じゃなかったと思う。

だから、あそこにいたけれども、あそこに全部が来た  
ことはないんだ。もうそのときには、祖師谷の方が大き  
く借りれたから。

僕が統計局にいたころ、麻布のいま統計数理研究所の  
あるところは、総理府統計局が戦争までいたところなん  
だ。戦争の終わったときもあそこにいたんだけれども、

統計局は追っばられてこっちへ来たのかね。

西平 中国大使館の宿舎になっていた。

水野 そうそう。統計局はもうここにいたんだけれども、いまこの研修所になった統計局の附属の養成所が麻布でやっていたわけ。オレなんか、ここへ来たときに、研修所の講義とばうとあそこへ行ったりしていた。それが、ちようどこっちの総務課長が大竹さんぐらいのときかな、何か話が出て、何しろ三軒茶屋じゃ、統計数理はどうもならないと思ったのかな、場所が広いというようなことで。

西平 そうじゃなくて、祖師谷が追い出されることになったんです。

水野 だから、祖師谷から追い出されて、三軒茶屋へ行くのも1つの可能性だったわけだ。

西平 でも、それはとても入り切れない。

水野 だから、つくり直すとか。そんな問題があって、すぐ入れるということもあったんだと思う。それで、統計局のあの建物と三軒茶屋と物々交換という話が起きた。ことに、いまの統計数理研究所のところは、「日本の統計発祥の地」という碑も立っているくらいのところだからね。

西平 そうじゃないですよ、あの碑は。(笑)

水野 あれ、よそから持ってきたんだろう。

西平 いや、あの碑は全然それと関係ない。だれかが桜の木を植えたなんというもので、全然そういう記念碑じゃないんですよ。

水野 一番初めに統計局があったのはどこなんだろう。

オレはっきりしないな。オレは、それでその碑があそこ



へ行っているんだと思った。

西平 全然関係ない。

水野 いま公務員住宅になっちゃって、オレなんか荷物を入れてあった研究所の南側、住宅の赤レンガの倉庫のあたりは、相当古くからつくってあったわけだからね。あれは、統計局がつくったんだと思うよ。だから相当古いんだ。

西平 まあ、古いことは古いでしょうね。関東大震災のときは月島でしょう。

水野 いや、月島だけじゃないんだ。月島にもというのだったと思う。ひとつ、そこら辺のは統計局のとつき合わせるといいけれども。

それで、三軒茶屋が総理府の統計養成所の寮になってあそこをもらったわけだ。それから2〜3年して、あそこにもいまのりっぱなのができた。だから、統計数理研究所の建物は、そんなくあいに動いている。

西平 中国大使館の宿舍の跡に、われわれは直接入ったという感じなんです。交換したと思っていたら、そうじゃないなくて、三軒茶屋を統計局に取られて、麻布の方は間借りだったわけですよ。

水野 一時はね。

西平 いや、大分長く。それで、小田原局長のときにやっとな……。

水野 そうか。それで片をつけたわけだ。どっちがうまいことしたのかわからない。三軒茶屋だってあれだけれども、いまのあの場所は静かで、何しろ、文教の地としていいところじゃないか。ただ、あの近所がゴチャゴチャいって、高いのを建てられないで、2階でおさめたと

いうのがちょっと名残りだけれども、いずれ先へ行きや  
 4〜5階ぐらい建てるのにどうのこうのということのな  
 い場所だしな。まあ、結構だよ。  
 オレたちが行ったときの事務長というのは砂子といっ  
 たんだ。これが相当なもので、大分強引なこととか、ま  
 だあのころは公儀がルーズということがあって、いろい  
 ろ文句いわれるようなこともやったりしたんだ。また確  
 かに、悪いことも少しやったのかもしれない。買えるも  
 のは全部買えというので、ゴソツと買い込んだりしたお  
 かげで、紙がないときにけい紙があるとか、中には要ら  
 ないものがたっぷりあり過ぎるというものもあった。  
 やっぱりわれわれも、大きな意味でいけば学者という  
 のか、それこそ非常識なことをいったり、やったりする  
 ので、文部省の間で迷惑したというのも事実あったかも  
 しれないし、また、こっちのいうように、もう少し何と  
 かやらなくちゃというような点もあったと思うんだ。  
 何しろ、所長の運が悪かった。所長の運が悪いという  
 のは、掛谷先生に亡くなられちゃって。いまでも思い出  
 すが、掛谷先生は、いまと違って、安い酒を飲んで、か  
 ぜ引いたのがもとで亡くなったというふうに了解してい  
 たけれども、そして、佐々木さんが来たわけだね。  
 西平 いや、末綱先生が兼任になった。  
 水野 そうそう、もちろん、末綱さんが兼務でやってい  
 た。その兼務でやったところが、さっきの東拓へ勤くころ  
 だったように思う。佐々木さんの方が窪田さんよりも後  
 だったか。  
 西平 いや、窪田さんが先です。  
 水野 そうだ。窪田さんが先だったか。

西平 三軒茶屋に越したのが9月ぐらいで、窪田さんの  
 発令が12月初旬で、それで、僕が窪田さんの辞令で二十  
 何日に発令になったんです。

水野 それが昭和二十何年？

西平 24年の12月じゃないですか。

水野 そうすると、24年に東拓から向こうへ移ったとい  
 うことか。

西平 秋ぐらいに移りました。

水野 そうすると、東拓に22年から2年半ぐらいいたの  
 かな。だけど、平八なんか行ったのはもうちょっと前か  
 もしれない。あれのときには、平八の研究室がまだ大蔵  
 省の中に残っていたのかな。出勤しなかったようなかっ  
 こうだ。どうなっていたんだろう。

西平 坂元平八さんは、東拓に来ていましたよ。

水野 だけど、東拓の統計数理の看板は外れていたわけ  
 だから。

西平 そのまま後、平八さんは祖師谷に行っていました  
 よ。

水野 そうだったか。

西平 高木金地とか、ああいう連中とか。

水野 いま考えれば大それた口をきいたものだけれども  
 それまでは、たとえば統計局からも来いといわれたりし  
 たけれども、いま出ると統計数理研究所がどうなるかわ  
 からないから心配だなんといっている、それで窪田さん  
 に、もうこれでどうやら安心できるから、辞表出してほ  
 かのところへ行くというようなことをしゃあしゃあとい  
 ったような気がするんだ。

ところが、その窪田さんが亡くなられて、ぐあいが悪

くなっちゃって、そして佐々木さんが来たが、また佐々  
 木さんが悪くなっちゃったんだな。それで末綱さんにな  
 った。だけど、末綱先生から後は問題なくうまく行って  
 きたというところだろう。

西平　そうです。末綱先生が、定年の1年前から1年間  
 兼任で来られたんです。

水野　末綱先生と兼任のどうのこうのでちよっと思いい  
 した。統計審議会には統計数理研究所の所長で入ってい  
 たんだけど、末綱先生は、そんなのめんどろくさい  
 ということをいわれたような話も聞いた。そんなので、  
 いつの間にやら統計数理研究所が外されちゃっているん  
 だな。

西平　人口問題研究所長が、あとずっと利用者代表にな  
 っています。

水野　何も統計数理研究所じゃなくちゃとはいわないけ  
 れども、ことにいまのような性格でほかのあれだったり、  
 統計学会の関係とかで、そこら辺はもうちよっとあれに  
 なっていたってよかったと思うんだけど。

というのは、2〜3日前に小川君がここへ来て、半日  
 おしゃべりしていったんだけど、オレが、統計学会  
 の方で気に入らぬということをした。日本だと、統計  
 学会というように、何々学会で「学」がついている。数  
 学会は教会というわけにいかないから、これはしようが  
 ないかもしれないけれども、外国だと、たとえばスタテ  
 イスティカル・ソサエティーとかアソシエーションとい  
 ったときに、これはただ「統計」で、あとは協会となる。  
 日本語じゃ学会というけれども、必ずしも「学」という  
 字はついてないんだ。また、統計というのは統計学か、

統計論か、統計術か、メソッドかセオリーかと聞くと、それはセオリーじゃなくてメソッドだという方が、外国のスタティツシヤンには多いんだ。何も政府にいるスタティツシヤンだけじゃなくて、研究所へ来るような学者連なんかでもそうなんだ。それが、日本じゃ「学」になって、「学」だから統計学会も研究することになっているわけだ。そうすると、いわゆる統計の実務を実践するといふのはちよつと違ってきて、外国だと、いわゆるスタティスティカル・ソサエティーを、そっちの方と一緒に、線を引かないで文句なくいっているのに、日本だとよけい線を引かれちゃって、何か疎遠になるし、お互いに疎遠にしちゃっているようなところがある。

そんなのも、細かいところだけれども、このごろIS Iでいっているし、この間も全統連で、理論家と實際家のどうのこうのとやったね。学というのも、昔は、大学では学を講ずるとか、大学でやるものはみんな学がくっついていっていると思っているんだな。そういう意味でなら学でいいんだ。学というのは、ドイツ語のヴァイツセンシャフトはわりに近いと聞いたけれども、何とかサイエンスとか、日本語の漢字的なコンテクストでの学だということにすると、少し抽象化された死に物になっちゃったような感じがして、そこに、日本の統計学発展にもまずい点がいちろいあるような気がしているんだ。

話が飛ぶようだが、こっちは、統計審議会には直接参加しているわけでも何でもないわけだけれども、あれは、会の下に専門部会を幾つもつくってやるんで、いろんなのに突っ込まれたし、統計の実務についてそれぞれ部会ができていて、もちろん、担当している役所の責任者だ

とか、それに関連あるよその者だとか、西平君だって、委員で分類部会の中に入っていたろう。

西平　ただ、行管は、われわれを役人だと見ているわけですよ。大学の教授やなんかと違うわけですから、だから、僕は文部省ということになっている。文部省のことなんか何も知らないけれどもね。だから、審議会の委員になるときも、学者の代表としてはどうもダメみたいですね。

要するに、人口問題研究所長は利用者というので、彼らは役人として考えているわけで、ときによって、ところによって、われわれは役人扱いなんです。学者じゃないんですよ。そこにちょっと問題があるんでしようね。

水野　もっとも、これ見ると、研究所へ入ってすぐ、教官じゃなしに文部技官になっている。「21年4月勅令193号で文部技官2級となる」と書いてある。

西平　僕たちも技官で入って、佐々木さんのときに、あのころやっぱり行政整理があって、給料が少し下がるけれども、しのんでくれ、教官の方が全体的に考えていいからというので、変わったんですね。だから、佐々木さんのころ以降のがいまの官制で、僕はその前に、佐々木さんに指導普及室長にされたけれども、それはもう載ってないです。いま認められているあれじゃないんですね。

要するに、いまの官制とは違う。勝手に研究所の中でつくったんだと思うんです。

水野　だから、専門部会の中にはそういう議論も多いけれども、やはり、統計実務の根拠だとか、もとになるような考え方という意味で、大いに研究を必要とするような種がたくさん入っているわけだ。大体、分類の問題なんというのは、そのようなことがすぐわかると思う。だ

けど、そうじゃなくても、新しいものをやろうというときは、それより以前のこういう問題があるんだというそのコンセプトがまず問題だな。コンセプトという、たとえば、すぐ失業だとかいうけれども、そんなのじゃなくたって幾らでもある。

ついこの間も、台湾に招かれて行ったときに、いまのあそこでの問題が労働生産性だというんだ。「オレはそんなこと全然知らない」といったんだけれども、「いや、先生は何でも知っているから」とおだてられた。僕はその前に少し勉強したけれども、ここら辺のでも、統計的な場の中で生産性をどういうぐあいに考えるか、何のためにどう考えるかが問題だ。だけど、余りそういうことがやられているようでもなさそうだね。

ことに、われわれの仲間という、式を使って出てくるような統計をいじっている者が多いわけだ。式じゃなしに、ただ1つの概念をどうデファインするかというところが非常に大きな問題になるところもやる統計がもう少しあっていいと思う。

西平 たたとえば、サンプリングというものは、全数調査じゃなくて、いわば「雑なデータ——雑というのはおかしいけれども、全部じゃないのだから誤差が必ず入るという意味で雑なデータから、ちゃんとした結果を出そうというあれだったわけですね。そういうことじゃなくて、いまのやつは、データは精密でなきゃダメだ。ところが、調査の方はだんだん精密にできなくなってきた。

水野 初めにデータありきからやっているわけだ。

西平 解析、分析だけですからね。しかも、高度に精度のあるデータを欲する。

水野 見ばえのいいような扱いだけをやっているわけ。

西平 時代に逆行しているので、いまは いわば 雑なデータでもいいよという分析方法でないと……。

水野 逆に、そんなのはだれもやらなくてもね。ほかの人が、統計学研究のときには、式がよく出てくるのに近いのをやるだろうから、こっちはよけい、そうじゃないものでも、学としてももちろん大事なものがあるからというので、いろんなことで触れているわけだ。

統計局は、たとえば産業分類でいくとサービス業担当ということになっていて、こっちも、あの部会のサービス業の小委員会的主査をやったりした。職業分類という、少しは変わってきているかもしれないが、やはり初めは、国勢調査だけが職業分類を使っていたわけだ。ところが、職業というのは、ご承知のように、人により、場所により、違った解釈が出てくるし、日本標準という大きな国勢調査で使われる職業の概念も、何度か大きく変化しちゃっている。これはまた、これを扱っているILOでガタガタとなったという点もあるんだ。

日本には、学問を発展させるわけじゃないけれども、学的に扱わないと気に沿わないという風潮が、全部じゃないにせよあちこちにあるし、オレなんかそこを大分意識する方なんだけれども、国際的な場では、何はどうあるべきかという議論をやるとなかなか落ちつかないということがあるのか、文句をいわない者があればいいやという感じの方が強いような気がするんだ。もちろん、そこへ行くまでには、甲論乙駁してやっていくんだけれども、立場が違ったりすると一致しないからあきらめていむという知恵もあるのかもしれないけれどもね。



それで、全部がというわけじゃないけれども、いわゆる決まって出てきた世界の標準何々というようなものは、ことにそれまでの過程の議論が全部出ていなかったりするから、そういう点だと、学的な立場で見れば、何だという要素が入っている点はあるんだ。だからといって、ばかにするのじゃなしに、もうちょっとその中に入って担いでやる必要があると思うんだが、いままでの日本の関係者はそういう場を与えられなかったということもあったけれども、オレにいわせれば、与えられるようにしなかったということが大きいんだよ。もうちょっと出ていって何かやればいいのに、出ていくのじゃなくて、会議に出張はするけれども、会議でどこまで議論しているか、中へ入ってかんかんがくがくやるかというところ、うじゃないのが多いからね。

それから、日本なんかだと、会議によって外務省が出るかっこうになると、そういうことになるのかもしれない。前に打ち合わせて、訓令を受けて、その範囲の中しかしゃべっちゃいけない、それ以外はしゃべるべきでないような考えがいろいろあって、技術的な問題を参加者としてしゃべるのは、役所関係で出ていくと制約されるということもあったかもしれない。

いいたいのは、そういう問題が、国の中でも国際的なところでも、たくさんあるんだけれども、国際的なところは、さっきいったようなかっこうで、余り議論が出たようでない文献とか報告書が多いので、ちょっと見たところじゃ、それが余り重要でない印象も与えるんだけれども、こっちが幾つかの国際機関に内側から参画したり、ワーキング・グループとかエキスパート・ミーティング

を動かしていったのからいくと、そういう議論は不必要  
 じゃなしに、大いに大事なんだ。だから、統計学をやる  
 のに、式だけじゃなしに、そっちの方に興味を持つよう  
 な人がもっとたくさん出てきてほしいし、フォーラムで  
 そういう議論に行くことを望むんだけれども、どうも余  
 りなさそうだ。

余り近いところのことをいうと、差しさわりが出てくる  
 かもしれないけれども、たとえば統計局の中でやってい  
 たって、行政は研究とは違うという点はあるから、何も  
 根本のところからほじくり出すことばかりが必要という  
 わけじゃないけれども、やはり新しいことをするとか、  
 長い間やっているときに検討するとか、いまいったよう  
 な観点からのレビューとか、コンシダレーションはなく  
 ちゃダメだ。この間の全統連の話でも、労働省から行っ  
 たのがいっていたけれども、やはり、ある程度そういう  
 ことを考えるような機構と人間がないと、日本の統計は  
 よくならないし、統計がよくなならないということは、実  
 際に関連している面での統計学もよくなならないというこ  
 となんだ。跛行して式だけの方はずっと動いていくけれ  
 ども、そうじゃない方は、全然置き去りになっちゃって  
 いる。

そのようなので、少しは事情が違ったとはいえ、この  
 ごろ経済的な環境がまずいという点も一般的にあるかも  
 しれないが、たとえば、官庁統計というのは人口みたい  
 なのから始まって、一時は経済が大部分であって、経済  
 に尽きていたようなものだ。ところが、やはりそこだけ  
 じゃなしに、もうちょっと社会的な統計にも目を向けな  
 くちゃというかっこうでやってきた。だから、少しはそ

ういうものが始まっではいるけれども、そのわりには余り大きく伸びているようでもないわけだ。だけど、国際レベルでも、統計局でやっている科学技術研究調査、またユネスコでやっている文化統計とか、いろんなのでそれを育てて大きくしたら役に立つのか、すべきだというものもたくさんあるんだけれども、経済的なことで、余分なところにカネが行かないということもあるのかもしれないけれども。一般的に、統計学をやるときに式をやるのが数理統計で、そうじゃないのは、経済統計の一部が統計だなんという変な了解がある。いまから何十年か前の了解では、それでも問題なかったのかもしれないけれども、1980年代の了解としては不適當なのが、日本では制度として続いているからね。

これは、オレがよくいうんだけれども、昔の官立大学の7学部が、学術会議だって何だって、みんな残っちゃっている。だからこの間も、統計学会の統計教育推進委員会でやったときに、統計が限界領域の複合科学でいいとか悪いとかという議論も出てくるんだ。だから、いままでの7学部だというのなら、複合だから限界の領域だろうし、いまだったらもちろん、統計は統計でりっぱな1つの範囲をクレームできると思うんだ。

要するに、研究機関の中の動きじゃなしに、やはり統計実務だとか統計官庁だとか、ここら辺の動きもフォローする。外国だと、妥当に統計学発展のあともあるし、種もあるんだけれども、日本じゃそれが少し軽んぜられてはいないか。

水野 この前、エーデノフとバンコクでけんかしたという話をしたが、エーデノフはニューヨークで次長でアシ

スタントをしたけれども、後で国連の統計局長がかわったときに、日本からアジ統のレクチャラーとしてオレの名前が出たり、ほかにもいろんなことに出た。そのときに、はっきりと、いや、あの水野なんかつけちゃ絶体にもダメだというようなことをいって、E C A F Eの方でも、考えると水野にしたらよさそうだというので、意見を聞いているが、エーデノフががんとして、人事の方がどうにもならないという問題があった。これは、エーデノフが死んじやっているからいいと思うし、これから、そういうことをバカにすることはないかもしれないけれども、国際機関では、そんなドロドロしたあれがいままで現実にまかり通っていたし、日本は、国際機関との交渉のときには、そんなこともあり得るくらいのつもりでいいないといけないうんじやないのかな。

さっきもちょっと触れたように、こっちは、及ばずながらいろんなところで踏んばってきたつもりなんだけれども、日本では、統計というのは無視されているんじゃないが、ちょっとアクセサリーのかっこうでは入っていても、实际的にクルーシャルなところまで統計家が活用されるようなかっこうになってない。それは、たとえば、官庁統計についてもいえるわけだ。日本の統計界は世界の統計界でどうかというと、いままでのところはやっぱりそうだったと思う。表向きに日本のを外しているわけじゃないんだけれども、本気で日本のを入れてどうのこののというところに行っていたかどうかというと、ある程度純粹に学問だけやっているような連中のところだと、国も何もなしにそんなことをいっていることもあるかもしれない。

早い話が、ISIでどうこうしていくとか、会議を開いてどうこうだとか、どこにどんなものをつくって、どんなスタッフにするとかで、ある面から行けば、日本は疎外されてなくて、入っているよというかっこうは、ミニマムなところについているかもしれないけれども、実際のところじゃ、入るようなかっこうになってないんだ。これはもちろん、向こうの方が受けつけないという点もあるし、日本のが、そういうところに出ていくのがわずらわしいというので、行かなかったという点もあるが、よその国だと、ナショナルなメンツをかけてとまではいわないけれども、いろいろなかっこうでバックアップする。日本では、バックアップどころか、足を引っ張るとまではいわないけれども、よくて傍観というところだ。

西平 一つはやっぱり、学会だけじゃなくて、そういう国際会議にしろ何にしろ、学者なんかは自分のカネで行かなくちゃならなくて、遠くて、カネがかかってしょうがないわけでしょう。僕も、海外出張の半分ぐらいは自分のカネで行っていますからね。僕みたいに、自動車を買わない人間はその金で外国へ行けます。だけど、そうでない人たちはなかなか行けないですよ。そうすると、行く人が決まっちゃう。そんなことが一つは問題だと思わうんです。

だけど、たとえば、今度も赤池がISIの副会長になったし、だんだん変わっていくんじゃないですか。

水野 だけど、赤池のビューロー・メンバーにも、裏を一つ見ているんだけれどもね。あれは要するに、松下を押さえ込んだわけだ。ほっといたら松下がプレジデントに出てきちゃうんで、知恵者があんなかっこうにやった

というふうにもとれぬことはない。  
 西平 また、日本の中で赤池のかわりになりたかった人もたくさんいるらしいし。(笑)  
 水野 それはそうだ。だけど、そのうちにまた、日本にISIを持ってきたいがどうのこうのといっているが、そのときには、どうしたって日本でもプレジデントぐらい取らなくちゃオレはいっているんだ。  
 西平 逆に、日本にはプレジデントとかは持ってきにくいでしょう、プレジデントが自分のところへ持ってくるというのは。  
 水野 みんな、次にやるところのがプレジデントになっているんだよ。インドでやる前にラオがやって、今度はヨーロッパだからというので、ダービンとあれて張り合ったとか、大体、そこで花を持たせるようなかっこうではやっているんだ。オレはそう了解しているんだけれどもね。  
 たたとえば、ISIの会員だって、たまたまこっちの森田さんがサインしてくれたからなったので、それまで、われわれの知っている仲間が出ていく可能性が、制度的に全然なかったわけだ。だけど、あのときに6~7人だったのが、いまその10倍近くなっているんじゃないか。50人ぐらい行ったんじゃないか。しかし、なったわりには、いま西平君のいった旅費がないから出にくいということもあるけれども、行ったら行ったでもう少し何かやればいいのに、やらないからな。やっぱり人がいいというのか、何かやらなくちゃいけない。  
 大体、国際機関で責任あるポストについている日本人というのはいない。統計のサービスの長なんていない。

西平　　だけど、１つはやっぱり旅費ですよ。たとえば、僕は政治学会のコオーガナイザーになったけれども、とうとうカネがつかなくてモスクワに行けなかった。それから今度は、WAPOR（世界世論調査協会）の副会長に推薦しようというから、「冗談じゃない。そうしたらは委員会のたびに行かなきゃならないじゃないですか。そのカネまで出してくれますか」といったんです。向こうの連中は、そういうカネがもっと自由に出るんじゃないでしょうか。１回おきにしてくれと、僕はいまでもいつてるわけですよ。とっても行けない。そうすれば、向こうは、会議は出席していなきゃあれだから、それはネグられてもしようがないと思いますね。

水野　　WHOの上村は結構な例だけれども、やっぱり、もうちょっと全般的な分野で国連のあれをやっていいのを、たとえば、いま統計局あたりで三浦とかが行っている。そこら辺のをどうしても欲しいといって持っていくのなら、もっと枢要なところにくっつけて何かやらせる話ならいいけれども、それが安月給のちんまりしたところにくっつけているという感いだ。そういうような問題が非常に気がつくんだがね。

ここにできているアジ統なんというのはその１つのあれで、これをうまくやっていけばいい。できてはいるけれども、何かゴチャゴチャといろんな問題があって、なかなか……。要するに、国際的な問題で、日本の統計がもう少しどこかへ出ていくべきだというのが出てこなかった。それはなぜだというような細かい点を一々集めたり、それをどうこうしなきゃいかぬということも、統計学発展の一環としてまとめるといいと思う。こんな抽象

的な言い方じゃ役に立たないかもしれないけれども。これでもいろいろ差障りを気にしてるんだ。

さっきいったことにも触れるが、統計の実務をしているところで、いわゆる研究とか、基礎的なことに、もう少し労力を割かなくちゃいけないということだ。

西平 一つは、統計というものが幸いにして非常に普及しちゃったから、あるところまでは、学者先生のお世話にならなくていいというところがあるわけです。特に、経済の人もいっていたけれども、経済の統計分野がある程度ではそうだ。昔は一橋の先生がやっていたことを、いまでは企画庁でできるというわけですよ。だから、そういう意味では、大変いい結果がこういうことになってるんだということもあるわけですよ。

水野 それはそうなんだ。きょうのことを考えるとそうなんだが、きょうあれだったからあすもそれと同じじゃなくて、あすはどっちへ向くか、どうなるべきかということを考えるのは、いまのことはよくわかっているという人間だけではない。やはり、基礎から、どんなときにはどうすべきだとか、アカデミックにも考えられる人間がそういう努力をしているのと、そういう努力をしないで、「きのうかくてありけり、きょうかくてありなむ」でっないでいるのとでは大違いだ。どうも日本の統計は、きのうの余光の上にあぐらをかいていて、それも、半分ずり落ちているのに気がついてないような感じなんだ。そっちの方に行く努力もなかなか続かない。それがはっきりとしたシステムの中に組み込まれないと、まただれかポッと来て、責任者がかわったりすると、変わっちゃうということもあるのかもしれない。



西平 統計が非常にポピュラーなものだから、本当はポ  
 ピュラーなことはいいことなんだけれども、たとえば世  
 論調査の話でいえば、5・7・5とすれば俳句だという  
 ように、「あなたのご意見は何ですか」というと、これで  
 世論調査の質問になると思っているところがある。それ  
 は世論調査だけじゃなくて、統計も、「あなたは何ですか、  
 書いてください」といって書かせた紙を数えれば統計だ、  
 そういうところが一番問題じゃないかと思うんですよ。  
 俳句も、いい俳句と悪い俳句をなかなか区別できない。  
 どうしてこれはよくて、これは悪いんだといったって、  
 これはいいでしょうというよりしょうがない。場合によ  
 っては、芭蕉の句だからいいでしょうというよりしょう  
 がない。説明できない。統計というのは、そういう点で  
 俳句と同じだと思う。日本では酒屋の大將までが俳句を  
 つくるわけですが、同じように日本じゅうで役人がみん  
 な統計をとるということになっている。そこに統計のむ  
 ずかしさがあると思うんです。  
 水野 だけど、5・7・5で俳句にはなっているも、そ  
 の中で、いい俳句と悪い俳句だとか、さらに、いろんな  
 ことをゴタゴタ論ずることができるわけだ。  
 西平 でも、論ずるといっても、非常に簡単に、これは  
 同じ言葉が2度入っているからよくないくらいは分かる  
 けれども、なかなかむずかしい。絵だってそうですよ。  
 ピカソのあのへんてこな絵がどうして名画だということ  
 は説明できない。統計というのは、ほかの学問と違って、  
 わりあいにもそういうぐあいに線が引けないから、そうい  
 うところで独特にやっていかなきゃならないんじゃない  
 かと思うんですよ。

水野 独特にというのは？

西平 いわば、象牙の塔にこもっちゃってというのと違うんだけれども、そういうむずかしさがあるものだから、逆に、非常に抽象的なものと、実際に教を教えるのとが分かれちゃう。そうでないと、これは統計学としてすぐれているものだと、なかなかいえないからね。

水野 それとはちょっと違うことをいっているのかも。れないし、君のいっていることも、それはそれでポイントだと思うんだけれども、オレがいまいいたいののは、統計の実務で大きいのは官庁だよ。日本の官僚機構というものはよくできたものだ。よくできたという意味は、なかなか能力があるということだ。しかし、与えられた問題ならいいけれども、先の研究的なことをやるかという、本当の官僚はそこまでやると思うんだけれども、いま100万のオーダーでいる公務員全部がそういう質のいいあれじゃなくて、きのうころがってきたのをオレも同じようにころがすというだけのものが多くなっちゃっているんじゃないか。そして、責任だけは、いろいろやっていくので、わけのわからないことをやられると困るから、無難なかつこうでというのが、よその国よりも強いと思うんだ。

そんなのが、何もあすの問題がどうのこうのじゃなしに、いまの問題だけやっていればいいじゃないかというかつこうでやっている。たとえば、労働省の統計調査部は一時そうじゃなかったというような例外はあるのかも。しれないが、一般的にはそれが全然薄いんだ。たまたまそんなことを思うやつがいたとしても、組織として出ていくためには、そういうことをやっているのが、人事関

係をやっているところでも、会計のことでも、何やっ  
ているのでも、みんなそのように思わないことには出てい  
かないから、1カ所、2カ所でそれをいったって、どれ  
か1つをとると落っこちまうから、そういうところは  
全然出てこない。だから、長期的に見るとディテリオレ  
ートしているといわざるを得ないような点があると思う  
んだ。

それぞれ、それなりの何かやっているのかもしれな  
いけれども、いまひょっと頭の中に浮いているのは、国  
勢調査の調査区を、日本でフィールド・サーベイすると  
きのペナルティート・ユニットとして取って、その中で  
やってというので、サンプリングを効率的に相当うまく  
使っているわけだ。これは、世界的なレベルでもそうな  
んだけれども、大いにそのようなかっこうで使うべきだ。  
そこにセンサスの意味があるということもいわれている  
わけで、いままである程度やってきたんだけれども、少  
しは問題が違ふ点があると、オレも一応思っているし、  
また事実、違ふ点もないわけじゃない。サンプリングの  
ために使うことについて、プライバシーなんかとの関連  
で、変な逆向きの動きが出ているといいたくなるような  
面がある。

いままでは、国勢調査でつくった世帯のリストを使わ  
せるわけじゃないけれども、たとえば、事業所統計調査  
でつくった事業所のリストなんかは、使えといったのが  
だんだんに使えなくなっているようだね。  
西平 たけど、統計学の発展というか、貢献という意味  
で、そういう官庁統計という面では、いまもうひとつち  
よっとないと思うんです。足踏みしていると思うんです。

逆に、そうでない方向のことをやっているんじゃないですかね。たとえば、自然にとれる気象データの解析なり、赤池なんかやっているような方向では、いままでやられてないのが、今度そっちの面では役に立っているものが出てきているのではないかと思う。自動制御だとかなんとかね。

だから、官庁統計の方も、もうやれるところまでは追いついてしまっている。その先は、要するにプライバシーだとかの問題だ。プライバシーはもちろん重んじなければいけないけれども、統計にとってはいわば第2次的なものが邪魔をしている。

水野 妥当な限りはもちろんプライバシーを守らなくちゃいけない。ただ、自然人である個人のプライバシーと、いうことがあるのであって、企業にはセクレシーはあるけれどもプライバシーはないなんということもわからずの議論が、役所でも企業でも大分あるわけだ。

西平 企業の方は、名目はどうであろうと、なるべく秘密にしておいた方が得だ。要するに、統計というのは直接自分の利益につながらないわけですよ。間接的にはその結果大いに役立つことがあっても、できれば自分は答えなくて敵の情報は知りたい。だから、それは名前の問題だけじゃなくて、なるべくなら調査権の……。

水野 みんなが自分の利益を考えるのは事実としてあるよ。だけれどそれをどこまで是認するか。わが国の憲法じゃないけれども、そのまま乱用したりしてはいけないのであって、社会公共の福祉とか利益のための制限とかで自分の恣意をどこかで抑えるとか、そこら辺の問題が……。

西平 しかし、そういう意味では指定統計みたいなもの

がある。ところが、届出統計だとかあの辺の法律でめちやくちゃにされてしまっているわけでしょう。だから法律的にも、行政目的のものはいいだとか何とかというよ  
 うな、変てこな解釈がいっぱいできちゃっているでしょう。  
 水野 だからそれなんかも、きのうはそれでよかったかもしれないけれども、いまのそういうような制度はこれでいいか、どこをどう直すべきかということ、本当は  
 絶えず考えていかなきゃいかぬわけだ。  
 文部省の指導要領は10年に1回だ。何だかんだといっ  
 ても、10年に1回やっているからいいので、ほかの制度  
 も、いまの1980年代に合うかどうかを見直していったら  
 いいのだ。そんなことをしないで、その衝に当たる行政  
 管理庁が、片一方の部局で人間を減らすことを考えてい  
 ながら、片一方の部局では人間をふやしている。どうの  
 こうのいっても、力関係で、統計を考えるのが下だから  
 必要な人間だってどんとこ減らされて、何もいえないで、  
 「あッ、あッ」といって見ているよ。こんなことがまか  
 り通っているわけだ。だから、三千何人いたのに二千幾  
 らに減っているわけだ。  
 確かに、電子計算機で肩がわりできるようになってい  
 る面もあるんだけれども、それじゃならないものもある  
 し、肩がわりさせるなら、それができるような機械の発  
 明が必要だということまで行けばいいと思うんだけれ  
 ども、いまのは、どこかで売り出した機械をどう使うか  
 ということを考えていて、こんなことに使う、こんな機  
 械を欲しいということを一言もいわないのが、オレは気  
 に入らないんだ。この間の全統連でコメントしてくれと

いうので、そんなことをいおうと思うんだ。  
 君がいったように、一橋の教授がやったことをいま企画  
 画庁でできるというふうに、官庁の一般的なレベルが上  
 がったということは認めるけれども、システム自体が上  
 がったので、人間の思考能力が上がってきた。昔の一橋  
 の先生の能力になったということじゃ必ずしもないと思  
 っているんだ。  
 西平　でも、要するに、ニュートンがやったことをいま  
 中学生がやる、そういうことですな。  
 水野　そういうこと。オレにいわせると、一橋なら、ほ  
 かのものでこれくらいのことを考えつくはずだし、当然  
 考える。いまの企画画庁では、そのことは昔の一橋ぐら  
 いのことはやっていると思う。ほかの問題じゃ、いわゆる  
 学者なりが考えるようなことをするかというと、それは  
 必ずしもしていないうんだ。  
 だから、オレが統計局へ来た初めのころに、国勢調査  
 の調査票を、データ・ライブラリーじゃないが、ちゃん  
 と残しておくべきだ、こんなもの捨てるべきじゃないと  
 ワイワイいった。そのときには局で認めるところとなっ  
 て、5%かなんかの大変な手間暇かけてつくったわけだ。  
 ところが、それから何年かたって、オレが外国へ行って  
 戻ってきたら、いつの間にか、倉庫の引っ越しだとかい  
 って、その調査票はどこかへ行っちゃって、ない。  
 だから、持続してきょうのことではないことを考える  
 ところに、もう少し力を持って、システムとしてするよ  
 うなことをしないと、日本の統計学の研究とか発展でも  
 いわゆる限られた式を使う、個人がやるような学は、そ  
 の個人がやっている範囲の中で動いているかもしれない

けれども、そうじゃないようなものは全然跋行的に、  
かえって落っこっていつちゃう。そのことを伝えたい。  
そこら辺で警鐘を乱打してほしいわけた。

アメリカも、いまから約30年前に、ホズディックとい  
って、こういうふうにするためのこんな機械を欲しいと  
いうので、共同研究みたいなのでやって、アメリカでそ  
いつがある程度、センサスのプロセスに使われているわ  
けた。ところが統計局でも、コンピュータを使って相当  
やっていて、少しは、ソーターをつくったとか、リーダ  
ーつくったなんということはなかったわけじゃないんだ  
けれども、向こうは機械つくるだけだから、いまないも  
のを注文しても無理だろうみたいな変な惻隱の情が強く  
て、あすのことに間に合わないというべきか。非常に正  
確な、きれいな、詳しいデータがあって、それから後の  
処理だけにはいま一生懸命花が咲いているようなものだ。

水野 世論調査では、あのころいろんなプロジェクトが  
あって、たくさんやってあったのは文研だね。文研のサ  
ンプリング調査網というのは、全国調査できるのと、各  
中央放送局ができるようなサンプリングをした。NHK  
のは「彙報」にも書かなかったかな。

西平 「輯報」の1号がそうでしょう。

水野 例の理解度調査は……？

西平 あれはNHKだけでやったんです。

水野 だけど、向こうがイニシアチブとっているやつで  
も、よく目黒へ駆り出された。そういうような細かい報  
告は、こっちは書かないけれども、文研書いてないのか  
な。

西平 理解度調査なんかはわれわれが書きましたよ。

水野 そう、オレたち書いた。オレたち書いた以外に、  
 文研でそういうのをやってないのかというんだ。  
 西平 かり版ぐらいで出して、組織的には出してないで  
 しょう。あのころそういうものはなかった。  
 水野 このごろは何しろ、文研もいろいろなものが出て  
 いて、だから当然、あれに当たるようなものは……。  
 西平 あのころは、組織的には出てないから、そのつど  
 何か簡単なかり版のものが出て、それであれじゃないで  
 すか。  
 水野 毎日のもまた、そんなようなかっこうで報告書が  
 出ているわけじゃない。  
 西平 それはもう新聞に出るだけです。  
 水野 新聞に出るし、毎日の中じゃ、どこをどんなふう  
 にして連絡すればどうのこうのというかっこうでスキ  
 ムがあったわけで、これはまた宮森にもインタビューす  
 るといているから、そこら辺に聞いてもらったりすれ  
 ばいい。だけど、彼だって細かいこと覚えているわけじ  
 ゃないだろう。  
 西平 新聞の切り抜き以外は、何にも残ってないですよ。  
 新聞記者というのは、特にきょう一日一日があれですか  
 ら、後に残そうという気は全然ないです。  
 水野 だけど、リーダーシップをやったのは本が出たで  
 しょう。  
 西平 読書調査と家族計画は続けて出していますけれど  
 も。  
 水野 輿論科学のは、一番初めの売り込みは東京新聞だ  
 ったのかな。あれは持ってきて、毎月やってやることに  
 した。だから、今度はどんなテーマでやるということで、



ときどき交渉に行ったのかもしれない。何しろあのころは、いつもくっついていてやっていったような記憶があるけれどもね。あれは報告書は出ていないのかな。

西平 第一、紙がないし、印刷なんかとてもできない状態でしよう。だから僕は、新聞の世論調査の切り抜きは極力保存しているんですが、しかし、新聞社にずっとありますからね。

水野 新聞の古いものはみんなコピーとってあるんだから、そいつを見て、その分だけ集めて、何かちょっとしておくといいね。

西平 各新聞社それぞれ持っているし、たとえば毎日では、ほかの新聞社のものも極力とってあります。だから、僕は充分チェックしたし、30年以降はまずあると思います。

水野 むしろ30年ぐらいまでのね。

西平 そこになると、サンプリングなんかインケキなところもあるんですよ。だからちょっとわからない。

水野 世論調査の方になっちゃうかもしれないけれども、もっと若い世代で、そのときの連中にも聞いたりとすると、そのころの事情がわかるということがあると思う。たとえば、パツシンのところに学生がアルバイトで行っていて、高月なんかはそんなのから入っているクラスじゃないか。あの連中に聞くと、入ったころのことについて、管見かもしれないけれども、そこら辺集めると、やっぱり何か出てくるんじゃないかな。

西平 世論調査の方ですね。しかし、彼らは主に官庁統計のことはっかりなんだな。たとえば読み書き能力調査など、そういう調査の方は全然やってないです。

水野 読み書き能力調査は、西平君なり林君なり、2人

で対談して残しておかなくちゃいけない。

西平 それは、林さんの対談でも残っていますよ。あれは報告書がきちんと出ているからいいんですけれども、日本世論調査協会に出ているのは、官庁統計とその周辺だけです。小山さんとか、加藤美穂子さん、宮森さん、朝日の木村さんとか、いろいろなのがありますよ。だけど、みんなそこのところだけで、出発のところはあれしかないかもしれないんです。

水野 さっきちょっといい出したのは、NHKのあれのときの全国のサンプリングの様式とかは、NHKの中に必ず記録があるわけで……。

西平 いや、全然ないでしょう。こんな書類といって捨てられちゃっているでしょう。要するに、製本されてこういうぐあいになって方々に配られるような時代じゃないでしょう。だから、手書きのものがもちろんあったはずだけれども、あそこも何度も越しましたし。霞ヶ関から目黒に越して、目黒から愛宕山でしょう。もう関係者はいないし。

水野 高宮なんかどのくらいわかっているかな。資料持っていたのかな。まだやめてどこかへ行ったくらいのときだから。

西平 だから、記憶はあるでしょうけれどもね。初めのころのはみんな持ってないんじゃないですか。

水野 研究所で、三軒茶屋のとき、全国市町村の層化をやったろう。

西平 新橋のときもやりましたよ。

水野 新橋から始めた？

西平 新橋に通っていました。

水野 あのカードがどこかにあるはずだ。統計局へ持ってきたのを、どこかが写させてくれと言って写したのがどこかに残っているはずだ。

西平 何度かやって、あと、国民性でもずっとああいいうことやっていたからね。僕が担当していたときにやっていて、それが、場合によっては、毎日にやってもらって、それを写すとか、逆に、僕の方がやって写させたりとか、そのかわり、別に資料交換ということで何度かやりとりしています。NHKにも、貸したとか借りたとかあるんですよ。

水野 そういうのを集めて記録しておくからね。

西平 あのときのわら半紙のあれは、持っただけですけれどもね。

水野 オレにいわせれば、そういうのは、統計学発展研究のりっぱな部分になっているんだけれども、普通の学がどうのこうのと言っているのだと、そこら辺がみんな外れちゃったものを意識されているような気がする。

西平 たとえばサンプリングをするのでも、この間、統計局からテープをもらってきたから、これで何でもやれますと言って、結局何もできないわけですよ。たとえば、ルーチンワークでしょっちゅうサンプリングをやるというなら、それをいじって何かしてということできるでしょう。国民性調査を5年に1遍やるためにそんなことやれやしないわけですよ。だから、研究所のサンプリングだって、雑に雑に、手を抜こうということになる。コンピュータのおかげで、手を抜こうということになるわけですよ。目に見えないですからね。

水野 あの色紙もそうだよ。研究所でつくったのを統計

計局がコピーしたんだ。だれがいったのかな。それもあった。

西平 一番初め大きくやったのは、パッシンのところで産児制限の調査をやるということで、とうとう実際にはされなかった調査のときですよ。NHKとどっちが先かな。

水野 NHKだよ。

西平 こっちで、新しいデータも出たし、やろうというので、みんなでつくった。

水野 何しろ大きい領分を始めた初めはNHKだと思う。

西平 レッドパージのころですよ。

水野 毎日の調査網とNHKの調査網だと、NHKの方が先にできるようになったのかな。

西平 NHKのは、サンプリングをやる組織はできたわけですよ。毎日で宮森さんが自慢しているのは、調査員を置いたということなんです。だから、それは毎日の方が先です。宮森さんがそういっていたから、きっとそうでしょう。NHKの方は、いつでもできるぞという体制だった。

ただ、毎日の方は早くつぶれちゃって、組織がダメになっちゃったし、NHKの方は、初めは駐在員というのが各県庁の所在地ぐらいに、0.5人分の予算をつけて、要するに、おまえは調査もやるんだ、レポーターもやるんだということ。しかも、ちゃんと講習会をやったりしていた。その意味じゃ、NHKの方がきちんとしていいますよ。

水野 それはそうだ。

西平 毎日は、久保田さんのときに、彼が全然調査をや

らないといつて、読書調査しかやらない年だってありましたからね。

水野 オレがやめたのはちょうど久保田君がやっているところか。

西平 久保田さんはきつとそうですね。

水野 実は、全国で調査できる組織なんというのは大変なものなんだけれども、それは雲散霧消している。あのときには、NHKは井上さんがしっかりしていて、ちゃんとわかっていたはずなんだけれども。井上さんがやめて、井上さんの蔵書はどうなっているの。

西平 上智のマスコミュニケーション研究所。

水野 それで、いまの関係のものはどうなんだろうね。

西平 それはあるかもしれません。

水野 ちょっと、そこでひとつ見てみる必要があるな。発掘に行く必要がある。

西平 どういうぐあいになっていきますかね。

水野 これはあっちの方でもいったんだけれども、アメリカでこのごろ、占領中の記録をやっているんだね。あそこら辺だつて、よっぽど時間かけていかなくちゃダメだろうけれども、行ってみると、パツシンのところのやつだつて、沖縄のだつて出てくるんじゃないかと思う。パツシンに聞いたら少しはわからないのかしら。

西平 彼は一応話はしてくれましたが……。

水野 パツシンのやつを一回見せてもらいたいな。

西平 でも、彼の個人的な記憶の話が多くて、むしろ日本世論調査協会の会報にみんなが寄ってたかって書いているものの方が詳しいですよ。

水野 ただ、だれかがいつ思い出すと、それに関連して

思い出すこともある。パツシンが細かいことといってなく  
 ても、パツシンが何か触れていることで、こっちの記憶  
 がはっきりするということはあるからね。  
 統計局のいわゆる研究らしいことというのと、オレが来  
 たときには、統計局には研究課というのがあって、オレ  
 は研究課がつぶされたときの最後の課長なんだ。だけど  
 統計局の官制から統計の研究がなくなっただけじゃなく  
 で、それがずっと続いている。そして調査官になって、  
 こっちの調査官の職掌に研究がくっついていたわけだ。  
 統計局の5つの職責の中で、国勢調査なんかを実施する  
 こと、集計すること、いろんなdataを集めて年鑑等を刊  
 行すること、統計の研修をすることの4つと比べて、研  
 究も大事なものだと思っているんだ。ところが実際では、  
 ただ調査をし、集計し、あと刊行するぐらいで終わっ  
 ちゃっているんだ。そこら辺は大事だといっているのだか  
 ら、もうちょっと、直接には統計学会ぐらい出ていっ  
 たり、中で皆に研究的なことをやらせたいというので、一  
 時研究係が各課にできたり、研究連絡会議なんかやって  
 いた。しかし、そういうのを研究する役人というのは、  
 必ずしも適正なやつがそのポストに来るとは限らないか  
 らね。このごろは、そんなことをハッパかけるやつもい  
 ない。統計審議官というので、研究とか技術的なことで  
 めんどくさいを見るようになっていっていると思うんだけど、  
 どうも余り、目をむくようなものは出ているような気が  
 しない。  
 官庁の部局の中の研究というのは、もう少しまとめさ  
 せる必要があると思うね。大したものを出てなくても、  
 それなりに、カレントな人口集計とか、学問に値するか

どうかなんという議論があろうとなかろうと、実際問題  
 からいったら、非常に重要なものだしな。  
 僕が知っている二十何年の間でも、この組織がどうな  
 ってきたかという、昔は数理係があって、森岡とか鍋  
 谷がやっていたし、総合分析を福島君がやっていた。そ  
 れがなくなっちゃって、研究係とか総合分析係とかにな  
 っていたんだけど、現在では、総合分析という名前  
 で労働局の中に係1つが残っているかもしれない。  
 製表は1つの課について、全般のことをやっている。  
 ところが、ねらいはあれでも、そのときの課長がそうい  
 うことに余り意識がないと、ただそれは、タスクフォー  
 スというか、そのとき忙しい仕事の援軍にしちゃって、  
 そんな研究なんていまやってもやらなくてもいいという  
 ことになる。  
 やっぱ、そこら辺のをやるのに、だれでも発令すれ  
 ばいいというんじゃなくて、人間を見て発令しなくちゃ  
 いけない。そして、そのための予算をどのくらいとるべ  
 きなのかを決めるべきだ。たとえば、国勢調査をやっ  
 ているところは、行政整理で1回つぶしたって、次の行政  
 整理までの間に、それはなくちゃ困るというのでやるわ  
 けで、よそではそれをしてるんだけど、統計局は、  
 研究課をつぶしちゃったから、もとに戻すわけにいかな  
 くなっちゃった。組織があれだし、やはり全般的には重  
 要と思われていないということになるんだろうな。研究  
 をやらなくたって、統計局の仕事は済んでいる。  
 西平 日本の場合、要するに、1人のスペシャリスト  
 をつくるよりは、みんなに何でも知らせるというので、  
 それで一応成功もしているわけでしょう。全体の基調が

そういう方向ですから、エリート教育というのは悪いこ  
 とのようになされる。  
 水野 いや、エリートをつくるということじゃないんだ。  
 西平 その問題のエリートというのをつくって、その問  
 題についてはその人が指導していく。そういうことは日  
 本では悪いことであって、みんながある程度こなす。今  
 日の日本の成功の秘訣はそこにもある。  
 水野 それはそうだ。だけど、皆がこなした上に、その  
 エリートがあすの問題を考えているのだったらもっと成  
 功するはずだ。この点は、戦後の日本の企業では研究と  
 か開発を相当やったんで、何とかなったんだとオレは了  
 解しているんだが、どうだろう。  
 西平 そうですかね。  
 水野 やはり、研究投資というのは相当なものだよ。  
 西平 しかし、75年ぐらいからは違うでしょうが、60年  
 代、70年代は、研究なんかにカネを使うのより、パテ  
 ントを買う方がずっと安い、早くパテントのいいものを見  
 つけろということだった。  
 しかも、僕が驚いたのは、30年ぐらい前に火力発電所  
 に行ったら、高校生ぐらいのやつが、字引き引き引き英  
 語のマニュアルを読んで発電機を動かしているわけです  
 よ。彼らがそれを行ったということが、やつは、日本の  
 成功の秘訣だと思わなくてはよ。  
 水野 いまのレベルの高校生はそれができるかどうかわ  
 からないけれども、そのころ、高校生のいいやつを採っ  
 てきてやれば、英語の辞書引き引きマニュアルをちゃん  
 と読む程度の普通教育が日本はうまく行っていた。これ  
 はいろいろなことで認めるよ。明治以降、みんなそれで



支えられてこんなになっているんだから。だけど、新しい問題に対しては、それだけじゃちょっとダメなんだ。やっぱり、あすに備えるのにはそれだけじゃダメなんだ。統計局で「研究彙報」というやつが出ているんだけれども、これは相変わらずいまでも不定期で、1年に1冊出るか出ないかぐらいだろうな。

水野 現在から将来の問題みたいで、このインタビューに合わないかもしれないけれども、もう1つオレが挙げたいのは、公務員になろうというやつ意識がまたちょっと違っちゃっている。ことに統計局で採るのには、法律をやって行政で入ってくるのもいるし、数学をやったやつもいるわけだ。数学の試験がどうであるか、それに対してどんな用意をしてきたかということ、彼らのあれが違ってくるといふ点もあるんだけれども、行政で入ってきたので、私は数学だとか統計だとかをやるつもりはない、いわゆる行政一般をやるつもりで、あちこち働いて、しまいにどこかの局長とか次官になる。そこら辺をねらってきているんで、統計、いわんやその研究なんてアホなものにはという言い方をしたわけじゃないけれども、そういう精神構造のがふえているということだ。それはここだけじゃないのかもしれない。だけど、そうだとすると、やはり日々の行政にも研究的なものが大事だということ、改めて連中にいってやり、それを常識に直さないとどうにもならない。

オレも、それを伺って実はたまげたんだ。いままでだったら、大学で数学をやって統計局へ入ってきたら、それはやっぱり統計やるつもりで入ってきた。それがオレは統計やるつもりはない、行政職で受けてなったんで

行政官になるんだという。もちろん中には、数学をやっ  
てそう思うやつが出てくるのも結構だし、法律やって統  
計数理をやるのが出てくる。こういうような相互乗り入  
れなら大いに結構だけれどもね。話が飛ぶようでも、こ  
れもやっぱりマイホーム型志向と関連あるんだろうな。

西平 よく林さんなんかとも話するんだけれども、たと  
えば末細さんとか吉田洋一先生という人たちは、数学以  
外のいろんなことに興味を持っていたわけですよ。とこ  
ろが弥永先生はまたフランスに興味を持っているからい  
いけれども、もう少し下ぐらいになると、もう数学しか  
やらないわけでしょう。そういう人に教わってきたわけ  
だ。このごろ研究所で、東大の数学を出たのはほとんど  
採ってないんじゃないですか。要するに、最近数学科を  
ほとんど採らないですよ。

水野 オレもそういう見方しなかったけれども、確かに、  
数学以外に興味を持っている人たちは、どこかおかしい  
ところがあっても、ちゃんと人間だったし、実にしっか  
りしているようなところがあった。

西平 窪田先生だって、数学に役に立ってうれしいとい  
ってみたり、いろいろなことがあったけれども、それか  
らもう少し若い人たちはね。

水野 弥永昌吉ぐらいからだね。

西平 いや、弥永さんはやっぱり趣味人ですよ。だけど  
フィールズ賞あたりもらう人ぐらいになると、数学はす  
ばらしいでしょうけれども、物理だって力学だってどう  
ですか、個人的にはよく知らないけれども。

水野 そういう点、西平も、数学やって選考なんかやっ  
ているからましなんであって……。

西平 雑学だからやっている。(笑)

水野 それは冗談でなしに大事なことだ。数学だけじゃなしに、他の問題でいろいろしないとダメだ。何も具体的なデータを開陳しているわけじゃないんだけれども、そこら辺も残しておいて、だれか読んでくれると、少しは参考になるかもしれない。

統計学研究では、外国ではどうしているかということを作りあいにいつているからいいかもしれない。さっきいった統計の実務の点で、確かに、外国の計量経済がどうだこうだということに関連していつているのかもしれないけれども、どうなんだろうな。日本でやったものについては、それが外国でどうなっているかなんという点で取り上げようという意識が非常に少ないんじゃないかね。

西平 それこそ、デュルケームが日本の自殺統計を使ったとか、江戸時代の人口調査なんというのは、よく知られていますよ。だけど官庁統計が多過ぎるんじゃないですか。

水野 多過ぎるよ。さっきオレがいったことは、あすのこととも意識しないし、いまやっているこのことだけで、他の国でも似たようなもの、または、違った状況のもとに違ったことや同じことをやっているから、ほかはどうだろう。日本の位置はどうだろうというような発想がないということだ。だから研究も出てこない。嫌でもその研究は要るね。外国出張の旅費のときなんかにはそんなことは書くけれども、本気でそう思い込んでないから。

西平 もう一つは、外国人が日本語ができないからという問題があった。できるやつは語学屋であり、文学屋で

あった。ところが、このごろはそうじゃない。統計の専門家で、片言であろうと何であろうと、日本語のできるやつが何人かいるわけですよ。そういう人たちがいろいろ紹介すれば、向こうの連中も興味を持ってきて、いろいろということがあると思うんです。

水野 少しはね。だけど、そういう連中が日本語でわかるのでも、さっきからいっているように、官庁とかの一般の統計関係者の意識が外にはなくて、中だけで、きょうのことだけでどうのこうのといっているから、なかなか肝心なところまで酌み取るまでにはいかないだろうと思う。

西平 いま研究所にノースキャロライナから来ている人は、片言の日本語ができる。

水野 片言よりいいだろう。

西平 去年フランスから来ていたやつは、地震学の統計みたいなことだけれども、ペラペラだった。彼なんかよりよっぽどうまくて、講究会でも日本語で話しました。

ただ彼も、講究会で日本語で堂々と、「日本の研究者は安全を期して、人がやった研究しかやらぬ。われわれはそういうことはやらぬ」といわれちゃうんで、みんなギョッとなつて、生意気だっというやつもいたけれどもね。(笑) 英語でそういうことをいわれても、余り聞こえないふりができるけれども、日本語でいわれると……。(笑)

水野 統計学会成立50年のころに眺めた日本の統計研究という、というふうな側面、問題点があるということとはやはり大事なことだ。

また、こんなケケをつけるフォーラムではないが、多くのいわゆる統計学者が、外国で問題になったことを――

よく、 $N = 1$  を 2 にし、2 を 3 にするというけれども、新しいジャンルの生きたところから問題を拾おうという努力はほとんどないということだね。

西平 しかし逆に、日本の発展の秘密は、何か一つ新しいのが出ると、寄ってたかってワツとやるから、そこに進歩があるんで、フランス人みたいに、人のまねはしませんなんていっているとダメだ。

水野 おくれなんいだよ。おくれないけれども、先に行くかという、それだと絶対に先に行かないわけだ。

西平 しかし、その問題をちょっと延ばすことはできるでしょうけれども、新しい問題は出てくるかどうか。

水野 相変わらず、日本人が発明したものという、人車ぐらいじゃないのか。それからあと、何かあるのか。

西平 地下たびとニまたソケットでしよう。地下たびをつくったのが石橋ブリヂストンで、ニまたソケットをつくったのがナショナル。松下幸之助はあれでもうかった。

水野 統計研究はどこからテーマを見つけるかということとして、統計研究の結果じゃなしに、生きた日常の場で統計的に考えて、何か問題を見つけるということがもっと強調されるべきなんだ。

西平 ほかの国の学会はどうですか。

水野 ほかの国だってよく知っているわけじゃない。

西平 だけど印象としてね。

水野 一般的には、日本の統計学会でも、昔は、官庁の統計学者、経済統計学者なんてはっきり分かれているんじゃないしに、大体呉文聡とか、杉亨二なんかだって、役人であって、統計学のファウンダーとも一面ではいわれてたりしている。ある意味では、ISI ができてきたのだ

って、ヨーロッパなんかそうだろう。だから、その伝統を引いていると思うんだ。

この間招かれて行ってきた台湾でも、ここやってい  
る学会の問題というのはほとんど、政府でどんな統計を  
出さなくちゃいけないか、出ているのはどうのこうのと  
いうようなことで、政府の関係者だけじゃなさそうなん  
だけれども、いまのああいう体制だから、どこかの大学  
の先生と公務員とはどこかでつながっているのかもしれ  
ない。

それこそ、中には式だけころがしているのもないわけ  
じゃないと思うけれども、やっぱり統計というのは、式  
をころがすよりも、もっと前のところが大切だ。そのよ  
うなものがたくさんあった中で、その中には、一部分だ  
けれども、非常に数理的なものだけにスペシャライズさ  
れたグループができて、それだけで学会を1つつくると  
いうふうに育っちゃっているのはもちろんあると思うし  
そのようなかっこうで出てきていると思うんだ。けれど  
その下に、たとえばアメリカン・スタティスティカル・  
アソシエーションといって、中学校の先生から、インタ  
ビュアーから何からみんなワツと入っているというかっ  
こうのものがあって、そこで皆で、統計をいろんな面か  
らつついていくわけだ。おととい小川君と話していたの  
は、統計学会が統計学の研究というのは気に入らないと  
いうわけでやっていたんだけれども。

西平 日本では、そういう人まで入れちゃったら  
は、たとえば学術会議でも、きっと入れてくれないでし  
よう。おまえのところから連絡委員を出せなんというこ  
とはいわなくなっちゃいますよ。ほかの学会がみんなそ

うだからね。

水野　ただ、医学会というやつは、研究しているのと、メディカル・プラティショナーと両方いるわけだ。大学では確かにある程度専門のをやったけれども、オレは研究しないで毎日患者のめんどろを見ているという人だっていて、むずかしい病気のとときには専門病院へ送るよといっている人も、またリッパな医者だと思う。これも、医学会なら会員としてリッパに入っていると思うんだがね。オレ、統計にそんなのがあってもいいと思うんだ。

西平　それはいいけれども、学会というものは、学会でやっぱりある程度メリットがあるわけですよ。たとえば、科学研究費の審査は学会が推薦した人がやってくれるんだから、それがもしそういうことになってしまえば、おそらくそういう審査員はその中から……。

水野　いや、だから、調査員を全部入れるというところまで行くと行き過ぎだろうけれども、いまでもよそでは、いわゆる官庁統計家が、自分は場違いなところに出てきたという意識を持たずに参加してやっているように思えるんだよ。ところが日本だと、そういうのはだんだんに入っていたのも外れるような状態だ。オレは何も、すべての国勢調査の調査員を入れろといっているんじゃないんだ。オレは学の研究をしているかという、統計学の研究をしているとは思っていないんだけれども、普通の統計学の研究していると思うやつより、オレはもっとましなことしたり、関与したりしているつもりがあるんだけれどもね。統計学の研究発展に無縁ではないわけだ。

一番初めにいったが、そこら辺のところがちょっと困るんだよ。小学校だと、数学といわないで算数といっ

いるし、経済と経済学というかつこうでいいんだけれども、統計と統計学は、ちょっとそのところでニュアンスに差があつてね。

西平 ほかの学問分野がそうだから、日本の風土では、そうしておかないで、「統計学じゃないんだ、統計一般だ、境がないんだ」といったら、学問の研究の部門から押し出されちゃう。

水野 名前は学会でもいいが、学会が目的に「統計学の研究」だけ書いているのが気に入らぬというんだ。これの基礎になったり、関連したりする統計の進歩発展に興味のある連中はお入りくださいぐらいになっていれば、文句いわないんだけれども、何かいわゆる統計学の研究になっているところが……。

ことにこのごろ、統計教育の問題については、推進委員会なんというのをつくってもう10年近くなるのかもしれないけれども、みんな大事だ大事だといっていて、そう思っていることも間違いないんだけれども、やはり直接自分たちの職業とか、それにすぐ近く見えるところは高校ぐらいまでなんだ。高校へ来るまでは、小中学校があるということを知っているから、高校以前も大事だということはいうけれども、どうもそこら辺の実態とか、それをどうするとかをわかっているつもりなのか、そんなところまで調べないでともうか、余り知らない。オレなんか全然知らなかったし、聞いてみたって、そこまで知っているやつはそうたくさんいるわけじゃない。統計学の研究だけじゃなしに、統計の技術、理論、方向の教育だつて、やっぱり統計学会で重点を入れてもらいたいような気がする。